

令和 2 年度

教 育 研 究 集 録

令和 3 年 3 月刊行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

令和2年度「教育研究集録」刊行に当たって

ピンチをチャンスに 先生方の熱い思いと底力を実感



新年度が始まり、先生方には、新鮮な気持ちで教育活動等に勤しまれていることと存じます。また、コロナ禍の中で、子どもたちの安全・安心の確保のために種々ご尽力されていますことに敬意を表しますとともに、平素から、公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の各種事業の推進にご理解とご協力を賜っておりますことに、深く感謝を申し上げます。

当弘済会では、「最終受益者は子どもたち」という理念の下、青少年の健全な成長を願い、子どもたちや先生方、学校の応援団として教育振興事業等を実施していますが、その一つとして教育研究論文・著書の募集を行っています。これは、教育関係者が使命感を持って、日々行っている教育実践の優れた研究をご応募いただき、その成果を普及するとともに、こうした自主的な研究・研修の輪が更に大きく広がることで、学校園や地域の教育力の向上に資することを目的としたものです。

本年度、学校部門・個人部門・著書部門の3部門で募集を行い、学校部門で14編、個人部門で22編、著書部門で4編の合計40編のご応募をいただきました。本年度はコロナ禍の影響で応募数が減少するのではとの心配もありましたが、先生方の実践研究にける心意気を見たようで大変嬉しく思いますとともに、多くの方からご応募いただき、誠にありがとうございました。

論文の内容としては、学力や授業力の向上、プログラミング教育などの授業研究に加え、コロナ禍の影響を受ける中、オンライン授業や自主的な学習の支援といった新しい実践研究や、中学校区で地域を取り込んだ共同研究も見られるなど、まさにピンチをチャンスに変える、実に多彩で、しかも最近の教育の方向性や課題を踏まえたものでありました。これらの論文のうち3点を日教弘教育賞に推薦しましたが、この度、県立林野高等学校のChromebookの効果的な活用に関する論文が全国の最優秀賞に選ばれましたことは誠に喜ばしいことであり、心からお祝いを申し上げます。

当弘済会としましては、こうした素晴らしい実践研究が更に広がるよう、優良以上の論文を冊子にまとめ、学校に配布しています。また、冊子の最後には、本年度の日教弘教育賞の全国最優秀論文も掲載していますので、教育研究実践やまとめ方の参考にしていただければ幸いです。

結びに、大変ご多用の中、論文審査に当たっていただきました中国学園大学副学長の住野好久先生をはじめ、審査委員の先生方に厚くお礼を申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部
支部長 竹井千庫

巻 頭 言



審査委員長（中国学園大学・中国短期大学 副学長）住 野 好 久

新型コロナウイルス感染の広がり、これまでの学校の日常を奪い、価値観をゆさぶる、教員には新しい教育の方法とスキルを求めました。例えば、遠隔教育の仕組みを使ったりリモート授業は、国のGIGAスクール構想が始められる前から、十分な環境やスキルのない状態にもかかわらず取り組まなければいけなくなりました。そして、教育活動の中で密集し、密接した会話をすることが制限されました。このように学校が新しい状況・課題への対応に追われる中、日教弘の教育研究論文・著書助成事業にどれだけの応募があるか、とても心配しておりましたが、学校部門14編、個人部門22編、著書部門4編と、昨年度と同様の応募がありました。まず、ご多忙の中、応募下さった先生方にご努力を労い、感謝申し上げたいと思います。

さて、今年度の応募論文の全体的な特徴を整理すると、まず学校部門では新しい状況・課題に積極的に取り組み、その成果をまとめた「課題性」の高い教育研究論文に素晴らしいものが多くありました。例えば、新型コロナウイルス感染症に対して積極的・創造的に取り組んだ林野高等学校、玉野光南高等学校、新・学習指導要領の提起の中から「社会に開かれた教育課程」に着目した草間台小学校、「カリキュラム・マネジメント」に着目した倉敷工業高等学校等です。授業改善、学力向上、生徒指導、ESD等に関する教育研究論文も子どもたちの変容が見える素晴らしい「実践」なのですが、これまで行われてきた取組に何を付け足し、どんな工夫をすることで、今の子どもたちに求められるどのような資質・能力を伸ばしたのか等々、創造的な取組や新しい意味づけがないと「教育研究論文」としては魅力がありません。

学校部門の最優秀賞に選ばれた林野高等学校「ハイブリッド型授業による主体的・対話的で深い学びの創出－ひとり1台所有のChromebookの効果的な活用」は、ひとり1台タブレットを手にし、オンラインでの指導ができる学習環境になることで、どのような学習指導や学校での利用ができるようになるのかを、若手からなるプロジェクトチームが創造的な実践に取り組み、その成果と課題を明らかにしながら追究したものです。Chromebookを活用する際のメリットとデメリット、そして、学校に普及するための要点が実践事例をふまえてわかりやすく示されており、多くの学校にとって活用できる情報を提供しています。

個人部門は、小学校から9編、中学校から7編、高等学校から5編、特別支援学校から1編の応募がありました。多く取り上げられたテーマは、まず理科、国語、社会科等の教科指導に関するものです。これには、新しい視点を組み込んだ実践を取り上げたものと、これまで取り組んできた実践をまとめたものがありました。高く評価されたのは、今なぜこのような授業実践に取り組むのかが明確なもの、そして子どもの主体的・対話的で深い学びの姿が見えるものでした。また、個人部

門ですが、学校での教員研修を取り上げ、その目標・内容・方法・組織等を工夫して取り組み、その成果を分析・評価したのも複数ありました。

個人部門の最優秀賞に選ばれた金田典子先生（岡山中央小学校）の「コロナ禍に負けない自主学習力を育む学び方改革—自主学習を核として主体的に学びを進める子どもの育成をめざして—」は、コロナ禍のもとでも「PDCAサイクルを生かした自主学習を確立し、授業の学びが連続する学習材と学び方を発信することで、学校と家庭とが連携した児童への関わりが可能となり、児童の主体的な学びに向かう態度を強化する」ことができるという仮説を設定して取り組んだ実践研究です。わかりやすく、多くの学校で活用できる学習材や学び方が具体的に提案され、小学校では定着させるのが難しい家庭での自主学習を定着・発展させるのに有意義なものであると高く評価されました。

著書部門は4編の応募がありました。うち、松浦敏之先生による『みんなでできる！ 超盛り上がる！ 算数パズル・ゲーム60』（明治図書）はこれからの授業改善に使える教材が盛りだくさんで、優秀賞となりました。

最後に、10年近くやってまいりました本事業の審査委員会委員を今年度で卒業することになりましたので、一言、私の思いを書かせていただきたいと思います。私は教育の質を上げるためには、教育実践を研究的に省察することが不可欠と考えています。すなわち、子どもたちに育みたい資質・能力を明確にし、そのためには「こうしたらいいんじゃないか」という仮説をもって実践し、実践の事実を客観的に省察し、子どもたちの育ちを明らかにしながらそれを引き出した実践の仮説の有効性を検証する「教育実践研究」、それを共同で行う「園内・校内研修」や教育研究サークルでの実践研究です。そして、個々の教師や各学校が検証した「仮説」を同じ課題を持つ教師や学校が共有し、追試することで教育界全体の教育の質を上げていくことです。日教弘の教育研究論文においても、この観点から審査することにこだわってきました。その結果、岡山から選出された論文は全国でも高く評価されてきました。また、応募される論文においてこうした実践の仮説を子どもの事実をもとに検証する実践研究スタイルは普通のものになりました。この事業を通して、岡山県の教育界に、ほんの少しですが貢献できたかなと思っています。

今後も日本教育公務員弘済会岡山支部とこの教育研究論文・著書助成事業、そして先生方の教育実践研究のますますのご発展を祈念しております。長い間、ありがとうございました。

祝 辞



岡山県教育委員会 教育長 鍵 本 芳 明

公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の令和2年度「教育研究集録」が上梓されるに当たり、並々ならぬ御研鑽を重ねられ、このたび教育研究論文及び著書の部で受賞されました方々に、心からお祝いを申し上げます。

さて、人口減少社会や Society5.0時代の到来、グローバル化の進展など、社会情勢が変化し、将来の予測が困難な時代となる中、子どもたちに自らの進路を切り拓く力を確実に身に付けさせるとともに、郷土岡山を愛し、広い視野に立ってより良い社会づくりに積極的に貢献する人材を育成することがますます重要になっております。

今年度から順次全面実施されている新学習指導要領においても、これまで学校教育で目指してきた知徳体のバランスのとれた生きる力の育成を継続するとともに、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、学びに向かう力・人間性の涵養を重視し、未来社会を切り拓くための資質能力を育むことが求められております。

こうした状況の中、県では、2月に「心豊かに、たくましく、未来を拓く」人材の育成を基本目標とする「第3次岡山県教育振興基本計画」を策定し、今後4年間に推進する施策の具体的な内容やその工程をお示ししたところであります。このようなときに、教職員が学校現場で創造的に教育実践に取り組み、それを実践研究として取りまとめ、お互いに研鑽を重ねることは非常に意義深いことであります。

このたび、受賞されました教育研究論文や著書は、ICTの活用や地域連携、授業改善等、多岐にわたっておりますが、いずれもそれぞれの学校や地域の実態を踏まえ、課題を検証し、重点化・具体化した改善策を示す研究であり、多くの教職員の資質・能力の向上のため、広く活用していただけるものと考えております。

そして、受賞された皆様方には、今回の受賞を更なる契機として、引き続き実践や研究を深められ、それぞれの学校や地域の先導役として御活躍いただけることを期待しております。

終わりにになりましたが、教育研究助成事業の実施に当たり、御尽力いただきました関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の今後ますますの御発展を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

令和2年度 教育研究論文・著書

審査委員名簿

(敬称略)

審査委員長	中国学園大学・中国短期大学副学長	住野好久
審査副委員長	岡山県総合教育センター企画調整監	矢吹玲子
審査委員	岡山大学特任教授	荒尾真一
審査委員	岡山市立西小学校長	高尾敏也
審査委員	岡山市立瀬戸中学校長	戸井道彦
審査委員	岡山県立倉敷南高等学校長	鳥越信行
審査委員	岡山大学特任教授	平野和司
審査委員	元小学校長	武藤幹夫
審査委員	元高等学校長	山本近信

目 次

(所属は令和3年3月31日現在)

論文 (学校部門)

〈最優秀・日教弘教育賞最優秀賞〉

1. ハイブリッド型授業による主体的・対話的で深い学びの創出
—ひとり1台所有のChromebookの効果的な活用—
岡山県立林野高等学校 校長 竹内 成長 …………… 1

〈優秀・日教弘教育賞奨励賞〉

2. 首長部局・地域との協働による「社会に開かれた教育課程」で育つ子どもたち
—「草間台こども観光大使」の取組を中心に—
新見市立草間台小学校 校長 三上 裕弘 …………… 5

〈優秀〉

3. 自信と誇りを持ち、ひたむきに躍動する生徒の育成
—学びと育ちをつなぐ「かつたっ子15の春プロジェクト」を通して—
美作市立勝田中学校 校長 景山 智子 …………… 9
4. 倉工スタンダードを学校経営目標に位置付けたカリキュラム・マネジメントの実践
—ものづくりを通じた人づくり—
岡山県立倉敷工業高等学校 校長 安藤 正道 …………… 13

〈優良〉

5. 一人一人の思いや願いから学び合いの姿が生まれる授業を目指して
—学校レベルで授業力向上を図る校内研修の取組—
岡山市立西大寺小学校 校長 田中 一郎 …………… 17
6. 集中力を高め、学びの意欲と生きる力を育む学校づくり
—全校で取り組む徹底反復学習を基盤として—
高梁市立有漢西小学校 校長 本倉 弘美 …………… 21
7. 特別活動を通して、児童の意欲を育てる学校づくり
—「役割」「期待」「承認」のプロセスを意識して—
赤磐市立山陽東小学校 校長 石原 順子 …………… 25
8. 「不登校ゼロ」の学校づくりに必要なこと
—児童の実態分析と本校の取組の検証を通して—
岡山市立浦安小学校 校長 服部 道明 …………… 29
9. パンデミックの中、OECDが推進する「エージェンシー」育成を目指すICT活用の開発
—コロナ禍で実践する「異力(普通科・情報科・体育科)の統合」を目指して—
岡山県立玉野光南高等学校 校長 三澤 宏之 …………… 33

論文 (個人部門)

〈最優秀・日教弘教育賞奨励賞〉

1. コロナ禍に負けない自主学習力を育む学び方改革
—自主学習を核として主体的に学びを進める子どもの育成をめざして—
岡山市立岡山中央小学校 指導教諭 金田 典子 …………… 37

〈優秀〉

2. みんな分かる・みんなできる【かがやき学級】を目指して
—学びに前向きに取り組む学級集団づくりについての一考察—
真庭市立米来小学校 教諭 森岡 浩美 …………… 41

3. 児童の意識を大切に、深い学びをめざす理科学習 —3年生「音を出して調べよう」の実践— 赤磐市立山陽西小学校	指導教諭 東野圭佑	45
4. 「キャリア・パスポート『スタイルブック』を活用した質の高い振り返りの実践」 —学びに向かう力の育成と進路実現に向けた効果的な指導を目指して— 岡山県立井原高等学校	主幹教諭 前崎靖彦	49
〈優良〉		
5. 多層的支援体制の構築による「一人も置き去りにしない学校」を目指して —特別な教育的ニーズがある児童への指導・支援を「アップデート」できる学校体制づくり— 津山市立北小学校	校長 吉田英生	53
6. 人材育成を念頭においた同僚性形成に関する試み —より鮮明なVisionの展開にむけて— 岡山市立芳泉中学校	校長 山崎克磨	57
7. 「学習するチーム」の形成と成長に関する考察 —「学習する組織」の理論に依拠した自発的職能向上チーム形成の実践モデル— 岡山市立福浜中学校	校長 藤枝茂雄	61
8. 「共通言語」としての媒体を取り入れた教員研修と「総合」の指導に関する考察 —異教科間、異校種間、異国間交流の障壁へのアプローチ— 岡山市立福浜中学校 研修・総合推進グループ	教諭 松浦藍	65
9. 買い物の場面での英語を用いた即興的な「やりとり」を行うパフォーマンステストの実践 —生徒が楽しみながら「何ができるようになったか」が分かる実践を目指して— 岡山市立興除中学校	教諭 阿部聡生	69

著書部門

〈優秀〉		
1. みんなでできる！超盛り上がる！ 算数パズル・ゲーム60 岡山市立建部中学校	校長 松浦敏之	73
〈優良〉		
2. ふるさと風土記矢掛	退職者 鳥越昌	75

令和2年度「日教弘教育賞」

〈最優秀賞・学校部門 岡山支部推薦論文〉		
ハイブリッド型授業による主体的・対話的で深い学びの創出 —ひとり1台所有のChromebookの効果的な活用— 岡山県立林野高等学校	校長 竹内成長	1
〈最優秀賞・学校部門〉		
業務改善をめざした職員研修の進め方 —メンタリングによる研修の運営を通して— 福岡県粕屋郡久山町立久原小学校	校長 重松宏明	79

奨励賞の所属・代表者名（氏名）・研究題目の一覧表〈参考〉

論文（学校部門）

所 属	代表者名	研 究 題 目
高梁市立 成羽小学校	校長 関 孝之	確かな学力と豊かな心を育む授業づくり —互いに関わり合って学ぶ児童の育成（算数科）—
岡山市立 大宮小学校	校長 小山 典子	子どもの自尊感情を育む「大宮小のESD」 —歴史や自然、地域の人々との関わりを通して—
真庭市立 木山小学校	校長 中村 光広	笑顔で元気に学ぶ子をめざして —一人一人が自分のよさを発揮できる学校をめざして—
岡山市立 山南中学校	校長 日笠浩四郎	地域と連携した小中一貫教育の実践 —岡山県初の義務教育学校の設立に向けて—

論文（個人部門）

所 属	氏 名	研 究 題 目
総社市立 総社小学校	教諭 角田 早苗	プログラミング教育の視点を生かした小学校理科の創造 —論理的思考力を高める第6学年「水溶液の性質とはたらき」の実践—
倉敷市立 川辺小学校	教諭 土井 理子	説明文を読むという行為 —何をなぜ教えるのか—
井原市立 出部小学校	校長 森川 孝一	子どもがよりよく成長する豊かなつながりを求めて —成長のためのつながりづくりを通して—
津山市立 一宮小学校	校長 尾崎 文雄	小学校高学年における「教科担任制」の実践とその考察
倉敷市立 箭田小学校	講師 濱井 真理	小学校通級指導教室における情緒障害児童（場面緘黙の症状を有する児童）に対する支援の実際 —「国語の教科書」を使った音読導入のこころみ—
備前市立 伊里中学校	主幹教諭 早川 政宏	進路指導主事の働き方改革 —進路事務軽減のための8つの取組—
岡山市立 竜操中学校	教諭 三好 正直	学校グループウェアを活用した教員研修の試み —SNSの活用による研修の効率化と学校の質の向上に向けて—
津山市立 中道中学校	指導教諭 近藤 圭亮	国語と社会の学びを活用し、生きる力を育む授業の実践 —「見方・考え方を働かせる」をキーワードとして—
岡山県立 岡山朝日高等学校	教諭 山川 宏史	超難関大学への数学指導の道 —3年間を見通した指導と、平素から考えさせる指導—
岡山県立 岡山城東高等学校	教諭 大西 浩史	語彙を豊かにし主体的・対話的な学びを深める漢文読解指導 —自主制作・漢語集『王道漢語』を用いた学習を通して—
岡山県立 倉敷中央高等学校	教諭 前田 昌義	新聞記事を活用した地歴科・公民科教育の試み

著書部門

所 属	氏 名	研 究 題 目
岡山県立 岡山城東高等学校	教諭 大西 浩史	王道漢語2020
退職者	宮本 進	「西田哲学」の場所的論理 —「場所的論理と宗教的世界観」を読み解く—



ハイブリッド型授業による主体的・ 対話的で深い学びの創出

— ひとり1台所有のChromebookの効果的な活用 —

岡山県立林野高等学校 校長 竹内 成長

【1. 研究の経緯と研究目的】

本校は、岡山県北東部に位置する美作市にあり、中山間地域の小規模普通科高校である。現在、生徒数は357名で、一昨年、創立110周年を迎えた歴史ある学校である。進路は国公立大へ約20名、私立大・専門学校等へ約90名、就職約10名で、多様な進路希望に沿った丁寧な指導を強みとしている。

平成28年度、美作市を通じて経済産業省からChromebook（Chrome OSを搭載したタブレット端末のこと、クラウド上で作業しデータもクラウドに保存され管理がしやすいことが特徴）を授業で活用する実証実験の機会をいただいた。新学習指導要領ではICTを活用した学習活動の充実が求められることを踏まえ、この実証実験をきっかけとして、平成29年度入学生から学年進行でChromebookをひとり1台購入（保護者負担）してもらい本年度で4年目となる。

平成30年度告示の高等学校学習指導要領では主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の配慮事項として「情報活用能力の育成を図るため、各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ること。また、各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。」と示されている。研究目的は、新しい学びを実現するためにひとり1台所有のChromebookを生徒の主体的・対話的で深い学びの実現のために、どのように活用することが効果的なのかを明らかにすることとした。

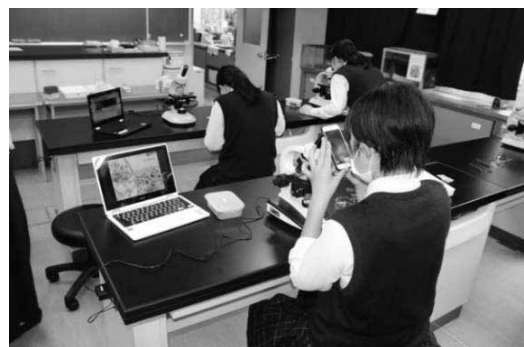
【2. 研究の仮説とその検証方法】

研究の仮説は「対面とオンラインによるハイブリッド型授業が主体的・対話的で深い学びの創出に有効ではないか」と設定した。指導教諭と、若手・中堅からなるICT活用プロジェクトチームを中心に指導方法の開発及び成果検証をおこなった。ハイブリッド型授業づくりの基本的な考え方は、生徒の理解状況を想定し、主体的・対話的で深い学びとなるように対面とオンラインによる指導内容をバランスよく設定していく

ことである。仮説の検証は、生物での「反転授業」実践、現代社会でのグループ学習の実践、「みまさか学（地域学・学校設定教科）」での探求とプレゼンでの活用実践の三つの実践を通して明らかにすることとした。

【3. 生物での「反転授業」】

生物の解剖授業である。授業の目標は「鶏の眼球を解剖することで視覚発生のしくみを理解する」である。授業づくりのポイントは、目標の達成に向けてオンライン（授業前）→対面（授業当日）→オンライン（授業後）の三つの場面へ指導内容をバランス良く配置していくことである。授業当日までに、Classroom（G Suite クラウド上の教室）へ授業の目標や解剖の手順、目標とする部位の画像等をあらかじめ動画で配信しておく。生徒は授業の目標や解剖の手順等を理解したうえで授業当日を迎える。授業当日は、教員の説明は最小限として、生徒は授業時間のほぼ全てを解剖に充てる。解剖手順や目標とする部位が分からない時は、事前に配信された動画を見返して解剖を進める。目標とする部位も動画に示してあり、生徒が教員を呼んで確認を求める場面は少ない。目標とする部位をスマホで撮影し、授業後、Classroomにより教員へ画像と振り返りシートを送信する。



動画で手順を確認しながら解剖していく

○授業後生徒アンケート

質問「事前に実験目的や手順を確認しておくことはどうか」

回答「確認しておくのがよい」→100%

○生徒の感想

- ・実験を通して何を学ぶのか授業前に知っておくことにより、達成すべき目標を頭に入れたうえで授業を受けられる。
- ・操作の手順や方法を動画で見て確認できるから、文章だけでは分からないところ分かる。

Classroomを活用した反転授業では、次のようなメリットがあると考えられる。

- ・授業前に、授業の目標や流れを知ること、興味関心を高め、主体性を引き出し、効率的な学習ができる。
- ・特に、実験等では、動画により手元を映しながら手順を説明できるので生徒にとって分かりやすい。
- ・今回は、特に、解剖ということで、教材に対する心理的な抵抗感を和らげることができた。

生徒は見通しをもち、振り返ることが可能となり主体的な学びに繋がっていると考えられる。その結果、教員の説明は最小限で済み、生徒の活動時間を最大限確保できるので、効率的な活動が可能となっている。このような指導は、家庭科や芸術、体育など実習や実技を伴う教科で特に有効であると考えられる。

また、実験結果をスプレッドシート（G Suite 表計算アプリ）を活用し、班ごとのデータや分析結果をクラス全体で共有化している。



化学 実験データを共有

○生徒の感想

- ・自分たちのデータだけだと不安になる。実際に多くのデータと照らし合わせることで、より確実な結果となる。
- ・自分の班の意見以外に、クラス全体の意見が分かり、いろいろな考え方ができるし、自分が見つけられなかったことを見つけられる。

スプレッドシートによる情報共有は次のようなメリットがあると考えられる。

- ・他の班の結果を確認しながら実験を進めることにより、実験方法の誤りなどをセルフチェックすることができ、主体的な学びとなっている。
- ・他の班の実験結果や分析結果、意見を共有することで多角的な視点をもつことができる。
- ・教員は全体の実験の進捗状況を把握し、きめ細かな声かけや机間指導等により、より深い学びへ導く支援が可能となる。

オンラインによる実験結果や分析結果、意見等の共有を通して他者に分かりやすく表現する力や、多角的な視点の獲得など、対話的で深い学びに繋がっていると考えられる。このような指導は数学や理科等の実験を伴う授業で特に有効であると考えられる。

【4. 現代社会でのグループ学習】

現代社会のグループ学習の授業である。目標は「相反する権利について、どのように調整し妥協点を見出すか」とした。Jamboard（G Suite ホワイトボード、付箋のアプリ）を活用し、個人の意見をグループで共有した後、クラス全体で共有していく。全体共有では黒板に各班の意見を映し出し、グループ代表の生徒が発表していく。教員がファシリテーターとなり、適宜、質問や意見を生徒に求めて盛り上げていく。



個人の意見をグループで共有



グループの意見をクラス全体で共有

○生徒の感想

- ・自分の意見をクラス全体で言うのは恥ずかしく緊張するけどChromebookを使った授業では恥ずかしさが和らぎ楽しく授業に参加することができる。
- ・自分とは異なる考え方や視点が分かるので良かった。

Jamboardによる意見共有では次のようなメリットがあると考えられる。

- ・付箋の拡大縮小や、貼り付け位置を自由に変更できるので意見の可視化がしやすい。
- ・他の班を参考にしながら、自分のグループの意見集約が可能で、グループ協議が活性化する。
- ・自動保存により過去の付箋の閲覧が可能である。
- ・参考資料等の提示が可能である。
- ・資料提示や、全体共有の際のグループごとのボード切替など、授業場面の切替えが瞬時に行える。

対面とJamboardを活用したオンラインとの同時併用で意見共有を活性化させることで、主体的・対話的で深い学びへと繋げている。このような指導は国語や総合的な探究の時間等、グループ学習をする際に特に有効であると考えられる。

【5. 「みまさか学」での探究とプレゼン】

みまさか学では、地域課題の解決に向けた方策を、テーマ別にグループに分かれて協議しプレゼンしていく。毎時間、地域コーディネーターが協議に入り適宜アドバイスをしていく。プレゼンはスライド（G Suite プレゼンアプリ）を活用し、指導助言では対面に加え、Meet（G Suite オンライン会議用アプリ）を活用する。これにより、外部講師と発表会場とを繋ぎ、オンラインによる指導助言も可能となる。



地域課題解決に向けた方策をプレゼン

○生徒の感想

- ・みまさか学で数多くのプレゼンを作成をしたので、多くの人が聞きたい、見やすいプレゼンを作る力や発表する力が身についたと思います。また、みまさか学や進路関係で調べることが多くなったので必要な情報を選ぶ力もつきました。

スライドとMeetを活用した授業では次のようなメリットがあると考えられる。

- ・クラウド上にデータが保存され、一つのプレゼン

をいつでも、どこからでも共同編集できる。

- ・ファイル共有により、教員や外部講師は、いつでも、どこからでも閲覧し、指導助言が可能である。

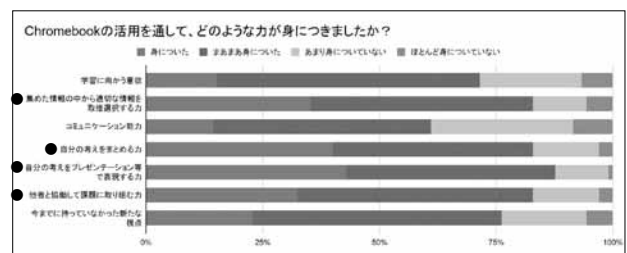
この授業では、課題解決に向けて、グループごとにJamboardを活用しながら方策を協議し、スライドへ落とし込み可視化していく。それにより、主体的・対話的で深い学びへ繋げている。このような指導は国語や社会、総合的な探究の時間等グループ協議を伴う授業で特に有効であると考えられる。

【6. 総合的考察】

研究の仮説「対面とオンラインによるハイブリッド型授業が主体的・対話的で深い学びの創出に有効ではないか」について、三つの実践を通して検証した。

【3.生物での「反転授業」】では、「事前に実験目的や手順を確認しておくことはどうか」の質問に対して全員が「確認しておくのがよい」と回答した。【4. 現代社会でのグループ学習】では、「Chromebookを使った授業では恥ずかしさが和らぎ楽しく授業に参加できる」、「自分とは違った考え方や視点が分かる」との感想を得た。【5. 「みまさか学」での探究とプレゼン】では、「必要な情報を選ぶ力もついた」との感想を得た。

また、導入初年度生徒（平成29年度入学生）の卒業時アンケートによると、次の四つの力（赤丸の項目）については80%以上の生徒が「身についた」、「まあまあ身についた」と回答している。



- ・集めた情報の中から適切な情報を取捨選択する力
- ・自分の考えをまとめる力
- ・自分の考えをプレゼンテーション等で表現する力
- ・他者と協働して課題に取り組む力

○卒業時の生徒の感想

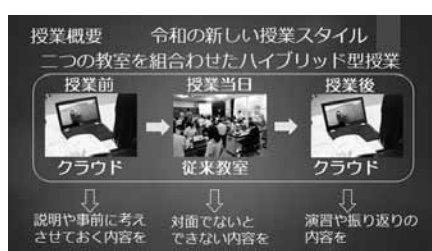
- ・パソコンなどを使い、作業をしなくてもいい場面が今後大学生活や社会に出たときにあると思うから、このように3年間を通して資料の作り方などいろいろ学ぶことができてよかった。

- ・今後、PCを使う機会が増えるので、入力が速くなり、ドキュメント、スライドなどが使えるようになったので、とても役立ちました。問題がわからないときに質問ができとても助かりました。
- ・授業で、自分とは異なる、クラスや学年全員の考え方や視点が分かったり、シートを共有して入力できたり、Chromebookを持ち帰って自分の都合のよい時間に学習できることが良かった。

以上のことから対面とオンラインによるハイブリッド型授業が主体的・対話的で深い学びの創出に有効であると考えられる。

ハイブリッド型授業づくりのポイント

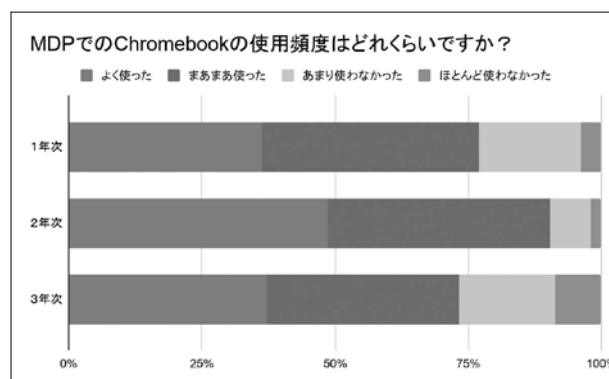
- ・教室は、従来の教室とクラウド上の教室と二つあり主体的・対話的で深い学びとなるように二つの教室をバランス良く融合させることで、従来の教室のみの授業とは異なる新しい授業スタイルに繋がる。
- ・授業前、授業当日、授業後を一体的に捉え、授業前と授業後のオンラインを活用した指導については、生徒の主体的な思考を促す教材を提供することが重要である。また、課題となっている家庭学習時間の不足を解決する糸口になると考えられる。ただし、従来の講義形式の授業に、後付け的な活用ではメリットは限定的であると考えられる。
- ・授業では、協議や疑問点の解決等、対面でないといけない内容を扱うことが極めて重要である。



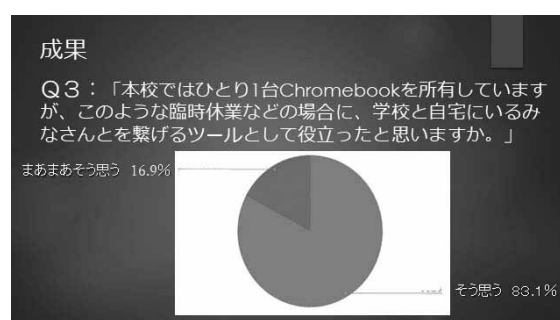
Chromebookの普及にむけて

- ・Chromebookの最大の特徴は、アプリやデータがクラウド上にあることであり、いつでも、どこからでもアクセスできる点を意識した取組をしていくことが重要である。
- ・授業だけでなく校務全般で活用することが普及させるポイントで、授業だけの活用だとメリットは限定的であると考えられる。
- ・総合的な探究の時間（My Dream Project）での

Chromebookの使用頻度に係るアンケートでは、2年次において9割の生徒が「よく使った」「まあまあ使った」と回答している。課題解決型学習を積極的に取り入れることも普及させるポイントである。



- ・指導教諭やベテランが意欲的に活用することで、普及が促進される。
- ・とにかくやってみようの気持ちが大切で、本校では「無理使い」と呼んでいる。良かったら使うでは、良くなかったら使わないため、普及しにくい。
- ・予備機（故障修理期間の代替機）の確保は重要である。本校では生徒数357名に対して予備機20台を用意しているが、それでも不足している。
- ・危機管理の面で生徒と学校とが繋がっているという安心感は絶大である。次のアンケートは臨時休業中に関するもので、全生徒が肯定的回答をしている。



おわりに

「ハイブリッド型授業が主体的・対話的で深い学びの創出に有効である」ことは特定の教科・科目に限ったことではなく、全ての教科・科目について当てはまる。また、授業だけでなく、Chromebookは、校務や、保護者・地域との連携、国際交流等で「繋ぐ」という視点から幅広い活用が考えられる。主体的・対話的で深い学びとなるよう令和の新しい授業スタイルを創り、新しい学びを引き続き追究していきたい。



首長部局・地域との協働による 「社会に開かれた教育課程」で育つ子どもたち

— 「草間台こども観光大使」の取組を中心に—

新見市立草間台小学校 校長 三上 裕弘

1 はじめに

本校に赴任した平成29年春、新見市東南部に広がるカルスト台地にある草間台小学校の美しい立地に目を奪われた。また、本校の教育課程を知り、長年にわたる地域と連携した教育実践の蓄積に感激した。今でこそPDCAサイクルによって効果的な教育課程を編成していくことが当たり前になっているが、以前から続く地域との交流による本校の教育実践は、時間・時代の変遷を経て、試行錯誤されてできあがったものであることを知った。そして、感激すると同時に、磨けばさらに輝く原石を発見したような喜びと更なる発展の可能性を感じ、開かれた教育課程の開発に向けての意欲が高まった。

私は、本校への赴任前に新見市教育委員会生涯学習課に勤務しており、学校支援地域本部事業の担当であった。また、学校教育課の担当者とともにコミュニティ・スクール（以下、CS）を市内に導入する責務を担った。その中で、予測困難な変化の激しい世界を生きる生涯学習社会において、学校教育と社会教育・家庭教育が密接に連携し、社会総がかりで行う教育の重要性を認識した。また、教育行政での経験は、行政（首長部局）の各部・課の事業を知る機会にもなった。そのような時期に地教行法改正があり、平成28年には新見市総合教育会議が設置された。そして、新見市教育大綱が定められ、基本理念が「～ふるさとを愛し、未来に拓く、たくましい人づくり～」と掲げられた。

2 研究主題設定の理由

小学校においては、2020年から新「学習指導要領」が全面実施となった。新「学習指導要領」では、「社会に開かれた教育課程」がこれからの教育課程の理念であるとされた。また、「外国語活動・外国語」も全面実施となり、「外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成すること」を目指すこととなった。

そこで、研究主題を「首長部局・地域との協働による『社会に開かれた教育課程』で育つ子どもたち」と定め、首長部局の各事業等や地域と連携・協働するこ

とで、広く社会に、世界に開かれた教育課程を実現させることにより、教育の充実を図る研究に取り組むことにした。

3 研究仮説

首長部局・地域と連携・協働し「社会に開かれた教育課程」を実施していくことで、広く深く豊かな学びが実現でき、教育の好循環を生み出すことができる。

この仮説を検証するために、『育てたい資質・能力を具体化』し、以下の3つの取組を設定するとともに、実施後の結果について予想を立てた。

《取組①と予想》

海外に開かれたふるさと発信活動を実施することにより、子どもたちの外国語・外国語活動への意欲を高めるとともに、『グローバルな視点を持ち、豊かなコミュニケーション力を身につけ、地域を発信する力』を育成することができる。

《取組②と予想》

首長部局の事業の中で「社会に開かれた教育課程」を実現するために協働できるものを積極的に学校教育に取り入れることにより、学校単独では実施困難な豊かな体験活動を実現可能なものに行うことができる。

《取組③と予想》

これまでの本校の「ふるさと学習」を横断的・総合的に見直し、教育課程に位置づけ、CSを生かした学校をつくることにより、『ふるさとへの愛着と感謝の思いをもち、たくましく未来を拓く力』を育成することができる。

これらの取組を通じて、児童の自己有用感が高まり、豊かな心が育ち、学力向上にも良い効果が得られるのではないかと考えた。

4 研究の内容

(1) 《取組①》「草間台こども観光大使」について

本校独自の活動である「草間台こども観光大使」を実施することにした。これは、岡山桃太郎空港で外国人の方へ英語で新見市の観光PRをするという取組である。

本校の「ふるさと学習」は、長年の実績により充実していた。特に地元特産のピオーネの栽培体験学習は、毎年3回の実習を20年近くにわたり継続していた。また、年間を通じ、各学年で「ふるさと学習」



が実施され、地域の人材や自然・産業等を生かし、地域に開かれた教育課程が編成されていた。しかし、せっかくの体験学習の成果を発信する場が、校内で保護者や地域の方に向けたものに限られていて残念であった。

そこで、新見市が先行実施していた外国語活動を生かし、英語を使った、海外の方へのふるさと紹介活動を計画した。本校は岡山桃太郎空港まで車で1時間半という立地にあることにも着目した。このような経緯で、「草間台こども観光大使」と称して、高学年（5,6年生）が岡山桃太郎空港へ行き、国際線（香港便・台湾便）利用者の外国人の方へ、英語を使って新見市のPRをする活動を企画した。もちろん本校独自の活動である。

ただこの企画は、学校単独では実施困難であった。というのも、活動場所までの児童の輸送、空港や各種団体との折衝・協力依頼など、学校だけでは実現するのが難しい課題が多かったからだ。そこで、新見市首長部局の商工観光課へ相談したところ、新見市の観光PR事業とも合致するというので、協働して実施することが可能となった。

商工観光課と協働することにより、「岡山桃太郎空港」はもちろん「JAあしん」や「千屋牛振興会」、「岡山桃太郎空港応援団」等と協働して開催することができた。

そして、平成30年度に第1回「草間台こども観光大使」を実施し、令和元年度には第2回目を実施した。

当日は、新聞やTVなど、各種報道機関の取材もあり、子ども達は緊張感のなか、海外からの来日者の方へ、英語でふるさと



のPRをするなど、コミュニケーションを通して充実した時間を過ごすことができた。

(2) 《取組②》社会に開かれた教育課程の編成について

首長部局の事業の中で協働できるものを調べ、教育課程に位置づけ取り組むことにした。特に、「草間台こども観光大使」の活動を実施するに当たり、新見市をPRするという視点で、「ふるさと学習」を見直した。

そこで、新見市首長部局の農林課が実施している「千

屋牛教育ファーム体験事業」を本校のふるさと学習にも取り入れ、中学年（3,4年生）を中心に実施することにした。これは、市内の学校の児童が、千屋牛の生後4ヶ月程度の子牛を飼育体験するという事業である。

千屋牛は新見市の有名な特産品のひとつであり、給食メニューの「千屋牛どんぶり」などで子ども達にとっても、なじみの深いものである。また本校の児童は、地元で毎年行われる「土橋ほたる祭り」でのイベントのひとつである「千屋牛の引く牛車でほたる観賞」にも参加しており、身近な存在でもある。しかし近年、自宅や近隣で千屋牛を飼育していることはほとんどなく、実際に校庭で千屋牛の飼育を2週間に渡って行うことは、子ども達にとって非常に貴重な体験となった。



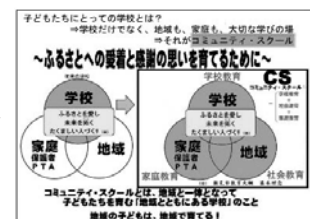
また、新見市健康づくり課の事業である「さあ歩こう！クアオルト健康ウォーキング」にも取り組み、地元にある鍾乳洞「満奇洞コース」に参加することにした。小学生がこの事業に参加するのは本校だけであった。地元の子も達なのに地元の鍾乳洞に入ることがないという実態のなか、カルスト地形の代名詞でもある鍾乳洞の魅力を感じることができた。



このように首長部局との協働により、学校単独やこれまでのCSでは実施困難な教育活動でも実現可能なものとする事ができた。また、低・中学年での豊かな体験活動での学習内容を、高学年でのふるさと発信活動に生かす系統的な学習を編成することができた。

(3) 《取組③》CSを生かす学校へ

新見市は、平成28年度から、市内全小中学校をCSとした。CSの形態は各地域・学校ごとに様々であるが、草間台地域ではCSの目標を「ふるさとへの愛着と感謝の思いの育成」としてベクトル合わせをし、学校・地域・家庭が緩やかな結びつきのもとで、地域の子もを育てることにした。従来の学校評議員会を発展させた形での学校運営協議会を組織し、小学校がイニシアティブをとってCSを充実させていった。子ども達にとっての学校は、「生きる力」を学ぶ場である。その意味では、従来の学校教育だけでは



草間台CS概念図

なく、社会教育・家庭教育も大切な「生きる力」を学ぶ学校である。よって、草間台CSは、「草間台小学校+草間台地域+家庭」の総体であるという「草間台CS概念図」を提案した。

加えて、首長部局の行う事業等を計画的に取り入れた「コミュニティ・スクールin草間台 年間計画」を、より社会に、そして世界に開かれた教育課程としてバージョンアップし、実施した。

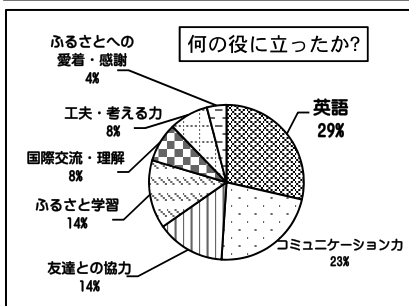
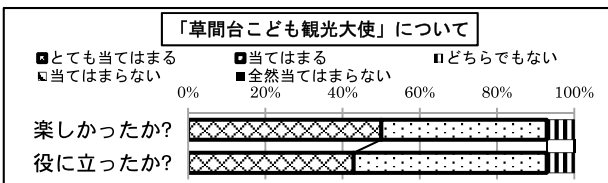
「コミュニティ・スクールin草間台 年間計画」

(CSの詳細は、草間台小学校HPに掲載)

5 成果と課題

(1) 取組の結果及び仮説の検証

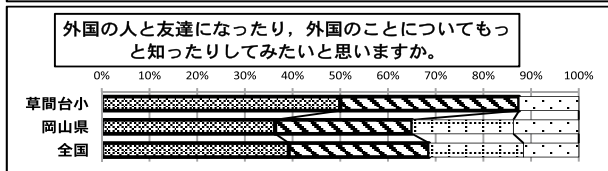
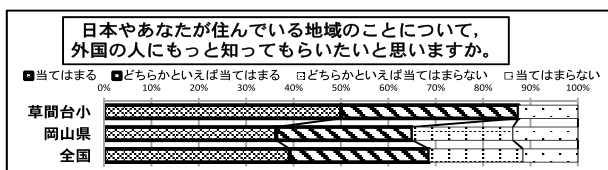
《取組①の結果》「草間台こども観光大使」について実施後の児童アンケートの結果である。



「楽しさ」「役立ち」とともに肯定回答90%以上である。また、英語やコミュニケーション力、ふるさと学習等

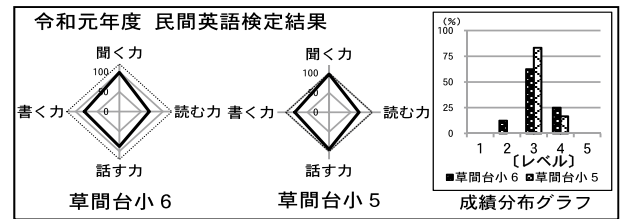
について効果があったことがわかる。

以下は、全国学力・学習状況調査の関連項目である。本校児童の肯定的評価は90%近くあり、児童のグロー



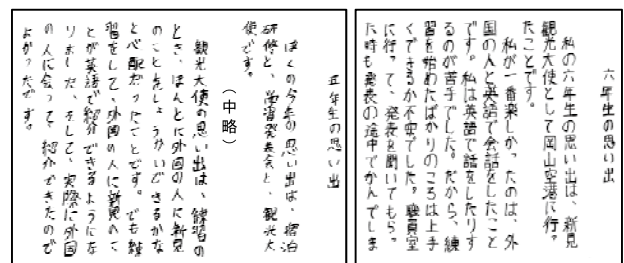
バルな意識が向上していることが確認できる。

次に、令和元年度に行った民間英語検定結果を示す。



本校の児童の英語力の高さが確認できる。特に、「聞く力」「話す力」が2学年集団に共通して高い。さらに、成績分布グラフから、集団全体が好ましい成績分布になっていることがわかる。

また、学校文集の思い出の行事には多くの児童が修学旅行や学習発表会などを書くところ、「草間台こども観光大使が最も思い出に残った」と長文を書く児童も現れるなど、予想以上の成果を得ることができた。



(小5 学級文集より)

(小6 卒業文集より)

このような結果から、《取組①》により外国語活動への意欲が高まるとともに、目指す資質・能力のひとつである『グローバルな視点を持ち、豊かなコミュニケーション力を身につけ、地域を発信する力』を育成することができたといえる。

《取組②、③の結果》

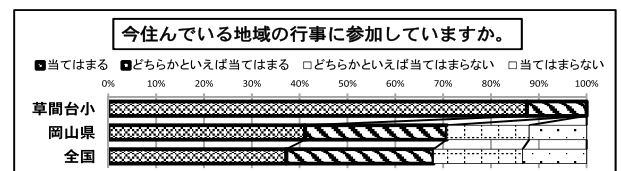
- ・社会に開かれた教育課程の編成について
- ・CSを生かす学校へ

令和元年度学校生活アンケート(全校児童)集計結果

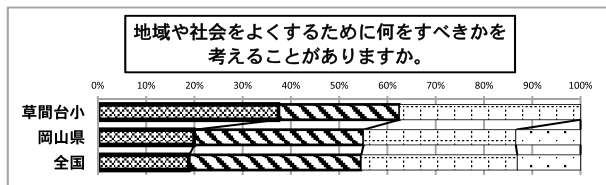
No.	質問	今年度 (%)				肯定評価
		2019	2018	2017	2016	
1	学校は、楽しい。	57%	37%	6%	0%	94%
2	将来の夢を持っている。	69%	20%	9%	3%	89%
3	誰にでも元気よく、あいさつをしている。	40%	49%	9%	3%	89%
4	一生けん命がんばってそうじをしている。	69%	26%	6%	0%	94%
5	けじめのある生活をしている。	40%	46%	11%	3%	86%
6	授業中、しっかり勉強している。	58%	39%	3%	0%	97%

上記は、学校評価での児童対象アンケートの集計結果である。各項目の肯定評価が86%以上となっており、学校が楽しく、頑張っている様子が読み取れる。

以下は、平成31年度全国学力・学習状況調査からの

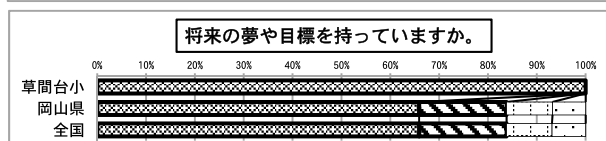
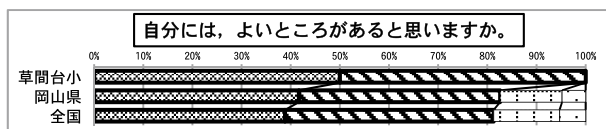


関連項目である。本校の児童が、県・全国に比較し突出して地域の行事に参加していることがわかる。学校評価での保護者対象アンケートでも、「家庭では、地域や外部の行事等に参加させ、様々な経験をさせるようにしている。」が肯定的評価96%と家庭との連携の高さも確認できた。

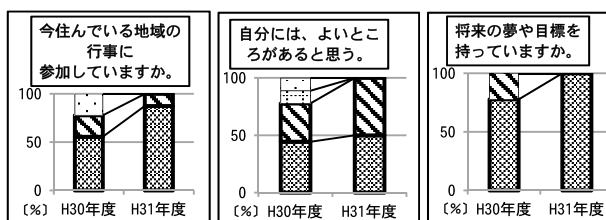


さらに、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」肯定的評価62.5%（「当てはまる」は、37.5%）と高く、児童が、地域や社会での自身の役割を認識するようになってきていることが示されている。

自己肯定感、自己有用感については、下記グラフでもわかるように、「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標を持っている」がいずれも肯定的評価100%と驚くべき結果となった。

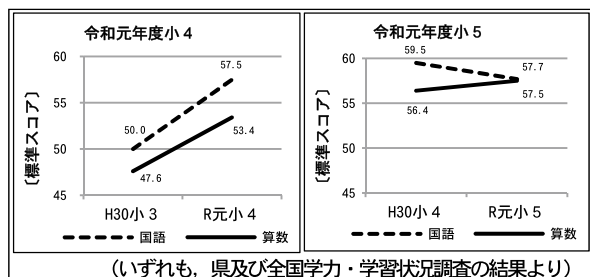


次のグラフは同学年（令和元年度小6）の県及び全国学力学習状況調査から経年変化を追跡したものである。



いずれの項目についても、経年上昇が確認できる。

次は、令和元年度の小学4年生、小学5年生の国語・算数の標準スコアを、経年変化で取り上げた。



小学4年生では、小3→小4で大きく向上している。また小学5年生でも算数での向上が確認できる。（国語が小4→小5で下がっている原因は、単式学級から

複式学級に移行した初年度であったため、AB年度カリキュラムで未履修漢字があったためと考えられる。令和2年度現在は対応している。）

このような結果から、もうひとつの目指す資質・能力である『ふるさとへの愛着と感謝の思いをもち、たくましく未来を拓く力』が育成できたといえる。そして、自己肯定感が増し、将来の夢や目標を持つことが、学力向上につながった要因と考えられる。

(2) 成果

この度の研究によって、仮説である「首長部局・地域との協働により『社会に開かれた教育課程』を実現することで、広く深く豊かな学びが実現でき、教育の好循環を生み出すことができる」ことが検証できた。そして、効果的に「社会に開かれた教育課程」を構築するためには、学校には無い財産（輸送力、各団体とのつながりなど）を持っている首長部局等と連携・協働することが有効であると確認できた。さらに、CSを活用し、社会総がかりでの教育を実現することで、子どもたちに目指す資質・能力を育成できることが確かめられた。

(3) 課題

本研究では、首長部局の事業を教育課程に位置づけることにより「社会に開かれた教育課程」を実現させたが、首長部局の事業はいつ終了するかわからない。つまり、安定した教育課程の編成をする上では弱点となる。よって、首長部局とのより綿密な連携が重要であり、臨機応変に対応できる学校の柔軟さが求められることになる。

6 おわりに

赴任した3年前、CSについてのプレゼンテーションを行った。「学校と保護者が車の両輪のように連携することが大切だというのが、よく考えると二輪車では安定しない。地域とも連携・協働し三輪車になれば、初めて安定走行できる。」そのあと四輪自動車のイラストを示して「さらにもう一輪加わり四輪になれば、安定し力強く前進できる。もう一輪は何だろうか？」

その答えが、今回は首長部局であった。社会に開かれた教育課程を編成し、実行するための強力なツールがCSである。CSを生かし、あらゆる方面の団体・組織と協働することによって、社会総がかりでの教育が実現できる。今後、さらに多くの団体・組織に協働を仰ぎ、「社会に開かれた教育課程」を推進することにより、Society5.0時代に向けた教育の実現に夢が広がる。



自信と誇りを持ち、ひたむきに躍動する生徒の育成 —学びと育ちをつなぐ「かつたっ子15の春プロジェクト」を通して—

美作市立勝田中学校 校長 景山 智子

1 はじめに

本校は全校生徒47名の小規模校で、特別支援学級（知的1）が設置されている。通常学級にも特別な支援を要する生徒が数名在籍しており、個に応じた教育支援としてユニバーサルデザインの視点をもったすべての子が「わかる・できる」授業を展開することが必要である。生徒たちは素直で、落ち着いた生活ができていますが、主体的に学びに向かう力や学力の定着に課題のある生徒は少なくない。幾分改善されたが、家庭学習の習慣にも課題がある。また、自信がなく、新しいことに挑戦しようとする力が弱い、自分の思いをうまく伝えられない等の課題を抱えている。これらの課題を解決するために学校独自で取り組むことは勿論だが、中学校区の連携により一貫して取り組むことが重要である。15年間の育ちと学びをつなげる「勝田型一貫教育」の推進により学力や自己肯定感の向上を図りたいと考えた。

勝田中学校区は、緑豊かな美しい自然に恵まれ、落ち着いた環境のもとで学習に励むことができる地域である。現在、中学校の敷地から200m離れた場所に91名の勝田小学校、3km離れて22名の勝田東小学校、1km離れて84名の勝田ひまわり園がある。「かつたっ子15の春プロジェクト」は勝田地区の子どもたちの15年間を見通し、つなぎ、「健やかな心身の成長、将来の夢を実現するために踏み出す力、これからの社会を生き抜く力をつける」ことを目標にスタートした取組である。勝田地域の子どもたちを、保護者、地域、そして勝田で教育に携わる者たちがみんな育てるという意識を大事にしている。特に、ひまわり園や二つの小学校は、地域と密接につながり学校を運営している。中学校も、卒業生や民生委員さんなど、多くの方に環境整備を支えていただいている。中学生と地域の高齢者の方との交流もある。地域の中にある学校として、開かれた取組をしていきたいと考えてきた。

ここ数年の学力・学習状況調査等では、読み取る力が低迷していることから、昨年度から「読み取る力をつけること、家庭学習の習慣化、基本的生活習慣の確立」を中学校区の共通課題に設定し、勝田型一貫教育を柱に組織的に取り組んでいく。

2 取組の概要

(1) 研究内容

共通学校目標設定による教育の一貫性

①合同研修会と校内研修を連動させた共通課題解消への取組

②交流行事の充実：生徒による主体的な活動へ

(2) 推進組織

地域に開かれた組織であるために、勝田教育分室の分室長さんを代表にしたプロジェクト会を組織している。勝田教育分室、美作市教育委員会、福祉課、支所保健師、主任児童委員、校園長で組織した



プロジェクト会を月1回開催し、中学校区の教育の現状を把握した上で、方向性を検討する。勝田地区の保健師や市の福祉課と身近につながり、子どもたちや各家庭の支援をお願いできるのが利点である。

平成30年度より小中の学校教育目標を共通のものとし、小中の学びをつないできた。また、発達段階に応じた育ち目標を設定し、保育園から中学校まで「学びと育ちの連携表」（平成28年度作成）を元に必要な力を育もうとしてきた。学校園で育てる目標と家庭で育てる目標を分け、保護者の方にも協力を仰いでいる。また、校園長で組織された経営部の下に教頭の運営部を置き、行事の運営・調整を行っている。その下に「まなび・ゆめ部」「そだち部」「こころ部」「つなぐ推進」の4つの部を設置している。各部の中に学力向上部会等の研究組織を配置し、各部会に校長が代表として参加している。地域の実態に合わせて、できることをできる範囲で行うことを大事にしながら連携に取り組んできた。

(3) 教育の一貫性を求めて～つなぐ取組～

① 学びをつなぐ

勝田ひまわり園の一人一人を大事にした細やかな育みを二つの小学校へ、小学校の丁寧な学びと育みを途切れさせることなく中学校へ、中学校の先を見通した学びや育みを保育園や小学校へ返していくことを意識している。15歳になるまでにどんな力をつけなければいけないかを共有することがスタートとなる。

学びをつなぐために、勝田地区の教職員が集まる合同研修会がある。共通に取り組む目標を設定し、取組の実践報告と共有を経ての修正、年度末の反省と次年度の課題を設定するという流れである。だが、小学校も中学校も学校独自の課題もあり、これまで校内研修と2本立てで研究を進めてきた。しかし、盛りだくさんの内容を抱える校内研修と「15の春」の取組には負担感があった。そこで、校内研修のあり方を見直すことでスリム化を図ると同時に、共通課題の取組を校内研修の中に組み込んだ形で研究を進めることとした。

合同研修会の第1回は、「15の春」で取り組む目的や方向性の確認と実践の中間報告を行う。毎年教職員が入れ替わっても同じ方向性で取組を進めていくために全体での確認は絶対に必要である。目の前の子どもたちに確かな力をつけるために自分は何をしているか、今後何をしていくのか、また有効だった手立ては何か等、グループ協議をした上、全体で共有していく。教職員同士が知恵を出し合う場でもある。第2回は、持ち回りで公開授業研究会を開く。協議の柱を設定し、授業改善に向けて共同で研究を深める。第3回は、1



年間の取組の反省と次年度の共通課題を協議、決定する。教職員自らが勝田の子どもたちの課題、次年度の方向性をKJ法でまとめていく。

また、学力向上部会では、各校の学力向上担当者が中心となり学力・学習状況調査等の分析をし、改善策を提示すること、授業力向上に向け各校の実践や有効な手立てをまとめ、共有すること、また、i-checkの分析と対策の共有をすることを通して、9年間の学びをつなごうとしている。小中互いの取組の中で良いヒントをもらって改善していくこともある。授業をつなぐために「かつたっ子授業のスタンダード」を元に、授業の基本を小中共同して取り組むことで、授業の流

れを理解し、学ぶ習慣ができ、中学校入学時の段差を少なくしようとしてきた。中学校の定期考査中に、中学校の教員が全員、小学校の授業参観に出かけることも、小学生の様子を肌で感じたり、小学校の先生の指導を自分の目で見たりする良い機会となっている。

学びの心をつなぐために、「学びの時間」を設定し、2校の小学生が中学校の教室で一緒に学んでいる。毎週火曜日の5、6時間目に5、6年生が中学校に来て英語を学ぶ。中学校英語担当教員がT1となりALTと共に授業を進め、小学校の担任等がT2として個別支援に当たりながら、小学校の外国語の授業を実施している。小学生が中学校の教科担任制を学ぶと同時に小中の英語の円滑な接続をねらい、二つの小学校の児童が5年生から一緒に授業を受けるよい機会にもなっている。年度初めの英語担当者会で、中学校で指導する単元の検討や指導の仕方等について協議しながら進めている。今年度は、第2回合同研修会の公開授業として、「学びの時間」を設定し、中学校区で研修を深めたいと考えている。



また、学びの姿をつなぐ取組として、幼稚園児の小学校体験入学、保小交流行事、小学校の合同陸上記録会、合同校外学習、中学生の保育体験を行っている。漢字検定や英語検定も各小学校に呼びかけ、中学校を会場に、中学校区で自分の目標の級に挑戦させている。陸上記録会も、中学校のグラウンドを活用し、中学校の体育教師の指導の下、2校の小学生が100m走、60mハードル、ソフトボール投げに取り組む。小学生同士も「頑張れ！」と声をかけ励まし合うし、休憩時間になると中学生も廊下から名前を呼んで応援する姿が見られる。さらに、保育園の園児が小学校の広いプールを体験したり、中学校にどんぐり拾いに来たりという風景も当たり前になってきた。普段の生活の中で、小学校や中学校に会場を借りてあんなことができたなら、という思いをすぐ実現できるのも、小規模の利点である。

② 心・育ちをつなぐ

児童・生徒の元気、やる気、本気をつなぐ取組として、小中全校での音楽鑑賞会、高学年と中学生が合同

で行うクリーン活動、学びの集会、人権講演会、夢講座、合同給食がある。クリーン活動は、中学校生徒会で行ってきた取組であるが、平成30年度から高学年と共に3つのコースに分かれて実施することにした。令和元年度は、小学校の先生の希望から、2つの小学校区に分かれて実施する形に変え、地域の小学生と中学生が合同で活動することで地域の人たちからも喜ばれている。



学びの集会は、委員会活動の紹介、英語暗唱大会の演目の披露など生徒会担当教員が企画し始めたが、現在は、生徒会が中心となり「こんな中学生になってほしい」など小学生へのメッセージの発信、中学生のセルフコントロールの取組や本の紹介などを毎年企画している。小学生の児童会の取組の発表を組み込む年もある。親睦を深める時間にもしたいということで、昨年度はレクリエーションも企画し、よいふれあいの時間となった。クリーン活動や学びの集會を中学生が企画運営する姿を見せることで、「中学生ってすごい。」「自分も中学生になったらあんなことができるかな。」など、小学生にとって中学生が憧れの対象や目標になり、逆に中学生にとっては、自主性を育てる場であると共に、小学生や小学校の先生に認められることで大きな自信にもつながっている。中学生にとっては、何事にもひたむきに取り組む姿を見ることがかつたっ子のリーダーとしての役割だと感じている。

教職員のつながりとして、生徒指導部会を2ヶ月に1回実施し、情報交換を行ったり、生活アンケートの交流をしたりしている。小中合わせて玄関の靴そろえにも取り組んでいる。養護部会では、数回のアンケートにより、生活習慣や生活実態を把握し、共通課題の改善に向けて提案している。また、保幼小の連携としては、授業保育参観や小学校教員の保育体験研修（夏休み中）、スタートカリキュラムによる円滑な接続のための打合会、小小連携として合同研修会を、小中連携として小中連絡会、授業参観の交流などを行ってきた。教職員同士も交流する時間が増えたことで、お互いの大変さや頑張りも見えてきた。合同研修会でグループになっても共通課題に向けてスムーズに話ができるなど、同じ勝田の子どもたちを育てているという仲間意識が芽生えてきたと感じる。

③ 地域とつなぐ

小学校も中学校も地域の中で、地域の方々に見守られ、支えられている。各学校の取組はもちろんだが、勝田中学校区で取り組んでいることや子どもたちの頑張っている様子を知ってもらいたい。中学校区つなぐ推進だよりを年4回発行し、「15の春プロジェクト」で取り組んでいることを保護者や地域に発信している。中学校区で取り組んでいることや園児、児童、生徒の頑張りを知っていただくことで、地域に開かれた学校づくりを目指している。

3 取組の成果

○生徒の意識の変化

保幼小中の行事を交流することによって、中学生は小学生の、小学生は幼稚園児、保育園児の良きモデルになっている。また、中学生は小学生の、小学生は幼稚園児の元気や頑張りの良い刺激をもらおうというように、目標や憧れが意欲につながり、また認められることで自信や自己肯定感を持つという良いサイクルが生まれている。

★自分にはいいところがある

	勝田中	全国
1年	44.4	66.6
2年	69.2	63.6
3年	68.8	67.2

*肯定率の比較

★将来の夢や目標があるか

	勝田中	全国
1年	94.4	81.4
2年	84.6	75.2
3年	93.8	76.4

R2.6.1実施のi-checkの結果から

現在の中学生は小学校時代から学びの時間や他の行事で交流してきた生徒たちである。英語の時間は楽しみな生徒が多く、たとえ苦手でも逃げる生徒はいない。また、入学前にすでに関係ができていたため、中学校に入学する不安が少なく、中学校生活になじむのも早い。勝田東小学校から1名だけで入学した生徒も友だちになっていたのも全く不安はなかったと言う。

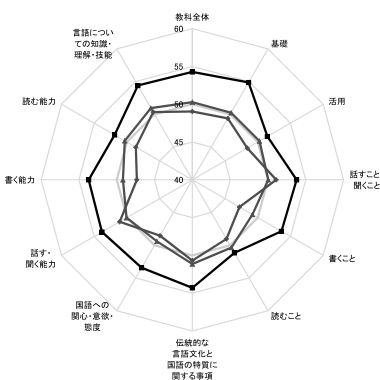


○書く力の向上

小中の教職員が同じベクトルで取り組むことによる成果を実感している。例えば、「読み取ること」に取り組む以前は、「書くこと」を共通課題として、考察やまとめ、振り返りなど毎日の授業の中で書く時間を設定する、行事後の感想を必ず書くなど小中で継続して取り組んできた。さらに中学校では、生活ノートのコメント欄7行をすべて埋める、滴一滴ノートにも全校で継続して取り組んでいる。その結果、生徒は、ま

とまった字数で、自分の思いや考えを書くことができるようになった。学力状況調査などの作文の欄を空白で残さなくなり、書くことを当たり前のことと感じている。

令和元年度1年生
岡山県学力学習状況調査
国語の結果から
*黒線が本校



○教職員の協働意識と自覚

教職員間も交流や連携を通して互いにリスペクトし校種の垣根を越えて相談できる関係ができてきた。「15の春」の取組が定着した現在では、各部の推進担当教員が中心となって部会を運営するなど、共有から協働へと意識が変わってきている。交流行事では、経営部会からの発案だけでなく、最近生徒会担当教員から集会を合同にするならこんな内容はどうかと提案があるなど、全教職員が知恵を絞りながらできることを増やし、負担がないように方法を改善している。勝田中学校では、運動会など大きな行事に向けて連帯感を深めるために月1回K T T C給食(縦割り給食)を実施してきた。そのK T T C給食に6年生を招待できないかということで、生徒会役員と担当が検討し実施にこぎ着けた。何か始めようとするときに、児童生徒にとってプラスになると考えれば、どうすれば負担が少なく実施できるかを考える。実際の調整は教頭を中心にしながら担当や担任同士が話し合うのである。関係ができていなければ、すぐ実施することは難しいだろう。これも継続の成果である。

また、養護部会が課題と感じていたメディアの時間を、小学校と中学校の保健体育委員会が合同で取り組み、生活アンケートを基にした課題の拾い出しをした上で、「メディアとの正しい付き合い方」と題した写真劇を作成し、各校とも全校集会で発表した。小中学生の真剣さや演技力に全員が引き込まれ、生活習慣を形成するための啓発の良い機会となった。



教職員の本気・やる気が子どもたちを変容させ、子どもたちの変容が教職員の達成感につながりさらに教育活動への意欲にもつながっている。

○地域からの声

推進だよりを読んでもらった地域の方からは、勝田地区はいい取組をしていると声をかけていただくこともある。また、実体験の少なくなった児童生徒たちに、交流を通して生活体験を積み重ねることができる取組だから継続させてほしいという声もいただいた。

4 まとめ

勝田地区の小中学校は小規模の学校である。ならば小回りがきく利点を生かし、できることを取り組んでいく。義務教育が終了する時点で、知力・心力・耐力を身につけ、夢を持って力強く巣立ってほしい。これからの厳しい社会を生き抜く力を育成するためには、保幼小中が連携し、組織で継続して取り組むことが重要である。学力向上を実現するためには、落ち着いた学習環境づくりと集団づくりも欠かせない。一人の教員が、一つの学校だけが頑張っても限界がある。明確な目標の下、小中が徹底して組織で取り組んでいく。保育園・幼稚園と小学校が円滑な接続をすること、二つの小学校が中学校入学をめざして共通し取り組むこと、小学校と中学校のさらなる連携など改善点はまだまだある。連携担当の配置があれば、さらに教科担任制の指導や連携のあり方の見直しなど可能性を広げることでも十分考えられる。

これまで継続させてきた「15の春」の良さをつないでいくこと、そして、前任の校長先生方が築いてくださった土台の上に、さらにどんな連携を形作っていくか、新たなメンバーで、新たな視点に立った考察が今後必要となる。「読み取る力」の向上、小学校の低学年や中学年での交流、特別支援教育推進体制の確立と理解の促進などが、今後の課題となる。

これからも、子どもたちの自立と自律を促進すること、そして、自信や自己有用感を持たせる活動に取り組んでいく。また、勝田型一貫教育に対して地域の信頼を得るために、勝田の子どもたちが頑張る姿を届け、地域の中で、保護者や地域の方に、安心して、温かく見守っていただける勝田ひまわり園、勝田小学校、勝田東小学校、勝田中学校でありたい。



倉工スタンダードを学校経営目標に位置付けた カリキュラム・マネジメントの実践

—ものづくりを通じた人づくり—

岡山県立倉敷工業高等学校 校長 安藤 正道

1 はじめに

本校は、昨年創立80周年を迎え、機械科・電子機械科・電気科・工業化学科・テキスタイル工学科の5つの専門科を有する、全24クラスの県内最大規模の全日制工業高校である。各専門科は特性を生かし、地域と連携した実習等を組み込み、魅力ある教育課程を編成している。例年、約8割の生徒が地元を中心に就職している。地元産業界からは、「倉工の生徒は会社に入ってからの伸びが違う」との評価もいただき、次世代の担い手として期待されている。そんな生徒に卒業後も社会を逞しく生き抜く力を育みたいと願うのは、本校の一貫した姿勢である。

以下は、7年あまりの研究のまとめである。

2 研究の背景

(1) ルーブリックを活用した評価手法の確立

地域と連携した課題研究や実習等のものづくりには教科書がなく、統一された評価基準も用意されていない。実習における機器操作の声掛けのタイミングや調整具合の塩梅等の教員の暗黙知は、経験を積むに従ってより適切に行われるようになり、生徒の変容をもたらすきっかけとなる。そこでは、生徒の実態を十分把握している熟練者とそうでない新任者との間で評価のブレが生じるという指摘もある。

本校は、文部科学省委託研究事業（2014）を受けて、公益社団法人全国工業高等学校長協会の研究校として、仙台工業高等学校、北海道帯広工業高等学校とともに新たな評価手法及び指導方法を定着させるための研究を行い、ルーブリックを活用した評価手法を確立した。現在はタブレットを使ってリアルタイムに評価を記録するシートの実用化に至っている（2018大月）。

この研究で、これまで実習等での暗黙知が言語化され、何をどうすれば良いかが、生徒と教員とで共有できるようになり、これまで以上に学習の到達目標が理解しやすくなった。このことは生徒が授業に主体的に取り組む契機となったが、一部の授業にとどまり、学校規模の取組にはならなかった。他方で、単にパフォー

マンスの達成状況だけを評価するのではなく、その実習等を通じて、生徒に身に付けさせたい資質や能力とは何かという議論にも発展していった。

(2) 「倉工スタンダード」の策定

工業科の生徒にとって、身に付けさせたい資質・能力とは一体何か。学習指導要領等で示されたものがあり、地元産業界から求められるものもある。ただ企業がこのように言っているからという理由だけで、生徒を育てていこうと考えるのであれば、あまりに安直な目標設定と言わざるを得ない。

そこで、評価手法の研究を続けた指導教諭と主幹教諭が中心となり、実技や実験を伴う教科担当からなる研究組織を立ち上げ、実社会で工業人として活躍する生徒像から育成したい資質・能力を明らかにした倉工オリジナルの学校スタンダードの検討を始めた。

県高校工業教育協会が実施した県内100社へのアンケートの現状分析や、「前に踏み出す力（action）」「考え抜く力（thinking）」「チームで働く力（teamwork）」を職場や地域社会で多様な人々と仕事をして行くために必要な基礎的な力として提唱された「社会人基礎力」（2006経産省）や「基礎的・汎用的能力」（2011文科省）を参考にした。そしてこれまで本校に根付き、今後も伝えてゆきたい工業人としての志やものづくりに必要な力を問い直し、「倉工スタンダード（次表）」として、4つの資質と11の能力要素を策定した（2017）。

学校経営目標		倉工スタンダード（育成したい資質・能力）	
	社会人基礎力	社会人基礎力	社会人基礎力
	基礎的・汎用的能力	基礎的・汎用的能力	基礎的・汎用的能力
	倉工スタンダード	倉工スタンダード	倉工スタンダード
	工業人基礎力	工業人基礎力	工業人基礎力
岡山県立倉敷工業高等学校			

折しも新学習指導要領（2018）の改訂の基本的な考えの中に、子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視することが打ち出されている。

3 研究の目的

前述の「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて重要なのが、「カリキュラム・マネジメント」である。

単に教育課程を編成して終わりではなく、学校全体で教育活動の改善サイクルを回していくことが重要である。生徒や地域の現状を把握した上での目標になっているか、生徒の目指す資質・能力は明確か、社会との連携は十分かを振り返ることで改善の循環につながっていく。こうすることで常に時代に即し、将来を見据えた教育課程となるはずである。

ルーブリックを活用した評価手法の確立と倉工スタンダードの策定は、全国に先駆けた研究とも言うべきものだが、カリキュラム・マネジメントとするには、次のような改善すべき課題が明らかになった。

- ◆ 8割の生徒が就職し、卒業後は期待される工業界の担い手になることから、「ものづくりを通じて社会に貢献できる人になり得る」という矜持をしっかりと持たせることが大切である。
- ◆ 専門科の魅力を生徒に伝えるために、先行研究で得た学校スタンダード(P)と評価手法(C)を、専門科の特色ある活動(D)で有機的な連関のサイクルを回す必要がある。
- ◆ 有益な先行研究の成果を学校全体の授業改善(A)に広めてゆく必要がある。

4 研究仮説の設定 ～学校経営目標への位置付け～

課題については、学校グランドデザインを考える校内OJTチームからも同様の指摘を受けた。そこで、課題の解決に向けては、学校経営目標に「人づくり～倉工スタンダードの実践～」を位置付けることによって進展するのではないかという研究仮説を立てた。

学校経営目標に位置付けたことで、全教職員が生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確に意識できる。また、授業で何が、どのレベルまでできれば良いかがわかるようになり、これまで熟練教員の暗黙知としてあった作業の達成目標が生徒と共有できる。このことで、ものづくりの魅力がより伝わり易くなる。専門5科の魅力が伝われば、生徒は「工業人はものづくりを通じて社会に貢献できる」という矜持を持ち、主体的に活動に取り組んでゆくはずである。さらには、専門科だけでなく、普通科教員にとってもカリキュラム・マネジメントに参画できる可能性を包含している。

取組がより学校全体の活動となるように、「授業参

観シート」には、目標や達成度を明示すること等授業改善の5つの視点を取り入れ、授業者に促している。また、「倉工スタンダード」を全HR教室に掲示し、生徒自身にも倉工の授業で身に付けるべき資質・能力を意識させている。

5 実践の具体例

(1) スーパーエンバイロメントハイスクール

研究開発事業

工業化学科は県教委から3年間の指定を受け、地球環境に優しく持続可能な産業社会を目指して、産廃の繊維の切れ端から酵素を使った糖化後、酵母発酵によるアルコール生成と残渣活用の研究を行っている。

この研究は専門5科がそれぞれの特性を生かし、横断的に連携して進めている。工業化学科は大学や民間企業の助言を受けて糖化を進める酵素を研究し、機械科はプラントの枠台を溶接で組み上げ、電気科は制御回路を考え、電子機械科は繊維を細かくするシュレッターの装置を製作し、テキスタイル工学科は、繊維の切れ端を供給するとともに、糖化の終わった残渣の再利用を提案するというものである。



紙のシュレッターゴミから糖化によるアルコールを生成した例は過去にあるが、繊維の切れ端の例はなく、最適な酵素や酵母菌の発見に試行錯誤を繰り返している。

これが生徒の探究心を呼び起こし、粘り強く仲間と協力しながら研究を進めている。

【生徒の感想(野瀬・妹尾・葛原の報告)】

- ・糖度を上げる実験をしてたくさん失敗して、なかなか結果が出なくて大変なことも多いけれど、仲間と協力して最後まで頑張れる気がする。
- ・エンバイロメント研究の内容はとても難しく大変だが、理論はわかっているので有意義にできている。研究の意義を感じている。

(2) 車椅子の点検・修理

機械科の3年生の課題研究では、毎年行っている地域貢献の取組として、学校近隣にある10余りの病院の車椅子の点検・修理を行っている。実習のはじめにその意義と到達目標を生徒に示し、改めて確認する機会

を設けた。単に壊れた箇所を直して終わりではなく、使う人の身になって直すことや病院に納めることを想定して清潔に仕上げることの必要性が確認された。

点検・整備は、車椅子のタイヤに空気を入れたり、車軸に油を差したりする軽微なものから、壊れた車体を分解し、パーツ交換して修繕するところまでを行っている。足を載せるステップの位置も仲間たちと絶えず確認し合い、座席を清掃し、消毒するなど、細部にわたって乗る人への配慮にこだわる光景が見られた。

【生徒の感想（山崎の報告）】

- ・修理方法をパートナーと話し合うことで、効率の良い点検・修理になった。病院の方から「ありがとう」の感謝の言葉をもらって嬉しかった。
- ・感染防止からマスクとフェイスシールドを付け、とても暑く辛い作業になりましたが、利用する患者さんのことを考え集中して作業ができました。

(3) フェイスシールドの製作

メカトロニクス研究部では、人類の新たな脅威となっている新型コロナウイルスの感染防止に向けて、ものづくりを通じて何ができるかを話し合った。



そこで、尽力されている医療関係の方々を守るために、電子機械科の実習で学んだ3Dプリンターを使い、フェイスシールドを提供することを考えた。後日、近隣の病院や小学校に寄贈することができた。

製作に当たっては、部員たちはネット上で公開されている設計図面を参考にしながらも、長時間の装着を想定し、頭部への負担がないようにフレーム部分に遊びを持たせたり、百均の透明シートを利用したりして快適性と経済性を追求した。装着した病院関係者からは、仕上がりの精度に驚きの声と感謝の気持ちが伝えられた。部員たちは、長時間の作業が報われる思いがしたと話している。

【生徒の感想（今井の報告）】

- ・丁寧に部品をはめ込んで作りました。
- ・社会のためにするのはとても意義があることだ。
- ・CADで製作したパーツを部員全員で協力して組み立てることで、たくさん作る事ができました。

(4) LEDイルミネーションパネルの製作

電気科の課題研究では、総社市が年末に実施しているSOJAイルミネーションに5年前から出展し駅前を飾っている。一昨年は西日本豪雨災害からの復興をテーマに数千個のLEDを用いてイルミネーションパネルを製作した。どんなデザインが被災者を元気付けるかを生徒たちは話し合い、被災地に馴染みがあり、全国的に有名な総社市のキャラクター「チュッピー」と雪だるまをモチーフにすることに決めた。

図案に合わせてLEDの配色を決め、使用する個数を計算によって割り出した。LEDを3000個余りとしたことで宵闇に浮かぶ図柄はより鮮明に見えるようになったが、確実に電気が通るためにはLEDを一つ一つ丁寧にハンダ付けしなくてはならない。実に根気の要る作業であるが、生徒たちは粘り強くこなしていった。点滅回路や色が変わるLEDを使用し、見た目にも飽きない工夫が加えられた。

【生徒の感想（大月の報告）】

- ・LEDの取付作業は地味で大変な作業でしたが、被災地の方に喜んでもらえるように作りました。
- ・有孔ボードにはめ込み、ハンダ付けの数が多いので、集中力と作業の効率化の大切さを学びました。

(5) エコバッグの製作

テキスタイル工学科は、繊維製品の製造から販売までが学べるように学科改編され、倉敷の繊維産業の新たな担い手を輩出することが期待されている。地元の繊維産業の歴史を学んだり、ワークショップを通じて繊維製品の魅力を地域の人々に発信したりしている。

テキスタイル工学科2年の実習では、地元企業と連携して、生徒たちがデザインを考えた図柄をシルクスクリーン印刷してエコバッグを製作した。完成したものは地元百貨店で販売され、来店者から好評を博した。

環境に関連のある図案のデザインや色合いを決定する段階で、仲間に作品のコンセプトを語ったり、見た目の印象を話し合ったりする姿が見られた。他者からの意見を参考にして微調整する光景も見られた。

【生徒の感想（松田・和氣の報告）】

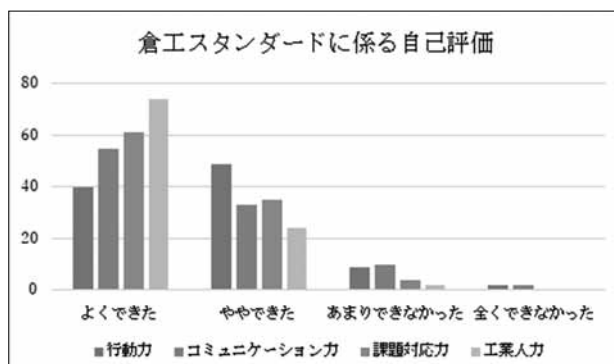
- ・誰かのために一からデザインして仕上げるのは、とても楽しいことだった。私のデザインは4回印刷らなくてはいけないので時間がかかった。
- ・友人との話し合いからデザインのヒントを得た。

6 仮説の検証 ～成果と課題～

「人づくり～倉工スタンダードの実践～」を学校経営目標に位置付け、カリキュラム・マネジメントとしたことの効果がどのようなであったかを検証するには、倉工スタンダード自体が生徒に身に付けさせたい資質・能力をねらいとしていることから、やはり生徒の反応から検証することが適当であると考えた。

よって、授業満足度や自己評価アンケート、実習における生徒の感想によって、課題の解決がなされているかどうかを確かめようとした。前項の5で各専門科から実習を一つずつ抽出して実践の具体例として(1)～(5)に示したのはそのためである。

県内工業高校を対象とした授業満足度調査(2007)では「十分満足」が13%、「わからない」が15%であったのに対し、本校は「十分満足」が63%、「わからない」は0%であった(2020)。これは生徒自身が授業のねらいを理解し、自らの資質・能力を伸ばさせるに効果があったと実感しているからと推認できる。



5つの実践例全てで自己評価アンケートや生徒の感想に、倉工スタンダードで目指す資質・能力に対する肯定的な反応が現れたことは、学校経営目標が専門科の垣根を越えて学校全体に及んだものと考えられる。

成果は教員側にもうかがえた。専門科において伝承したいものづくりの達成規準は、ルーブリックを活用した評価規準そのものであり、これまで熟練者に附随していた暗黙知が、校内OJTで次第に明確になっている。教員の大量退職期にあって、校内の人材育成を進めていく上でますます重要になってくると考える。

普通科教員にとっても、着任して直ぐに工業高校で目指す生徒像が把握できる。芸術科では研究を続けてきた教科主任が主導し、科全体で評価規準表を作成して指導に活用してゆこうとしている(2020速水)。

課題は、目標と評価が形骸化しないように、今日的な課題等を加味しながら、取組を常に検証し、改善に

向けてのPDCAサイクルを回すことである。

離職率の比較(2018は1年, 2017は2年, 2016年は3年以内)

卒業年	岡山県の割合	本校の割合	離職者数	就職総数
2018	16.5%	3.3%	8人	244人
2017	28.5%	5.5%	15人	271人
2016	37.1%	10.0%	26人	259人

社会に通用する工業人の育成がなされたかの検証は、入社後の離職率を一つの指標と捉えて追跡調査をしている(2019川上)。その結果、上の表にもあり、本校卒業生の離職率は、県の割合と比べて大きく下回っている。このことは、本校が長年培ってきたものづくりを通じた指導が、社会で通用する人づくりに役立っていることを証明しており、今後とも倉工スタンダードを学校経営目標に位置付け、学校全体の諸活動に広めていく必要性を感じている。

7 おわりに

倉工スタンダードを学校経営目標に位置付けたことに、教職員から異論は出なかった。それは長年研究した成果が当を得ていたからである。この教育資源とも言うべき本校の強みを学校全体に波及させるには、学校経営目標に位置付けて顕在化させることである。

高校生が卒業後、社会人としてどうあるべきかを考えることは、単に工業高校だけに求められていることではない。キャリア教育の視点に立てば、社会に必要な基礎的な力を学校に在籍する全ての生徒と教員が希求していく必要がある。本校にあっては、5つの専門科が特色ある教育課程で、ものづくりを競い合っても、人づくりにおいては、常に「チーム倉工」なのである。

主な引用参考文献

- 全国工業高等学校長協会「工業教育」(2020)
- 日本教育公務員弘済会岡山支部「教育研究集録」(2019)
- 全国工業高等学校長協会「工業高校生の専門的職業人として必要な資質・能力の評価手法の実践研究」(2018)



一人一人の思いや願いから学び合いの姿が 生まれる授業を目指して

—学校レベルで授業力向上を図る校内研修の取組—

岡山市立西大寺小学校 校長 田 中 一 郎

1 はじめに

本校は岡山市の東部、旧西大寺市の中核として豊かな歴史と文化に恵まれた地域にあり、子ども数514名、教職員58名の中規模校である。

明るく活動的で人懐こい子どもが多い反面、基礎学力の定着度をはじめ学力の差が大きく、善悪の判断力や規範意識が不十分な子どもがいるのが現状である。

そこで、学校生活の中心である授業に焦点を当て、西大寺中学校が先駆けて取り組んでいた「協同学習」の要素を取り入れながら、「受容的な聴き方ができる子ども」「ともに学ぼうとする子ども」「夢中になって学ぶ子ども」の姿を目指して日々取り組んでいる。

2 主題設定について

(1) 研究主題

一人一人の思いや願いから学び合いの姿が生まれる授業を目指して

(2) 主題設定の理由

本校では、学校教育目標「わたしが好き あなたが好き みんな大好き 西小っ子」の実現を目指し、長年「自己肯定感」と「交流力」の育成に取り組んできた。

平成28年度からは、聴き合いや伝え合いの効果的な支援の方法について研究を進めていながら、「自己肯定感」を感じたり、「交流力」を発揮したりすることが多様に期待できる「学び合い」に焦点を当て、現在の研究主題を設定した。「学び合いの姿が生まれる」とは、子ども達にグループでの聴き合いを強要するのではなく、「相談しないと分からない、話し合いたくなる状況をつくる」ことを意味する。一昨年度からは、課題の設定（ジャンプ課題）やつなぐ・もどすなど、授業の際、全教員が共通して心がけるポイントをまとめたものを「西大寺スタイル」として提示した。

本校は、1年生から6年生までの全ての子どもが「学び合う授業」を行ってきており、学び方が定着している。これまでの研究の継続と積み重ねにより、子ども達は授業から逃避することが少なくなり、仲間と

共に課題に取り組み、交流して考えを深めていく姿が成果として見られるようになってきている。しかし、細かく見ていくと、分からないのに黙っていたり、分かったふりをしていたりする子どももいることが分かってきた。

このような子どもが、主体的に課題に向き合っているようにするためには、今以上に互いに依存し合える小集団を育てていく必要があると考え、上記の研究主題を継続して研究を進めていくこととした。

また、教職員の入れ替わりにより、研究開始当初の危機感や「学び合う学び」の必要感の共有が難しくなってきた。また、「聴き合っている姿とは？」「学び合っている姿とは？」「授業デザインの書き方は？」など素朴な疑問が教職員から出てきている。子ども達に定着している「聴き合い、学び合う」学び方を、教職員が入れ替わっても継続させていくことが課題となっている。

そこで、目指す授業のイメージをまとめた「西大寺スタイル」（表1）の考え方を全職員で共通理解していく機会を意識的に設けていくこととした。

3 研究内容与方法

(1) 授業づくりの視点

①子どもに何を学ばせるのかをはっきりさせる。

教科等の目標を達成する。その力が付いたかをどのように評価するかを明確にしておく。

②ペアやグループでの協同的な学びを取り入れる。

小集団による学び合いは、考えの交流であって自分の考えを確かにしたり、足りない部分を友達の考えから補ったりするなど、自分の考えを支え、深めるためのものである。みんなで答えをしぼるものではない。1・2年生の子どもの場合、教師と一人一人の子どもがつながり、隣の友達とつながり、安心して学べる関係を築いていくため、ペア学習を入れて交流する。3年生以上はグループでの学び合いを授業の中に取り入れ、「グループのための全体」という発想で、グループ学習を授業の中心にする。このように、「一人にしない。見捨てない。」風土を

表1 西大寺スタイル

西 大 寺 ス タ イ ル → 学び合い

「西大寺には、特有の騒々しさがある。」この騒々しさの中で学ぶ権利を保障し、一人残らず児童が学習に向かうためにはどうしたらよいのだろうか。そこから始まった研究の基本形と考え方を本校職員として共通理解し、全児童に安定した6年間の学習を保障したい。

教師の心構え ^①	授業スタイル ^②	目指す子どもの姿 ^③
<p>① 聴き合える学級づくり。 友達の話に耳を傾けて聴き合うことができる学級をつくるために、まずは、教師が児童の話をしっかり聴き、聴き方のモデルを示す。(クラスに安心感が生まれる。)</p> <p>② 「つぎへ」授業づくり。 子ども同士で学び合うために、子ども同士をつなぐことを意識する。まずは教師と子どもがつながり、子どもと子どもをつないでいく。また、教師は教科のねらいをしっかりともち、子どもの考えとテキストをつなぐ。</p> <p>③ 子どもの思考に沿った授業づくり。 教師主導の教えるスタイルから児童が学びたいと思う授業にするために、導入の工夫・魅力的な課題の提示→誰かの分からないさ・気付き→仲間と学び合う学びを実現する授業過程を大切にしたい。</p>	<p>○教室は、コの字型を基本にする。(顔が見えると聴いてもらえる安心感が生まれる。)</p> <p>○欠席などがあったとしても、一人席を作らないように配慮する。</p> <p>○教師のトーンを下げる。しっとり話す。</p> <p>○教師はリボイスしない。大事なこと、取り上げたいことは子どもに繰り返させる。「○○さんが言ってることって、どういうこと?」</p> <p>○ペア・グループを進んで取り入れる。(確認・相談・共感・打開・比較・擦り合わせ)</p> <p>○話ができないペアは教師が積極的にケア。</p> <p>○グループで一つの答えにしない。</p> <p>○「グループのための全体」。全体で確認し、グループに戻すことで学びに向かわせる。</p> <p>○多面的・多角的に教材研究をして、幾筋もの流れを想定しておく。実践(授業)の過程で目の前の子どもの思考によってデザインを修正・再構成していく。</p> <p>○共有の学び→変化のある学びで授業を組み立てることを基本とする。共有の学びを基盤として、教科や単元の特質に即した、より質の高い学びをデザインする。</p>	<p>*優しい(受容的な)聴き方ができる子ども 【低学年】…ペア(隣の席)の友達が何を言いたいのか優しい気持ちで聴く。 【中・高学年】…グループ(3~4人)の友達何を言いたいのか優しい気持ちで聴く。 ◎全体でも身体を向け、分かるうとして聴く。 ×反射的に言う「同じです。」や拍手(聴くことの邪魔をしない。)</p> <p>*共に学びあうとする子ども (誰も一人にしない子ども) ◎「分からん。教えて。」 ◎「どうやって考えたの?」(間違いに對しても) ◎「これはどういうこと?」 ×分かったふり ×ひとりぼっち。</p> <p>*夢中になって学ぶ(探求する)子ども ◎黙々と鉛筆が動き続ける。 ◎のぞき込む。仲間を考えを聞く。 ◎仲間のつまずきから学ぶ。 ×違う場所を見ている。意識が飛んでいる。 ×寝る。手番さ。私語。離席。脱走。</p>

学級に熟成していくこと、すなわち教師も子ども達も一人一人を大切に作る姿勢を貫いていくと、教室に温かい空気感が生まれ、学びを支える居心地のよい、安心感のある学級へとつながっていくと考える。

③課題の質を上げる。

教科書レベルの共有課題の後、難易度を上げた、「ジャンプ課題」に取り組ませることを基本とする。課題の質を上げ、誰もが追求しようと夢中になるとき、学びが成立すると考える。課題のレベルについては、クラスや学年の実態に合わせるが、どの子どもにも達成感をもたせたい。

(2) 校内研修の取組

- ・個人研究テーマを設定する。
- ・全体公開授業を、1~6年、たんぼぼの年7回外部に向けて公開する。
- ・全体公開授業のうち3授業を佐藤雅彰先生、佐藤暁先生、残り4授業を秋山芳郎先生に指導・助言をしていただく。
- ・全教員は、原則、年2回公開授業を行う。1回目は、1学期のうちに公開するようにする。
- ・全体公開授業は、授業及び協議会に原則全員参加とし、その他の授業は、所属する学年団、授業に参加した教員で反省会を行う。進行は研究部で行う。
- ・西大寺中学校区の他園・他校の公開授業を、年2回以上参観し、協議会に参加する。計画はなるべく4月中に立て、参加人数に偏りがないようにする。

4 授業実践：5年生算数「小数÷小数」第8時

ア 個人研究テーマ「聴き合うことで、新たな発見ができる関係づくり」

聴き合い、話し合う中で新たな考えが生まれて楽しいと実感するためには、自分の思いをきちんと受け入れてもらえるというベースが大切であると考え。だからこそ、グループの学びの中で「分からない」を言うことができたり、つぶやきから突破口を見つけたりする経験を大切にしていく。

本時のねらいは、「余りのある小数のわり算を解くことができる」である。分からないことをきくことができているか、図などを根拠にして分かるように伝えられているかなどを確認しながら子ども同士のつながりを大事にし、新たな発見を共有する楽しさに気づかせていく。

イ 本時の展開(概要)

難易度が教科書レベルの共有課題を学習した後、難易度を上げたいわゆる「ジャンプ課題」を提示した。

親方がこのように命じてきた。
 「砂金をできるだけ少ない数の容器を収めておくのだ。容器はすり切れるまで入れておくのだぞ。」
 部屋の中央に65.7kgの砂金の山があり、周りには16.5kg入る容器、1.2kg入る容器がいくつもある。その容器をいくつ使えばよいだろう。

この問題の決定に至るまで、指導者は複数の問題を

作成していた。子どもに適した難易度、本時の目標と照らし合わせてどうかなど、課題についてはどの教員も悩むところである。しかし、ジャンプ課題を設定しようと心がけることで単元のねらいを考えたり、めあての本質に沿った課題の吟味をしたりする習慣がついてきている。

上記の問題を提示した際、「親方が～」の表現で子どもの顔が一齐に上がり、何度も問題を読んでいる姿が見られた。ただ、文章が長く、読み取りが難しい子どもにとってはどこから手をつけてよいか分からず、一人では考えを進めることができない子どもの姿も見られた。

本校では、高学年においてグループ学習を基本としているため、思わず話したくなる問題を提示すれば自然と話し合いが始まる。鉛筆が止まっている子どもも、友達の話聴いて鉛筆が動いたり、「どういうこと？」とたずねたりする姿が見られる。また、分かった子どもを指名するのではなく、分からなくて困っている子どもや途中まで分かっている子どもに話してもらうことで、分からなさを共有し、子どもの意見をつないでいく。こうして、解答にたどりつくまでに、グループと全体を何度も行き来する。本時でも、ある子どもが黒板を見て、納得したのか、急に鉛筆が動き始めた姿が印象的であった。



ウ 研究協議会での指導助言（抜粋）

- ・グループで声を出すことができない子の声をどう拾っていくかが大事。例えば「どういうことでこうなったの？」と問いかける。そのためには、ノートを取り方を丁寧にきちんとさせることもさせたい。
- ・言いたい子どもが言うことができるよう個に関わる機会を作る必要がある。
- ・問題の共有がしきれていないので、区切りを入れて、子どもの言葉でつないで戻していくことが大切。教師の役割は子どもの考えを聴き、クラス全体の子どものつなぎ戻してやること。
- ・注目していくべき子どもにきちんと光を当ててや

る。例えば、早く解く方法にたどり着いていた子がいたのに、それを友達に伝えることができずにいた。こういった子に声掛けをし、グループに広げていきたい。目立たないけどコツコツと頑張っている子をしっかり取り上げたい。

- ・グループの目の前の友達のノートに手を伸ばし、腰を浮かして教えている姿がいろんな場所で見られるようになるよ。

エ 成果と課題（指導者より）

○成果

子どもの関係づくりという観点から見てみる。1学期の中ほどという時期で、クラスづくりを行っている真最中での授業発表となった。研究のテーマである「聴き合う」ことに重点を置いて授業を進めていくことを心掛けるため、普段からグループでの活動や話し合う活動を多く取り入れるようにした。初めのころは話し合うことに戸惑いのある子どもが多く、相談できずにいる姿がよく見られた。しかし、日数や回数を重ねるごとに「どうやった？」とか「これでえんかなあ」といった、自分から聞く様子が見られるようになった。教師側の「グループに聞いてごらん」とか「どこで困ってる？」といった声掛けも、聴き合いを活発にしていこうと功を奏したとを感じる。

聴き合うことを心掛ける授業づくりは、授業のみの姿でなく、クラスの雰囲気や人間関係づくりといった学級づくりとリンクしているため、早い時期からの研究の取組は両面において有効だった。

○課題

ジャンプ課題の設定と聴き合いによる新たな発見の2点について課題がある。一つ目のジャンプ課題の設定については、レベル設定もあるが、それよりも計算領域における課題の持ち方である。今回の授業内容には、確実にできるようにさせるドリル要素が必要だが、題意を読み取る国語的要素が多分に含まれるジャンプ課題になってしまい、本時で学習を定着させるに至っていない。すべての授業においてジャンプさせるべきかどうか、校内でも話し合うべき課題である。

二つ目は「聴き合う」ということはどういうことかということである。「どうやるの。」ときくことができる子どもは多く、上手に考え方を教え、さらに分からないことを聞き返して理解している姿も見られるが、問題の答えを出すことで満足をしている子どももいる。グループの場面ごとに教師の声の掛け方が重要に

なってくることはもちろんだが、課題提示の仕方にもかわる。子どもが相談したくなる、話し合うことで解決の糸口が見つかるような課題を設定し、解きたくなるように提示をしていくことも重要である。

5 成果と課題

○成果

昨年度までの2年間の教育に関する総合調査の結果は以下のものであった。(質問文は抜粋。数値は肯定的な回答の割合。単位は%)

質問文	H30	R1
授業では、友達と話していることをよく聞いている。	91.3	91.5
授業では、自分の話を友達に聞いてもらえていると思う。	82.4	82.1
授業で考え方や解き方が分からないときに、友達や先生にやり方を聴くことができる。	80.5	82.9
授業でむずかしい問題に挑戦することは楽しい。	71.2	77.3
授業で友達とペアやグループになって学ぶと勉強がよく分かる。	85.7	87.5

授業に関しての項目は、肯定的な回答をした子どもの割合が7割を超えてきており、全校で学び合う授業を目指して取り組んできた成果が表れてきていると言える。

○子どもの姿

自分から「教えて。」と言えなかった子どもが、グループ内で、たずねることが徐々にできるようになってきており、クラス全体に自分の困り感を伝えられる子どもも出てきた。このように子ども同士で学び合うことで素直に聴くことができ、そのことが自信につながり、学ぶ意欲が高まってきた。

○教師の姿

授業をする際、心がけるポイントをまとめた「西大寺スタイル」を全職員で意識して行うことで、子どもがどの教室でも同じ学び方を身に付けることができると確信している。今後も継続していきたい。

○課題

授業中つまづいた子どもが「分からん、教えて。」と全員言えるようになるのが理想であるが、どうしても言えない子どもがいるのも明らかになった。今後は、学びの中で誰も一人にしない授業を教師が心がけるとともに、子どもも取り組むことが楽しいという思いをもちつつ、分からないで困っている友達はいないかと考えることのできる、そんな温かい学習集団づくりを目指していきたい。

6 おわりに

研究推進委員会の授業デザインの検討では、「解いてみたい」という衝動に駆られて、つい問題を解き始めてしまうほど、練られた課題には魅力があった。『ジャンプ課題』とは、子どもたちにとってどんな課題なのか?という問いかけを常にもちながら、試行錯誤を行う中で、確かに、課題と出会った子どもたちは、何とか課題を解決しようと夢中になって取り組んでいた。そして、自分一人では解決できそうにないと思ったとき、あきらめずに取り組み続けるためには、学び合う仲間が必要であり、また、これまで一生懸命課題に向き合った子どもは、単に答えを伝えられただけでは満足できず、「どうして、そうなるの?」と聞きたくなる。課題解決に至らず、困っているもの同士の困り感の共有や、何とか解決の糸口を共に見出そうと試行錯誤する思考にこそ価値がある。「学びから逃げない」「学び続けようとする姿」そのものが、私たちが目指している「学びに夢中になる子ども達」ではないか。このような学びの環境を保障するためには、学習集団の支持的風土が欠かせないこともこれまでの研究から明らかになってきており、学びの支持的風土を生み出すためには、「聴く」を大切にしたい授業づくりや、「分からない」が、真の学びのスタートであり、「分からない」があるから学びが深まるという価値をみんなで共有することを日々の授業、学校生活の中で積み上げ、醸成することが必要である。

今年の成果を次につなげ、さらに、本校の目指している「一人一人の思いや願いから学び合いの姿が生まれる授業」に迫ることができるようしていきたい。

参考文献

『学校を改革する』学びの共同体の構想と実践』
(佐藤学 著) 岩波書店 2012年



集中力を高め、 学びの意欲と生きる力を育む学校づくり

—全校で取り組む徹底反復学習を基盤として—

高梁市立有漢西小学校 校長 本倉 弘美

1 はじめに

のどかな山間にある落ち着いた学校。本校に赴任したときの第1印象である。学区内には、コンビニはもちろん学習塾もない。子どもたちは素直で優しく、学校でのんびりと過ごしている。

一見とても平和で、何も問題がないように思える。しかし、本当にこれでよいのだろうか。子どもたちはこの町からいずれはもっと大きな社会へと関わりを広げていく。そんなとき、生きるための力が身についていると言えるのだろうか。それなら、小学校に在るうちに、その力を少しでもつけさせたい。小さな町の学校で、将来に向けての生きる力をつけさせたい。

そのために、今取り組んでいる徹底反復学習を生かしていくことで、目的が達成できるのではないかと考えた。

2 本校の現状

本校に赴任し、学校の様子を直に感じるようになって、この学校にもさまざまな課題があることがはっきりしてきた。

まず一番には、学力の低さである。学力テストの結果は、高梁市内の平均をかなり下回っていた。特に低学力の児童が多く、学習の定着が十分ではない。また、学習に対する意欲が低く、できる喜びに気づいていない児童が多いことが課題だと感じた。

そして次の問題は不登校である。小さい学校ながら、欠席数の多い児童が複数人いて、改善が難しい状態であった。欠席による学習の遅れも、学力低下、不登校に拍車をかけているのだと感じられた。

そのような実態を踏まえて、前校長は平成28年1月より、徹底反復学習を取り入れた。週4回、(火～金)朝の15分間で音読・百マス計算・漢字学習をテンポよく行うことにより、集中力を高め、学習効率をあげ学習への意欲を高めることが目的であった。

私が赴任したのは、徹底反復学習を取り入れて1年と3ヶ月がたった時であった。児童には朝の学習パターンはすでに身につけており、活動は軌道に乗って

きた状態であった。だが、まだ学校としてのスタイルができ上がっていたとはいえ、学習効果もはっきりしていなかった。

そこで、児童の生きる力を高めていくために、この徹底反復学習をより効果的に行い、今以上に全職員で取り組んでいくことが必要なのではないかと考えた。

3 研究仮説

徹底反復学習を軸として、全職員が共通の目的に向かって取り組むことで、児童の学力や学習効果が上がり、学習意欲を高めることができると考える。また、学習意欲が高まった児童は、自分に自信をもち、自分から学習することに前向きになり、生きる力を付けていくことができるであろう。

また、全職員で取り組むことにより、教職員集団をより強固なものにしていくことができ、学校としての特色を打ち出すことができるであろう。

4 具体的な取組

学校で一つの活動を継続して行っていくためには、様々な工夫が必要である。教職員が年々変わっていく中、徹底反復学習を継続していくためには、どのように活動を引き継ぎ、どのように発展させ、どのように児童に反映させていくかを考えて取り組んできた。

(1) 職員研修とPDCAサイクルによる改善

ア、職員研修

徹底反復学習を継続するにあたって、毎年の人事異動は避けられない。本校の場合も、年度によっては、担任の半数以上が新しい教員になるという年が2年も続いた。取組に最初から関わっていた職員も全て異動した。さしずめそれは、毎年一からのスタートである。

年度当初、まずは職員研修から始める。初めに校長から活動のねらいや意義について語った後、活動の詳細について研究主任が中心となって研修をする。

朝の15分の活動については、細かくマニュアル化を進めており、指導の均一化が図れるようになってきている。そのため、異動が多くても、すぐに一定のレベ

ルでの指導が可能になっている。

また、実際に児童が登校するようになってから、異動した教員とその学級は、経験のある教員の活動を見学する機会をもつようにしている。新しく赴任した教員は実際の活動の雰囲気を感じることができ、一緒に見学している児童も、自分より上の学年の児童の様子を見て、意欲を高める目的も果たしている。(図1)

そして、1学期のうちに何回か職員研修をもち、その中で課題と考えることを出し合い、解決していくようにしている。全体で話し合うことで、活動を何度も見直し、より集中できる活動へと工夫していくようにしている。

このようなPDCAサイクルを繰り返すことで、活動の問題点を少しずつ改善し、密度の濃い活動になってきている。3年経過した現在は、ほぼ無駄のない形



【図1】朝学習見学の様子

イ、学力の共通理解

全国学力テスト・県の学力テスト等について、採点結果と細かい個々の分析をして職員研修で共有している。それぞれの学年の苦手な領域や間違いの多かった問題等を共通理解することで、系統性を考えた指導をすることが可能である。実際、間違いの多かった問題等について重点的に復習を行うことで、次年度に成果が見られた問題もあった。

また、朝の活動で行っている百マス計算については、同じ計算を3週間続けて行い、タイムを毎日計って学期ごとに伸びを全職員で共有した。記録は管理職が管理し、一人一人の児童について、どれだけ記録が縮まっているか、昨年と比べてどのくらいの伸びが見られるか等を細かく示し、個々の成果をきちんと見極めるようにした。(図2) その結果、4年目の本年度は、1学期の終わりまでに、2年生から6年生までの児童のうち、2分以内で百問をクリアする児童が9割以上、1分以内で百問をクリアする児童が半数以上という驚くべき成果をあげている。この結果は担任を通じて個々の児童にも知らせ、それぞれが自信をもって取り組む意欲につながっている。

漢字の学習についても、全職員がやり方を統一して取り組んでいる。特に、新出漢字については、早い段階で当該学年の漢字を全部習得し、繰り返し練習をして定着する方法をとっ

ごんやに伸びました！よくがんばったね！
百マス計算

	11月3週	12月3週	2月	タイムの伸び
1	99問	2:53	1:47	2:13
2	85問	2:57	1:40	2:20
3	3:56	1:31	1:02	2:54
4	2:39	1:32	1:13	1:26
5	60問	3:12	1:50	2:10
6	62問	4:17	2:10	1:50
7	3:44	1:38	1:15	2:29
8	3:27	1:45	1:15	2:12

3学期に伸び直し行うことでタイムが伸びています！

【図2】2年生のタイムの伸び

管理職が採点と分析をして、成績を全職員で共有している。習得が苦手な児童に対しては、個別指導を行いながら定着をめざしている。

以上のように全職員ですべての児童の実態を共有することで、同じ目的のもとに指導を進めていくことが可能になり、全体の学力アップにつながっている。

ウ、担任交流週間

朝の学習を継続していくにあたり、互いの取組についても教職員が互いに知っておくことが大切である。そこで、年2回、研究主任が担任交流週間の計画を立てて実施している。これは、それぞれの学年の担任が入れ替わり、様々な学年の朝の活動を指導するものである。担任は、自分の担任していない学年で朝の活動を行う。活動を通して、担任は新しい気づきがあったり、それぞれの学年の取組が分かったりし、自分の活動を見直す機会になっている。担任交流週間を実施することで、職員間の共通理解が進み、朝の活動がより充実している。

(2) 管理職のリーダーシップ

ア、朝の活動の参観

朝の活動については、校長と教頭とで毎日全クラスを参観している。時に漢字の採点を手伝ったり、児童に声をかけたりして、各学級の学習状況を観察している。また、漢字練習や百マス計算についても、児童の様子を観察し、気づいたことを研究主任や担任と共有して指導に生かしている。

管理職の参観は、児童だけでなく、職員の指導の様子も観察している。指導の中で気になるところがあった場合には、できるだけ早めにアドバイスをしたり、指導がよくなった場合は、個々に認めたりするなど、常に職員の指導のブラッシュアップを図っている。

イ、管理職の学習への参画

管理職が児童の実態を細かく把握し、個別指導や学習プリント作り、採点などを行って学習状況を把握することも大切にしている。

個別指導では、漢字学習や九九など、昼休み等を利用して担任では手が回らないところもフォローできるようにしている。その結果、個々に伸びが感じられた児童もあった。

また、学力テストの採点などに関わることで、個々の実態を管理職がしっかり把握し、学級での指導や観察に生かしていくことができ、その後の個別指導にも役立っている。

ウ、先進校視察

校長が徹底反復学習に取り組んでいる先進校に連絡を取り、毎年全職員を派遣して研修させるように計画している。

それぞれの職員は、目的意識をもって視察をし、毎年新しい取組について持ち帰っている。

その中でも本校の活動に取り入れられそうな取組があれば、すぐに全職員に広げ、共有するようにしている。一昨年度は、朝の活動の前に行う「タオル体操」を実施している学校を視察し、体育主任がすぐに本校



の活動として取り入れた。今では、本校でも活動が定着し、朝の活動の前のウォーミングアップとして活発に行われている。(図3)

【図3】定着した朝の「タオル体操」の様子

また、昨年度は、低学年の担任が先進校を視察し、「多層化言語モデルMIM」の研修を受け、さっそく低学年の言語指導に生かしている。これにより、低学年の言語指導に大きな伸びが感じられた。

このように、ただ管理職の指示で学校を見てくるだけではなく、職員が目的をもって視察に行っている。そして、それぞれの職員が、学校に生かせる事を持ち帰り、進んで本校の指導に取り入れているところにも、先進校視察の意義と、教職員の自主性、学校ぐるみの取組のよさを感じている。

エ、啓発資料の作成

徹底反復学習に取り組むにあたって、まず「なぜ取り組むか」について児童と教職員が意義を知っておくことが大切である。目的がなければ意欲も生まれない。

そこで、管理職が中心となり、児童向けにプレゼンを作り、それぞれの学級で担任から提示を行った。今年で5年目を迎える徹底反復学習であるが、児童、教職員にも活動の大切さを知らせることができ、より学校一丸となって取り組む姿勢ができた。

5 成果と課題

(1) 基礎基本の定着と集中力の向上

朝の学習を継続していくことで、まず、計算力・漢字の習得能力が上がっている。

百マス計算に関しては、昨年度末には、ほぼ全校の児童が、2分半以内にたし算・ひき算・かけ算の百問を解くことができるようになっている。(高学年に関してはほぼ1分半以内)また、計算力は普通の授業にも反映し、学習がテンポよく進むため、個に応じた問題を解く時間が確保できるようになっている。

漢字に関しても、1月の校内漢字検定でほとんどの児童が9割以上を達成している。校内で取り組んでいる公式の漢字検定でも、多くの児童が受験し、ほぼ全員が合格している。

漢字の読み書きの向上は、様々な学習にもよい影響を及ぼしている。どの学年の児童も、習った漢字を作文などに多く使って書くことができるようになった。また、次の学年の漢字に興味を示し、自主的に練習する児童も見られるようになった。それと同時に読解力もつき、成績の伸びも見られた。

さらに、学習以外の活動でも、集中力がついたことで、てきぱきと手早く行うことができている。

毎年行っている5年生の田植えも、毎回短時間で終わらせることができ、3年生のそろばんの学習でも、講師の先生が「驚くほど作業が早い」とおっしゃっていた。徹底反復学習の成果が、学習以外のことにも及んでいることをうれしく思っている。

(2) 不登校児・低学力児の変化

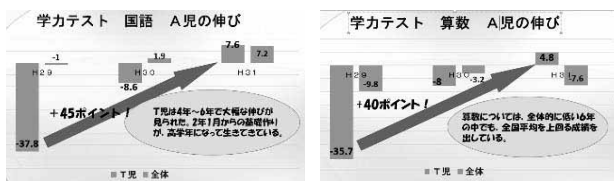
徹底反復学習を始める前には、朝の学習を苦痛に感じ、登校が困難になる児童が増えるのではないかと危惧した保護者もあったと聞いている。しかし、本校では、そのような児童は見られなかった。むしろ、徹底反復学習を続けていくうちに、不登校の傾向が少しずつ改善していった。

(例) 欠席数の推移

4年男子 → 44 (H28) → 21 (H29) → 16 (H30)
4年女子 → 56 (H28) → 22 (H29) → 17 (H30)

また、低学力児についても、驚くべき伸びが見られた。

A児は4年生の頃までは学年でも特に学習が困難な児童であったが、まじめに取り組む姿勢は身につけていた。そのA児の徹底反復学習への地道な取組が5年生、6年生と成果として表れてきた。6年生の全国学力テストでは、全国平均をも上回る成績へと向上した。(図4)



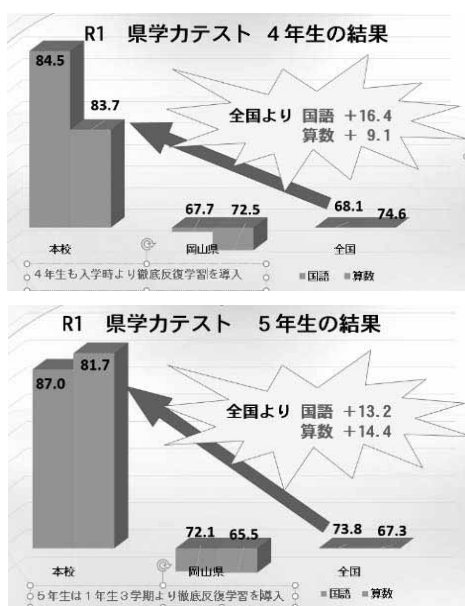
【図4】 A児の学力テストの伸び

それに伴い、A児は自主学習等にも積極的に取り組むようになり、学習に自信をもつことができるようになった。

(3) 学力の向上と意識の変化

徹底反復学習を行うことで、低学力児を中心に全体のボトムアップが進み、その成果が学力テスト等にも表れ、学力が安定してきた。

徹底反復学習を始めてまる3年過ぎた平成31年度(令和元年度)の学力調査では、対象の3～6年生のうち、6年生の算数以外は、全国平均を大きく上回った。どの学年にも、学習が苦手な児童はあるものの、全体の学力向上が進んでいることが証明できた。(図5)



【図5】 令和元年度 岡山県学力テスト 4年生、5年生の結果

また、令和2年度の学力調査でも、自校採点ではあるが、3～6年生の全てにおいて、全国を上回る成績

を上げることができている。年数をかけて積み上げてきたことが成果として表れていることを実感している。

児童の意識についても、変化が見られた。2年前より、自主学習を奨励し、5冊達成した児童を表彰しているが、自主学習に取り組む児童が増えてきている。その中には、学校の学習範囲を超えた内容も見られる。

B児は、低学年のときには集中力が乏しく、学習でもミスが多かったが、5、6年でめきめきと学力を伸ばし、自主学習では、高校の範囲まで歴史の学習を追究した。

また、別の児童についても、学力向上に伴って、学習に自信をつけ、将来の夢についても、「国連で働きたい」「有漢に帰って病院を開きたい」など、今までになかった目標をもつ児童も見られるようになった。徹底反復学習による学力の向上から、自己肯定感も高まり、大きな目標を実現する自信が身につけてきたのだと考えられる。

(4) 今後の課題

徹底反復学習に取り組むことで、児童の学力や集中力の向上をめざし、改善を加えながら一定の成果を上げることができたが、本当の継続の難しさはこれからではないかと思う。

一つ目は、児童の実態の変容である。入学予定児童の中にも、特別な支援が必要な児童がどんどん増えてきている。学習に取り組むことが難しい児童に関わりながら、今までの取組をどのように継続していくかは今後の課題になる。今以上に教職員集団で工夫を重ねて、実態に合った形で取り組んでいきたい。

二つ目は、職員の異動である。現在取り組んでいる内容について、引き継ぐこと、残していくことを分かりやすく整理して次につなげていくことが必要である。今まで職員で積み上げたものが同じレベルで継続できるよう、現在の本校の職員で先を見越した準備を考慮しておかなければならないと思う。

徹底反復学習を核とした学校ぐるみの取組は、保護者の方からもよい評価をいただいている。学校の力は、児童の学力や集中力、そして将来の目標にも及ぶ大きな力である。これからを生きる子どもたちのためにも、学校力を信じて、今後の児童の成長を見守りたい。



特別活動を通して、児童の意欲を育てる学校づくり

— 「役割」「期待」「承認」のプロセスを意識して—

赤磐市立山陽東小学校 校長 石原 順子

1 研究主題設定の理由

本校は、赤磐市の南部に位置し、新興住宅地の中にある児童数592名、学級数27学級の中規模校である。本校でここ数年継続している課題として、「学力低位層の底上げ」と「新規不登校児童の縮減」の2点が挙げられる。

「学力向上」と「不登校」の問題は、多くの学校が課題としているが、本校の課題であるこの2点の根は同じではないかと考えられる。それは、本校の児童が常に何かを与えられ、自ら考える必要がない学校生活を過ごしているように見えることである。児童の自主性に乏しいという言葉が聞けるが、それは、自主性を育てるだけの仕掛けが学校にないということで、本校にまさにあてはまることであった。そのために、児童は与えられた課題に対しては、真面目に取り組むが、自分で「これをやってみたい。」という思いは弱い。その結果として、学ぶ意欲や人との関わりの弱さが、学力や不登校といった課題として出てくるのではないかと考えた。

この分析をもとに、児童の主体的な活動を教育課程に具体的に位置づけ、時間はかかるが、全教職員が同じ方向を向いて、児童の自主性を育てるために、モデルを提示したり、見通しをもって活動を進めたりすることが必要だと考えた。そこで、現在、赤磐市校長会が推進している「児童生徒の自己肯定感を高めることを基盤に、学力向上を図る」という研究に学び、特別活動の中で「役割」「期待」「承認」というプロセスを利用して、研究を進めることとした。

2 仮説の設定

本市の校長会では、校長会としての研究テーマを定め、各校が工夫して取組を進めている。ここ数年は「児童生徒の自己肯定感を高めることを基盤に、学力向上を図る」ことを研究の方向として示していた。これは、平成27年度に市内の高陽中学校ブロックの研究会で示された「役割」→「期待」→「承認」のプロセスを大切にし、活動意欲を高めるというものである。(図1)

2019年度 研究の方向について 赤磐市校長会
研究テーマ

「児童生徒の自己肯定感を高めることを基盤に学力向上を図る」

1 「児童生徒の自己肯定感」を高める

落ち着いた学習環境を維持し、児童生徒が主体的に活動する場面を設定することで、学力向上のための基盤をつくります。

(1) 「役割」→「期待」→「承認」のプロセスを大切にし、次の活動意欲に繋がります。

(2) 黙労・靴そろえ・挨拶・時間厳守などの凡事徹底に取り組みます。

※客観的資料に基づき「自己肯定感」の変化を継続的に把握し、自己評価を行います。

(図1) 赤磐市校長会の取組について (一部抜粋)

そこで、これらの研究成果を参考にして、特別活動を教育課程に明確に位置づけ、委員会活動や集会活動、縦割り班活動等で、児童に意図的に「役割」を与えることとした。役割を与えられた児童は「自分たちで考え」「自分たちの考えが具体的な形になる」経験を積むことができる。また、それらの経験はすべてが成功しないものの、途中の経過を承認することで、どの児童も「自分は誰かの役に立っている」という自己有用感を形成し、それが、次への活動の意欲や新たな行動につながるのではないかと考えた。

また、実施に当たっては、活動の中心は委員会活動や縦割り班活動を行う高学年が中心になるが、全学年において、特別活動への取組、とくに学年の実態に応じた学級会を実施することで、自分たちで考えて、自分たちで決めるというプロセスを意識することとした。

さらに、仮説の検証には、Q U検査の結果を客観的な資料として用いることとした。

3 推進組織

今回の取組を進めるに当たっては、児童会担当が中心となって取り組むこととした。その中で、各委員会担当が意識して、児童に役割を与えることを共通理解するよう、担当者が確認をしていった。

また、これらの活動の素地となる特別活動を意識することで、新学習指導要領の改訂に沿った特別活動を考えていくこととした。

4 具体的な取組

(1) 児童会での取組

どの学校においても、学校教育目標をより具体化し、各学年・各学級の目標としている。同様に、学校教育目標を受けて児童会としてのめあてを定めることで、児童会を中心にして、各委員会の活動にも活動の柱が定まり、足並みをそろえた活動を進めることができると考えた。

代表委員会の話し合いを通して、令和元年度の取組は「元気でかがやく東小」と決定した。全児童が意識できるように、校門や校内にめあての言葉を掲示し、いつも意識できるようにした。



(写真) 学校のめあての掲示

(2) 各委員会における取組

代表委員会での提案を受け、各委員会でも児童が主体となって取組を進めたが、そのうち、特徴的な取組を進めた2つの委員会について紹介したい。

① 図書委員会の取組

以前から、学校図書館司書と連携して図書委員会は独自の取組を進めていたが、今までの経験を生かして、さらに児童が主体的に活動できる取組を行った。その中で、今までの取組に学びながら、児童が主体的に取組を進めてきた「ひかり幼稚園での読み聞かせ活動」と、「児童朝会での取組」について紹介する。

(ア) ひかり幼稚園への読み聞かせ活動

平成30年度から、学校の敷地を接するひかり幼稚園に出向き、読み聞かせを行っていたが、この活動を児童が中心となってできる活動とした。日程調整は担当教員が行ったが、園児の年齢を考慮しての選書や読み聞かせの練習は、児童が主体的に行っていた。

大型絵本を利用した読み聞かせは、相手を意識した

声や表現など、児童にとってはやや難しい内容もあったが、図書館司書の先生や委員会の先生方からの指導を受けながら練習に励み、読み聞かせ当日は、堂々と読み聞かせを行うことができた。この活動は各学期1回ずつ行い、読み聞かせに慣れてきた委員会の児童が、幼稚園の園児に感想を聞くなど、自分たちでスムーズに進行をすることもできるようになった。



(写真) ひかり幼稚園での読み聞かせ

(イ) 児童朝会での取組

本校では、年に1回、各委員会が活動の様子を紹介する取組を行っている。図書委員会では、「東小読書週間」を紹介するために、掲示物からクイズの作成、事前の練習などを自主的に行うようにした。活動を進めるには、時間の確保も大きな課題となったが、話し合いに時間をかけ、その他の活動は分担するなど、教師の助言を得ながら、熱心に活動を進めることができた。

② 体育委員会の取組

体育委員会では、毎年「月一あそび」という名前で、月に一回、全校の希望者が集まって遊ぶ取組を続けていた。学年の枠を取り払っての活動で、ダイナミックな遊びができていたのだが、ここ数年の児童数の増加により、全校が集まる遊びができにくくなってきた。そこで、新たな取組として「全校で1500人突破せよ」という取組を、12月の始めに行なった。これは、全校の児童が外で遊ぶことを目指すもので、学級・学年対抗の取組とはせず、元気に遊ぶことを目的にするなど、児童が考えた取組となって



(写真) 外遊びグラフ

いた。この取組の経過は、児童玄関で確認することができ、登校した児童が励みにすることもできた。

一週間の取組だったが、児童の意識が高まったことで、結果としては、全校で2256人が外遊びをしたことが分かり、外遊びの活動への意欲がさらに高まった。毎日の外遊び参加者を確認し、グラフを伸ばしていく活動を通して、委員会の児童も自分たちの取組が目に見える形として成果をあげていることに、達成感を感じていた。

(3) 縦割り班活動

縦割り班活動では、主に6年生が中心となるが、5年生にも役割を与えて活動を進めることで、役割分担ができ、より意欲的に活動できると考えた。昨年度までの取組に学びながらも、当初は教員の支援が必要である。そこで、当然ではあるが、教員の関わりについては、4・5月は支援をするが、それ以降は、自分たちで進めることができるようにすることを共通理解して進めて行った。

とくに6年生は、遊びの場所や計画について学級内で相談することで、友達から教えてもらったアイデアを活用して、縦割り班遊びを工夫する姿も見られた。

(4) 学校が一体となった「あいさつ運動」

少しずつではあるが、児童が主体的な取組を進める場面が増えてきた中で、依然として「あいさつ」が十分にできていないという課題も明らかになってきた。そこで、まずは、学校が一体となって「あいさつ運動」を進めることとした。基本は、児童にあいさつの意義を各学級で示して「役割」を与え、小さな変化を見逃さずに褒めてさらなる「期待」を伝え、各学級の代表となる児童を学校全体で表彰するという「承認」のプロセスを踏むこととした。

最初は、手探りの取組だったが、10月に第一回の「あいさつチャンピオン」の表彰をしたところ、学校の雰囲気に変化し、あいさつに前向きになる児童が多くなってきた。また、「あいさつチャンピオン」になった児童が、各学級や登校班でのあいさつの核となり、周囲の児童にもさらにより影響を与えることとなった。

この活動については、地域や保護者の方からも「登下校のあいさつがとても良くなった」「子どもがあいさつチャンピオンを取るという目標をもって、とても

意欲的ががんばっている」といった意見をいただくことができたので、そうした意見を児童に紹介して、さらにより流れをつくることができた。



(写真) あいさつチャンピオンの校長室での表彰

5 成果と課題

(1) 成果

① QU検査の結果から

4～6学年で実施したQU検査の結果は、次のようになった。

4年生 (%)	学級生活満足	非承認	学級生活不満足	侵害行為認知
5月	40	17	33	10
12月	57	13	20	10

5年生 (%)	学級生活満足	非承認	学級生活不満足	侵害行為認知
5月	59	20	15	6
12月	61	13	16	10

6年生 (%)	学級生活満足	非承認	学級生活不満足	侵害行為認知
5月	71	11	9	9
12月	73	9	8	11

(各学年でhyper-QUを実施し、集計したもの)

今回の集計では、どの学年においても、学級生活満足群（学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている児童）の割合が高くなっており、かつ非承認群（学級内で認められることが少ない児童）の割合が下がっていることが認められた。5年、6年については、5月の段階ですでに学級生活満足群が高い状況にあったので、伸び幅は少なかった。この結果は、各担任の学級経営の賜ではあるが、学校で統一して「役

割」「期待」「承認」というプロセスを続けてきた成果が影響を与えた部分もあるのではないかと考える。

② 他の学校教育活動への影響から

学習発表会やその他の集会活動では、児童が自分たちで役割を求める姿も見られるようになってきた。下に示した写真は、ダンスクラブが自主的に行った発表会の様子である。業間休みの時間を使ってクラブの成果を発表することができた。当日は、多くの児童が発表会を見るために集まり、一緒にダンスをするコーナーでは、曲に合わせて踊る低学年児童も多く見られた。



(写真) ダンスクラブ発表会の様子

③ 6年生の「卒業プロジェクト」から

今回の取組で、最も変容が大きかったのは6年生である。12月末から児童が進めてきた「卒業プロジェクト」では、計画・立案を自分たちで行い、地域の公園や通学路の清掃活動を行っていった。また、火曜日の朝には、「読み聞かせ」活動を低学年の教室で行う姿も見られた。担任と、最高学年の姿を共に考えたことで、児童が次々と活動を計画し、実行に移していくことができた。とくに地域の活動では、地域の方からの声が、何よりも大きな承認になっていた。



(写真) 地域の通学路の清掃活動の様子

(2) 課題

今回の研究についての成果の検証ができる3月が休校になったことで、次年度の中心学年となる5年生の取組や意欲について、十分に見取ることができなかったのは、一番の課題である。

また、「役割」「期待」「承認」というプロセスをよりダイナミックに回していくためには、やはり、学校として、特別活動をどのように位置づけ、学年の実態に応じて進めていくかということが強く求められることも明確になった。

とくに、学級会を更に充実させていく必要性が明らかになったことは、新学習指導要領の本格実施に向けて、大きな気付きであった。なかでも、合意形成と、担任の関わり方に本校の課題があることも明確になった。合意形成は、安易に一方の意見に同意するのではなく、折り合いを付けながら意見をまとめていくことが求められる。しかし、折り合いを付けることなく、一方の意見に同調している児童の姿がある。また、若い担任が多い本校では、担任が学級会の中に必要以上に関わってしまい、児童の自主的な活動を見守ることができていない場面も見られることがあった。

こうした課題に対応するために、3学期からは、次年度に向けて、新学習指導要領の特別活動について学ぶ機会を設けたり、学級会の進め方についてのOJT研修会を開催したりしてきた。学校の休校に伴い、研究の検証は十分ではないが、次年度に向けて、明確な課題を持つことができたと考えている。

6 おわりに

本研究は、主に令和元年度の内容が中心となっているが、平成30年度から、少しずつ準備をしてきたものである。これらの取組が、本校の課題である不登校や、学力向上の課題にどのように影響するかは明確ではない。ただ、令和2年度の7月時点で、昨年度まで「不登校」の状態にあった児童が登校しているケースも3件あることから、何らかの影響があるのではないかと考えている。

すべてにおいて不確定なことが多い現状ではあるが、新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」を特別活動にも位置づけられるよう、さらに研究を続けていきたい。



「不登校ゼロ」の学校づくりに必要なこと

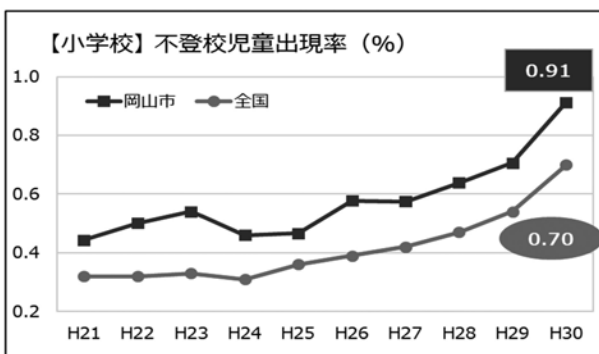
—児童の実態分析と本校の取組の検証を通して—

岡山市立浦安小学校 校長 服部 道明

1 はじめに

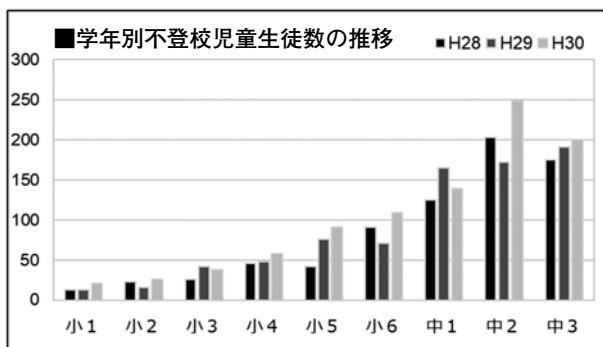
岡山市では平成29年2月、「岡山市教育大綱」が策定され、目標として「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」の2つが掲げられた。このうち、「問題行動等の防止及び解決」では、不登校出現率が全国平均を10年以上上回る状態が続いていたことを受けて、小学校の不登校出現率を「平成27年度の全国平均0.42以下とする」という目標値が示された。

ところが、教育委員会のリーダーシップのもと、各学校で様々な取組が行われたにもかかわらず、教育大綱の策定以降出現率は年々高くなり、平成30年度の岡山市の出現率は0.91となった。岡山市教育大綱では、平成32年度（令和2年度）の目標達成を目指しているため、本年度の実績が期待されるころではあるが、大変厳しい状況にある。



※出現率＝不登校児童数÷全児童数×100

一方、小学校の不登校児童の増加は全国的な傾向であり、そのことは当然、中学校以降へも大きな影響を与えることから、小学校段階での未然防止の取組を検証し、効果的な取組を共有する必要がある。



2 主題設定の理由

本校は岡山市南区にあり、全校児童568名（令和2年5月1日現在）、25学級（通常学級17学級、特別支援学級8学級）の中規模校である。岡山市の出現率0.91を掛け合わせると、不登校児童が5名いてもおかしくない規模の本校であるが、「不登校ゼロ」を昨年度までの数年間継続している。

本校では、このことを誇りに思うとともに、続けていきたいと強く考えており、今年度の教育基本計画にも「子どもたちが行きたいと思える学校づくり（不登校ゼロの継続）」を掲げている。そのために、「本校にはどうして不登校児童がいないのか」ということを分析・検証し、子どもや教職員がかわっても「不登校ゼロ」の学校づくりを理論的かつ持続的に実践していく必要があると考え、本研究における主題とした。

令和2（2020）年度 岡山市立浦安小学校 教育基本計画

■学校教育目標

愛・夢そして挑戦



■めざす子ども像

- ◎愛 → 「友達や自然を大切にする子」
- ◎夢 → 「力をつけ、なりたい自分を見つける子」
- ◎挑戦 → 「目標をもって努力し続ける子」

■具体的な取組

- ① 安全で安心できる学校づくり（子どもの命と健康を守ることが最優先）
- ② 子どもたちが「行きたい」と思える学校づくり（不登校「0」の継続）
- ③ 互いに認め合い、高め合う学級集団づくり
- ④ 主体的・対話的で深い学びをめざした魅力ある授業づくり
- ⑤ 学力の向上をめざした学校全体で行う取組の実施（「挑戦状」など）
- ⑥ 子ども主体の行事や活動の推進を通じた達成感・成就感の醸成
- ⑦ 子どもたちが「夢」を育むためのキャリア教育の推進
- ⑧ 地域の医療機関や施設等との交流による豊かな心の醸成
- ⑨ 保護者や地域に対する、子どもたちや学校の情報の積極的な発信
- ⑩ 教職員のスキルアップ、「チーム浦安」の推進
- ⑪ 全面実施となる「新学習指導要領」への適切な対応
- ⑫ 生徒指導や特別支援教育に関する幼小中の連携
- ⑬ P T Aや地域協働学校の取組を通じた保護者、地域と学校との連携
- ⑭ 教職員の負担軽減、働き方改革の推進

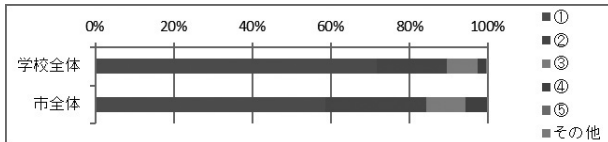
3 児童及び学校の実態

本校で不登校児童が生まれにくい理由を分析するに当たり、岡山市教育委員会が行う「教育に関する総合調査」により、児童の実態を把握することとした。

■令和元年度「教育に関する総合調査」(児童)より

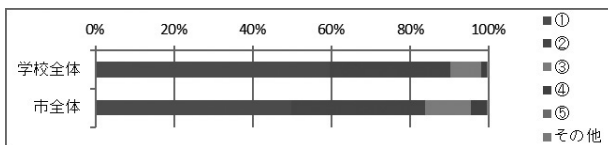
- ①あてはまる ②どちらかというにあてはまる
 ③どちらかというにあてはまらない
 ④あてはまらない ⑤その他

【質問3】私は学校に行くのが楽しい。



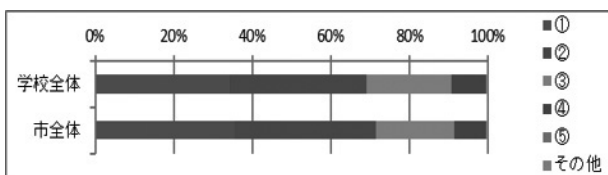
様々な調査にある基本的な質問だが、本校児童のうち、肯定的に回答した割合は89.5%と市の平均(84.2%)を大きく上回った。また、学年差による差は少ないが、上学年はいずれも9割を超えた。

【質問4】学校の授業はわかりやすく楽しい。



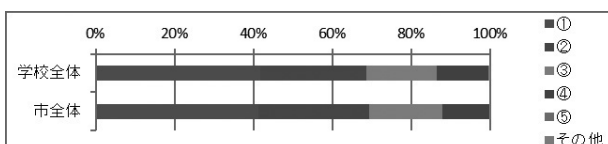
続いて、授業に関する質問でも、肯定的に回答した児童の割合は90.3%と市の平均(83.8%)を大きく上回った。

【質問7】私は、早寝早起きをするなど規則正しい生活をしている。



一方、早寝早起きなどの家庭生活に関する質問では、肯定的に回答した児童の割合が69.0%と市の平均(71.5%)を下回った。

【質問8】私は、テレビを見たり、ゲームやメールをしたりするのが、長時間にならないように気をつけている。



テレビやゲームに関する質問でも、肯定的に回答した児童の割合は68.7%と、市の平均(69.3%)を下回った。

これらの調査結果から、学校生活には充実感を感じている児童が多い反面、家庭での規則正しい生活などについては課題があると考えている児童が多いこともわかった。また、実際の学校の状況から、次のような特徴が本校にあることがわかった。

- 遅刻してくる児童が少ない。
- 授業中の発表や交流・活動が活発。
- 休み時間に外遊びをしている児童が多い。
- 図書館の貸し出し冊数が多い。
- 異学年の交流が盛ん。
- 学区内の医療・福祉施設との交流が活発。
- 学校行事の完成度が高い。
- 転入生が多いが、すぐに馴染む児童がほとんど。

他にもたくさんの特徴はあるが、不登校ゼロに関連がありそうなものとして、上記の特徴を挙げた。

4 分析と仮説

3のような児童や学校の実態から、本校に不登校児童がない原因や背景について、次のように分析し、仮説を立てた。

■分析

(1) 児童に関して

明るく素直で、何事にも前向きな気持ちで取り組むことができる児童が多い。また、友だち同士のつながりが強く、友だちづくりに積極的な児童が多いため、安心して楽しく学校生活を送ることができている。

(2) 学校に関して

教職員が「不登校ゼロ」の素晴らしさを実感し、その継続を学校として目指している。具体的には、家庭連絡や気になる児童への支援、必要に応じたケース会議の開催等に組織的に取り組んでいる。また、学級集団づくりや授業づくりが不登校の未然防止につながっていることを意識し、理論的かつ計画的に取り組んでいる。

(3) 保護者(家庭)・地域に関して

家庭や地域において、大人が子どもたちを温かく見守るとともに、きちんと評価し、そのことを伝えている。その結果、子どもたちが家庭や地域を安心できる居場所と感じるとともに、有用感や自己存在感を感じている。また、保護者と学校がしっかりと連携することで、子どもたちが安心感を得ている。

■仮説

分析結果から、次のような取組を計画的、継続的に実践することが「不登校ゼロ」につながっているのではないかと考えた。

- 子ども同士のつながりを強める取組
- 子どもたちが有用感や自己存在感を感じられる行事や取組
- 子どもたちにとって魅力ある授業づくり
- 学習に向かう意欲を高める工夫
- 大人からの評価や友だち同士の評価
- 全教職員による意識の共有とチーム力の向上
- 家庭、地域と学校との結びつきの強化

5 本校の実践と検証

4の分析と仮説を基に、今年度の教育基本計画に掲げた具体的な取組の実践が本校の「不登校ゼロ」につながっているのかどうか、またどのような点が効果を上げているのかについて検証した。

③ 互いに認め合い、高め合う学級集団づくり



4年生・学級レクリエーション (R2.6.11)

学級集団は、学校生活を送る上で最も大切なまとまりである。お互いのことを知るためのレクリエーションをしたり、誕生日をサプライズで祝ったりする取組を各学級で工夫して行っている。その結果、子どもたちの「所属意識」が高まっている。

④ 主体的・対話的で深い学びをめざした魅力ある授業づくり



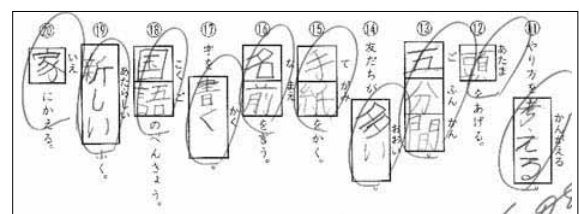
校内研修資料より (R2.6.19)



1年生算数科の授業 (R2.7.3)

本校では昨年度より「自ら学び続ける子どもの育成」をテーマに、算数科の研究に取り組んでいる。今年度は「考え方の共有の仕方」を柱に、子どもたちが「考えたい」「話し合いたい」「わかった」を実感できる授業づくりを目指して研究を進めている。研究を基に、教師がしっかりと教材研究した上で授業に臨むことで、児童の学習に対する意欲が伸びてきている。

⑤ 学力の向上をめざした学校全体で行う取組の実施 (「校長先生からの挑戦状」など)



2年生の「挑戦状」解答用紙 (R2.7.8)

漢字テストなども、やり方を工夫することで児童のモチベーション向上につながる。「校長先生からの挑戦状」という形にし、賞状を出すことで、自主的に家庭学習に取り組んだ児童が増えた。

⑥ 子ども主体の行事や活動の推進を通じた達成感・成就感の醸成



1学期終業式 (TV放送) (R2.7.31)

今年度は、新型コロナウイルスの関係で全校児童による集会や行事は実施できていないが、本校では常に子どもたちが主体となる行事や活動となるよう、計画段階から取り組んでいる。多くの児童が達成感や成就感を味わったり、他児ががんばっている姿を見たりすることにより、自己肯定感が高まっている。

⑦ 子どもたちが「夢」を育むためのキャリア教育の推進

⑪ 全面実施となる「新学習指導要領」への適切な対応



6年生のキャリア教育の授業（R2.7.7）

今年度全面実施となった新学習指導要領に「キャリア教育」が明確に位置付けられたが、本校では児童が社会で働く方々「=本物」に触れる機会を設けている。今年度も国の機関や自動車メーカー、美容室に勤務する方々を迎えた授業を行い、子どもたちが将来のことや、勉強する意義を考える貴重な時間となった。

⑩ 教職員のスキルアップ、「チーム浦安」の推進



担任と職員室の連絡風景（朝）

「不登校ゼロ」は、担任や学年だけでできることではない。本校では毎朝、登校していない児童を担任が職員室へ連絡し、職員室で受けた教職員が家庭へ連絡するという取組を行っている。毎朝確認することによって、児童の安否確認や保護者の考え、家庭の様子がわかり、不登校の未然防止につながっている。

⑬ P T A や地域協働学校の取組を通じた保護者、地域と学校との連携



あいさつ運動（R2.7.10）

毎週水曜日は地域の方、毎月10日と20日は中学生が校門に来てくださり、児童会の児童とともに朝のあいさつ運動を行っている。元気よく声を出してあいさつを交わすことで、気持ち良く朝の学校がスタートできている。

6 今後の取組

5で紹介した実践は、全てが直接的に「不登校ゼロ」につながる取組ではないが、結果的に本校が「不登校ゼロ」となっている事実から、何らかの効果があつた、または期待できると考えられる。

そのことをふまえて、今後は現在の取組を引き続き実践するとともに、内容を深化・発展させたり、整理したり、新たに必要な取組を加えたりしていくことで、持続可能な取組にしていかなければならない。

現時点では、特に次の取組を重点化していきたいと考えている。

- 子ども主体の行事や取組（コロナ禍の中でも）
- キャリア教育の多様化
- 機を捉えた子どもに響く評価
- 教職員の指導力と支援体制の強化
- 保護者と学校との信頼関係の再構築

7 おわりに

令和2（2020）年度は残念ながら、新型コロナウイルス感染症の拡大とその対応に追われる年度となった。特に、1学期の臨時休業が児童に与える影響は大きなものであったが、幸い本校ではその後、不登校となった児童は現れなかった。

不登校の改善は容易ではない。学校や市全体でもそうだが、一人の不登校児童を登校に結びつけることも困難な場合が多い。また、小学校で不登校となり、そのまま義務教育期間を不登校で終えるというケースも少なくない。

そのような児童を一人でも少なくするために、本校の「不登校ゼロ」の分析と検証、そして仮説と実践のPDCAを繰り返し行うことで、持続可能な「不登校ゼロ」の学校づくりを目指したい。

【参考資料】

- ・平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
- ・令和元年度教育に関する総合調査



パンデミックの中，OECDが推進する 「エージェンシー」育成を目指すICT活用の開発

—コロナ禍で実践する「異力（普通科・情報科・体育科）の統合」を目指して— 岡山県立玉野光南高等学校 校長 三澤 宏之

1 はじめに

本校は、昭和59年に「普通科・情報電子科・情報処理科・体育科」からなる学科総合型の新しいタイプの高等学校として設置された。平成15年の改編で「情報科」が新設され現在の三つの学科となり、それぞれの独自性を発揮し、調和した魅力ある高等学校として発展してきた。4月1日赴任早々の職員会議では、今年度重点目標に、この「三学科」の強みを再構築すべく「異力（普・情・体）の統合」を掲げたが、パンデミック・新型コロナウイルス感染症への対応として、年度が始まって間もなく再びの臨時休業に入り、在宅の生徒への授業配信や生活の指導という対応を迫られ、生徒も教員も例年とは違う年度初めを経験した。本校では4月の早い時期に対応を協議、休業期間中も生徒の学びを止めないように、ICTのエキスパートである教員を中心に指導体制を構築した。現在、「Agency・エージェンシー」という言葉がよく使われている。「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」という意味の言葉で、OECDが推進するEducation2030でもラーニングフレームの鍵とされている。パンデミックによる学校休業中に何よりも求められるのが「主体性・自主性」である。本校ならではの「三学科」の強みを生かした遠隔授業・オンライン指導の充実が、生徒のエージェンシー育成に大きな効果をもたらすとこの思いから、コロナ禍における生徒の変容に繋がる研究開発を行った。

2 研究目的・目標

まずは充実したICT活用の推進である。いかに生徒の自主性育成につながる遠隔授業を実施できるかを主要な目的に研究を進めた。もちろん4月20日からの臨時休業中に実践する内容に多くの時間を要したが、6月1日からの学校再開後も「新しい生活様式」の中で、臨時休業中に各学校において推進したICTの活用を、学校が再開されたことによって終わらせるのではなく、COVID-19第2波・第3波の到来に備え、引き続き日々の学校生活や授業の中で大いに活用するようという意識をもって取り組んだ。さらに、内容の良い遠隔授業・

オンライン指導は、まず生徒がその1時間を真摯に取り組むことになるし、「もっと学びたい」と思えば、授業の後、自主的に参考書を開き、探究し、課題にも積極的に臨むようになる。つまり、オンライン1時間の学びが2倍にも3倍にもなる。本校オリジナル「異力を統合し、強みを結集した」遠隔授業ならそれができると信じ、「エージェンシー」の育成につながるオンライン指導を目標とし、研究を実施した。

3 研究の概要

4月期～県内の先進校と違い、Google Chromebookの導入は年度始めの時点ではまだ実現されておらず、まずはZoomとYouTubeを駆使し、できることからやってみる形で遠隔授業を始めた。情報管理室を中心に指導体制を構築し、休業期間中も生徒の学びを止めないように、ICTを活用したオンライン遠隔授業の充実に努めた。研修会も複数回実施し、ごく自然に、チームで授業を創造する形ができあがっていった。4月になってすぐに校長として公立・私立を問わず先進校を視察に行ったが、時にひとりぼっちで広い教室の片隅でパソコン画面に向かって授業をしている先生の姿が気になった。遠隔授業を生徒に届ける際に必ず「授業者」「ホスト役」と複数の教員で実施するチーム制を設けたのは「光南オリジナル」である。双方向の遠隔授業や課題の送付・回収、授業内容の質問・回答、オンラインSHRなど行い、本校の先進的な取組は県内でも注目され、多くの学校・団体が視察に訪れ、新聞やテレビでも広く報道されることとなった。



写真1 【オンライン授業・OHK岡山放送HPより】



写真2 【Zoomによる校内授業研修会・本校HPより】

ここでのポイントは「オンライン1時間の授業が、1日の残りの時間にどう影響するかを考える」ということである。つまり、形式だけの遠隔授業を「受けさせる」のではなく、内容の充実、いかにエージェンシーを発揮させるかということであった。生徒は大半の時間を家庭で過ごす。朝のオンラインSHRに顔を出し、1時間目、2時間目と時間割に合わせてZoomで授業に参加する。もし授業に参加したということ、それだけに満足し、その後何もせずにダラダラと過ごすならば学力は一気に下がってしまう。これでは本末転倒である。内容の良い遠隔授業は、まずその1時間生徒は真剣に授業と向き合う。さらに教師の「もっと学びたい」と思わせる仕掛けで、どんどん探究し、課題にも積極的に臨む。オンライン1時間の学びが何倍の学びにもなるのである。



写真3 【ZoomによるオンラインSHR・本校HPより】

6月期～本校でもGoogle ClassroomやMeetが使用できる環境が整った。これは県教育庁のご尽力によるもので、ZoomとYouTubeを組み合わせて、「今週はオンライン授業実施準備期間」、「来週は実践期間」と指示を出しながら、第2波に備える形で「学校再開でICTの活用を終わらせない」を合い言葉に研究を継続した。

最初は手探りで始めたオンライン授業であった

が、やがて得意な人を中心にグループで取り組むようになり、ごく自然に教科や学年を越え大きな広がりにつながった。「誰ひとり取り残さない」を合言葉にChromebook研修会も複数回実施され、ICTが苦手な先生方もどんどん進化し、どうすれば生徒がオンラインの画面を飛び越えて授業に前のめりになるか、「エージェンシー」の大切さを実感し、随所に工夫が見えてきた。

8月期～独自の企業努力で暫定的に使用できる30台近くのChromebookを入手した。お盆前は、「オンライン遠隔授業準備期間」、短い夏休み後は「チャレンジ8月期」と銘打って、次なる「パンデミック・波」に対する取組を継続した。またこの時期にGIGAスクール構想に対応したChromebook導入準備委員会を立ち上げた、委員会の愛称は「テラ☆光南」。GIGAスクール構想のGIGAは「Global and Innovation Gateway for All」であると理解しながら、言葉の響きで「ギガ」の上を行こうというユニークな発想である。

この組織では機種選定、業者対応、ガイドライン・ルール作成、広報、コンテンツ選定などを行うとともに、「光南授業のスタンダード・オンライン版」作成など授業改善に生かした取組も推進する。

4 成果と課題

(1) 成果

普通科の教員は、遠隔授業のクオリティを高めるため内容充実に東奔西走した。MeetやZoomの授業も双方向になるように心懸けGoogle Classroom、YouTubeによる動画配信では、生徒の理解しにくいポイントを事前に探り、何回も何回も生徒が繰り返し視聴したくなるような授業作りに工夫が見えた。また、配信の時間帯についても生徒の生活状況を配慮し、部活動が終わり、帰宅する時間に合わせて配信を開始、時間内に視聴しないと動画配信を停止することにより、生徒の生活リズム、三点固定にも一役買った。県教育庁高校教育課と情報共有を行い、「非対面の授業では、できるだけ対面の授業のように配信する」とのヒントをいただき、本校でも実践した。例えば、「実験の授業」では、できるだけ器具を扱う「手元」を細部まで映し、配信した。また黒板の板書の力強い筆圧がダイレクトに伝わるように、音も漏らさないように配信した。これらはリアルな「現実世界・現実授業」が少しでも生き生きと伝わるようにという工夫である。

体育科の教員は、実習にあたる「体育」の授業を遠隔でどのように行うかに苦慮した。しかし、様々な工夫の中で、動画配信により生徒の関心・意欲が著しく向上することがわかり、例えばダンスの授業ではアップした動画を生徒が繰り返し繰り返し再生し、さらには自分たちで考え、再構築した踊り方を提案するなど、授業に対する積極的な姿勢が見えた。また、卒業前の学習発表会である「アクティブアカデミック光南」が初めて開催されるにあたり「何か形のあるものを残したい」と自分たちで考えた体操「光南体操」、これは体育の授業のウォーミングアップに使われているが、この学校休業中に体育科の教員8人が360°VRカメラの周りでキレの良い体操を披露するなど、情報科とタイアップした取組にも挑戦している。



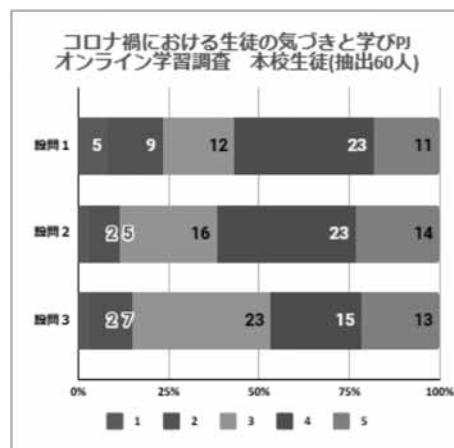
写真4 【コウナン ミライの授業・本校HPより】

情報科の教員は、学校全体でICT活用がスムーズに進むよう専門的見地からのアドバイスをしながら、各研修会を主催するなど、昨年度末から精力的に取り組んでいる。前述した遠隔授業を生徒に届ける際の「授業者」「ホスト役」のチーム制でも、ホスト役を買って出ることが多く、経験が少なく今ひとつ自信のない教員も「オンライン中に何かあっても助けてくれる」という安心感をもってチャレンジすることができた。もちろん自分たちの専門科目「情報」関連の授業では、生徒同士の意見交換をオンライン上で実現するなど、対面授業と何ら変わりのない「主体的・対話的な、深い学び」を実践してくれた。

このように異力の統合、ベクトルを合わせることで三科の強みがより強固なものとなりICT活用がどんどんと進んでいった。

6月1日の学校再開後、約3ヶ月が経過したが、学び舎には生徒の笑顔と元気な声が響き渡り、先生方のこれもまた満面の笑顔と熱心な指導の声が溢れている。

生徒の学びの姿勢を分析しようと、ベネッセ教育総合研究所から紹介いただいた「コロナ禍における生徒の気づきと学びを最大化するプロジェクト」事務局主催「オンライン学習調査」アンケートに参加した。「オンライン学習でも（設問1）教室と同じように勉強できている（設問2）目標を設定して地道に達成している（設問3）先のことを考えて計画的に行動している」などの質問項目に本校の多くの生徒が「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と肯定的な回答をしている。その数値は5点満点中（設問1）が全国平均3.28のところ本校平均値は3.43、（設問2）が全国平均3.63のところ本校平均値は3.7、（設問3）が全国平均3.43のところ本校平均値は3.5であった。この結果から、本校の生徒にとって学校休業中の学びは肯定的に受け取られていることがわかった。また、生徒は学ぶことの価値に改めて気づいたようで、「以前より授業への集中力が増している」「課題にも丁寧に取り組むようになった」などの報告も受けている。



- 設問1 オンライン学習でも教室と同じように勉強できている
 - 設問2 オンライン学習でも目標を設定して地道に達成している
 - 設問3 オンライン学習でも先のことを考えて計画的に行動している
- 5 非常にあてはまる 4 ややあてはまる
 3 どちらともいえない 2 あまりあてはまらない
 1 全くあてはまらない

学校再開後間もなく、岡山大学副理事の狩野光伸先生を講師にお迎えしSDGs課題の講演会を実施した。講演後、希望者参加座談会に該当学年ではない他学年の生徒が参加、学びの機会を逃さない姿勢、積極性を発揮してくれた。また講演に参加したSDGs学習会メンバーが、自分たちの学びを子供たちにも分かりやすく伝えたいとSDGsの絵本を作成し、地元八浜小学校、大崎小学校に届け、未来ある小学生のみなさんに、SDGsを伝える取組・小高連携を自主的に行った。

他にも、サッカー部の生徒はインターハイや県総体が中止になる中、オンラインで県王座を争う「eスポーツ」サッカー大会を企画、「高校最後の夏に同年代の仲間と形になるものを残したかった」と県内32校が参加する大会の運営を生徒だけで立派にやり遂げた。

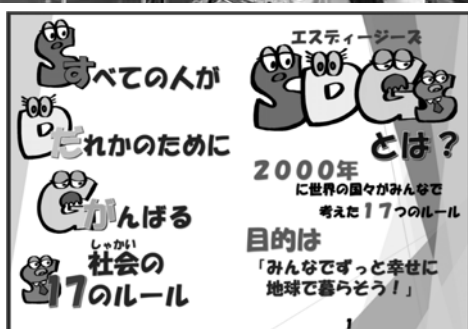


写真5【SDGs学習冊子作成・高校教育課FBより】



写真6【eスポーツで“県総体”山陽新聞デジタルより】

休業期間中にオンライン授業を届ける中、生徒は、少しずつエージェンシーを身につけていった。これは10年後の未来を見据えた、「これからの社会で求められる資質・能力」である。「自走する生徒」とそれを支え「伴走する存在」。教員はパンデミックの中でいかにエージェンシーを発揮させるか、コロナ禍でエージェンシーの大切さが腑に落ちた瞬間であった。

これらは自走し始めた生徒のほんの一例であるが、どちらも新聞やテレビ放送、県教育庁高校教育課フェイスブック等で大きく取り上げていただいた。

(2) 課題

6月の県立学校の再開に当たって、まだまだ解決すべきICT活用の課題は山積したまま現在に至っている。まず大前提としてGoogle Classroomなどアプリケーションソフトの活用を全速力で実施し、児童生徒とつながる効果的な取組を、全教員が確実に行わなければならない。そのためには、研修を繰り返し、違和感なくICT機器の操作ができる熟達が必要である。本校では若手・ベテランを組み合わせたグルーピングによりスピード

感をもち、計画的に実施している。その際本校ならではの三科の融合、異力の統合という視点でエージェンシー育成を更に進める必要がある。

5 おわりに

生徒がエージェンシーを発揮するには教員や仲間、家族、コミュニティなどの双方向的で互恵的なCo-agency・共同エージェンシーによる支えが必要である。今後も学習や部活動において「自分で考え、責任をもってどのように行動を起こすのか」「その行動は、自己改革・社会変革に繋がっているのか」「そのイノベーションが将来の『夢』と連動しているのか」と生徒に問いかけながら、本校の教育活動を更に進めていきたい。

学校再開に当たって、県教育庁、鍵本芳明教育長から教職員にメッセージが届いた。臨時休業中各学校において推進したICTの活用を、学校が再開されたことによって終わらせるのではなく、COVID-19第2波の到来に備え、引き続き日々の学校生活や授業の中で大いに活用するようという内容であった。「新しい生活様式」の中でICTの活用を進め「生活の中に定着させるように」との想いが強く伝わった。本校もエージェンシーの育成と共に、生徒の進学や進級を保障するため獲得したICT活用技術を更に進化させ、新しいフェーズやステージに合わせた持続可能な取組として展開していきたい。

<参考文献>

- ・アンドレアス・シュライヒャー他、「教育のワールドクラス：21世紀の学校システムをつくる」、明石書店、2019
- ・コロナ禍における生徒の気づきと学びを最大化するプロジェクト、「オンライン学習調査結果」、ベネッセ教育総合研究所他、2020



コロナ禍に負けない自主学習力を育む学び方改革

—自主学習を核として主体的に学びを進める子どもの育成をめざして—

岡山市立岡山中央小学校 指導教諭 金田典子

1 研究の目的と仮説

令和元年度全国学力学習状況調査の質問紙において、本校の6年生は、「家で自分で計画を立てて勉強している」の項目は、全国平均と比べると下回っているという結果であった。与えられた課題はやり遂げるが、指示がないと自主学習に取り組めない児童が多く、自分の興味・関心、やりたいことを探究する力や自分でPDCAサイクルを回す力が弱いという児童の実態があった。この実態を受け、学校として自主学習を強化するための改善に取り組むことになった。

正解のない時代を生き抜くためには、主体的に判断して学習を進めたり、課題に向かって試行錯誤を繰り返しながら粘り強く解決したり、自己の目標を実現しようとしたりする資質・能力の育成が求められている。その力の一端を、自主学習を充実させることにおいて担えるのではないかと考えた。そこで、児童の自主学習の力の育成のための方略を明らかにすることを研究目的とし、以下の4つの仮説に基づき、研究に取り組んだ。

※以下、自主学習によって育成できる能力を自主学習力という。

2 PDCAサイクルを生かした自主学習の仕組づくり

【仮説1】

PDCAサイクルを生かした自主学習の仕組をつくることで、自主学習力を身に付けられるのではない。

(1) マイスタウィークの設定

児童が主体的に取り組む、かつ満足度の高い自主学習にしていくために、「マイスタウィーク（自主学習強化週間）」を設定した（R元年9月・11月）。「マイスタウィーク」とは、自主学習を場当たりのやるのではなく、なりたい自分に近づくために、先を見据えながらどんなことができるようになりたいか短期目標を立て、学習内容を事前に計画し、自身の変容や成長を自己評価しながら行う強化週間である。マイスタ

ウィークに向けての仕組づくりの一環として、以下(2)、(3)、(4)に取り組んだ。

(2) PDCAがんばりカードの活用

1週間のマイスタウィークは、がんばりカード（B4二つ折り）をもとに進めることにした。裏表紙には、学習のめあてや学習内容の計画、取組の記録を書き込むことができるようにし、がんばりの跡を振り返ることができるようにした。

Plan（目標と計画）

・「マイスタウィーク」のねらいを知り、1週間がんばりたいことを決め、習い事や用事などの予定から何をどれくらい取り組めそうか、自主学習のコースや内容を考える。

Do（取り組む）

・予定に沿って取り組む。

Check（振り返る）・Action（改善）

- ・できたかどうかを振り返る欄に「◎…計画通りできた」「〇…計画を修正したができた」「△…できなかった」のマークを記入する。できなかった場合は、いつやるのかも併せて書き込む。
- ・一週間の振り返りをし、達成度ややってみた感想を書く欄や、保護者の方から励ましやアドバイスの一言プレゼントをいただく欄も設けた。

マイスタ
Cha-Cha-Cha ウィーク

めあて をがんばります。

◎ 今日、計画通りマイスタができて、集中して最後までできた。
 ○ 今日、予定を変更したが、乗り進むことができた。
 △ 今日、できなかった。（できなかったときは、いつするか再計画する。）

日	予定	コース（マイスタの内容）				振り返り
		マイスタA	マイスタスーパーA	マイスタB	マイスタC	
例 25(月)	スイミング	国語			社・年号調べ	△ できなかったから明日やる？
24(火)						
25(水)						
26(木)						
27(金)						
28(土)						
29(日)						
30(月)						

1週間を振り返って
保護者の方から

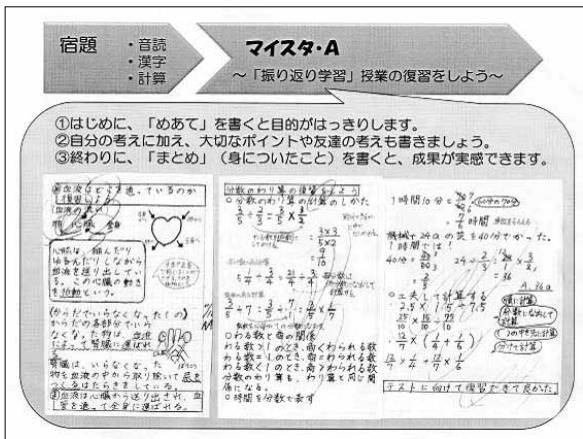
【図1】学習の記録をすることができる裏表紙

(3) 学習材の再構成

旧来の家庭学習の手引きに示しているメニューには、様々な教科や内容が混在していた。そこで、例示してあったメニューを「授業の復習系」、「授業の発展系」、「探求的学習系」、「基礎学力の定着系」という4コースに整理し、児童がその中から取り組む内容を選択できるようにした。4つのコース分けは単なる学習材の仕分けではなく、学び方の分類になるように工夫した。

(4) 学び方の提示

P D C A がんばりカードの内側には、上記学習材と学び方が示しており、児童は確認しながら自主学習を進めることができるようにした。



【図2】学習の進め方とノートまとめ方の例示

3 発展的学習の課題の工夫による自主学習力の高まり

【仮説2】

授業とつながりのある課題を自主学習で取り組むことができるように発展的学習の課題を工夫すれば、自主学習力を高められるのではないかな。

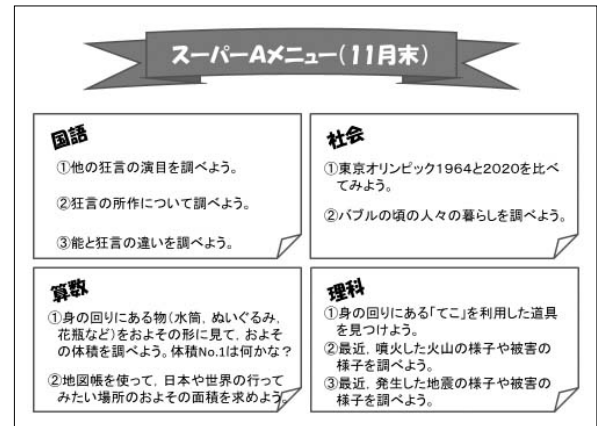
授業とつながりのある課題を自主学習で取り組めるようにするには、「授業で学習して、自分の身近なものにも活用できるか調べたい。」「授業では深く学習していないが、興味をもったのでもっと調べてみたい。」といった内容であることが望ましい。そこで、授業での学びを生かすことができる発展的学習メニューを学年団で考えた。

また、メニューを示しただけでは自主学習に取り上げられにくいので、教師がこれらのメニューを把握した上で授業に臨み、次のように発問を工夫して、自主学習へと学びがつながるように促した。

- ・「他にも“てこ”を利用した便利な物が身の回りにはあるよ。探してみよう。」(理科・てこのはたらき)
- ・「1964年の東京オリンピックは、国際社会の中でも

大切な意味があったね。2020年ではどうだろう？」

(社会・新しい日本、平和な日本へ)



【図3】授業の発展的学習メニュー

4 保護者との連携・協働による自主学習力の定着

【仮説3】

保護者との連携・協働が進めば、自主学習力が定着するのではないかな。

児童への説明に加えて、保護者向けガイダンスとして、学級担任が学級懇談の時間を活用して取組の説明を行った。児童によっては、自分の伸ばすべき力を客観的につかむことが難しい場合もあるため、適切な計画ができるような助言をお願いしたり、毎日の励ましや1週間を通したがんばりに対するコメントの記入について協力の依頼をしたりするなど、連携を図った。

5 コロナ禍のもとでの自主学習力の育成

【仮説4】

家庭でドリル学習等に取り組むよりも魅力的な発展的学習に取り組むようにした方が自主学習力を身に付けられるのではないかな。

(1) ステイホーム応援プロジェクトの発信

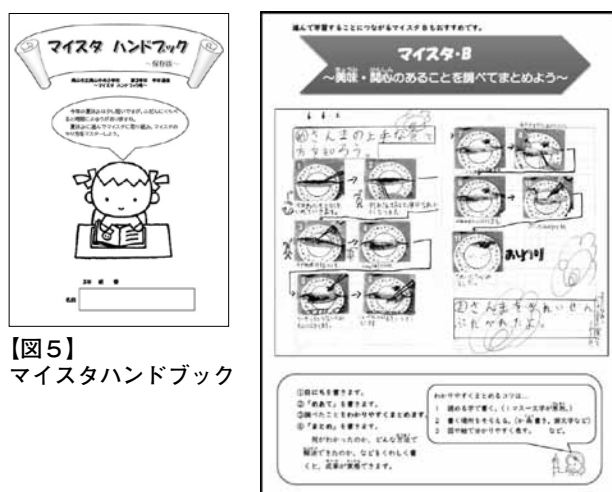


【図4】ステイホーム応援プロジェクト便り

緊急事態宣言発令から臨時休校になることを受けて、「ステイホーム応援プロジェクト」を作成し、全校に配付した。家庭で学習することが増えたこの機会が、与えられたプリントやドリル学習だけをするのではなく、自分で考え行動する貴重な時間が増えたとプラスに捉え、自分の得意なことに挑戦して力を伸ばしたり、学校で学んだことをさらに深めたりするなど、有意義な時間にするためのお助けメニューとして提示した。

(2) マイスタハンドブックの作成

自主学習（マイスタ）初級の3年生は、1学期の取り組み方を確認すると共に、夏休みの自主学習を家庭任せにすることのないように、学習の仕方とノートのまとめ方を示した小冊子を配付した。



【図5】
マイスタハンドブック

6 成果

(1) PDCAサイクルを生かした自主学習の仕組の構築

①マイスタウィークでの主体性・計画性の向上

事後アンケートの「マイスタウィークで良かったことは何ですか」の質問項目の結果は以下の通りである。学び方ごとに、学習材や学習の仕方とノート例を整理して可視化した効果が、「学び方の習得」「学習内容の選択」の側面に、児童の実感として反映されていると考える。

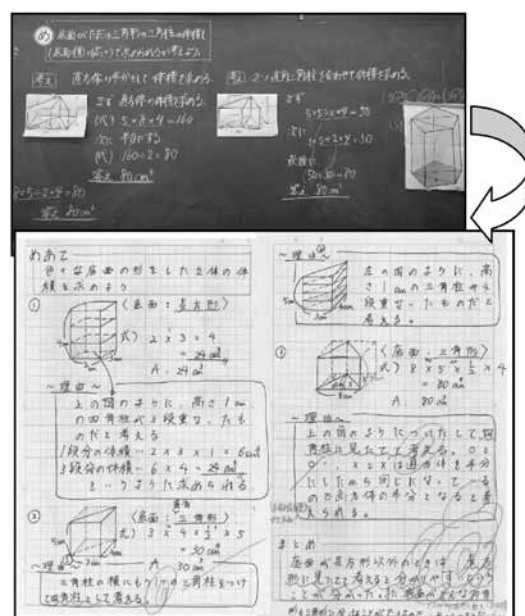
マイスタウィークで良かったこと (複数回答)		6年5クラス・150人 単位 (%)	
側面	質問項目	1回目	2回目
学習内容の定着	苦手な内容に取り組んで克服できた	25.3	25.3
学び方の習得	いろいろなコースのやり方が分かった	52.6	38
学習内容の選択	メニューがあって取り組みやすかった	45	38.6
学習意欲の向上	自分から進んで取り組めた	36	38
時間管理力の向上	時間を有効に使えた	14	11.3

また、自由記述欄には、「様々なマイスタに取り組むことができた。これからは計画を立ててマイスタをしたい。」「計画していた学習が早く終わったので、もう一つ追加でやってみた。」などの記述も見られ、思いつきで自主学習をするのではなく、進んで取り組むことができたようである。主体的に学習する力、計画的に学習する力が高まっていることがうかがえた。

②授業改善とマイスタノートの質の向上

児童が授業の復習に取り組む場合は、必然的に授業ノートを見直しながらかうことになる。児童は何を学んだのか、どのように学んだのかを振り返りながらマイスタノートにまとめ直すことで、学習内容も定着しやすくなっていった。

それと同時に、教師側も授業ノートを充実させるため、学びの道筋が分かるように板書の構成を考えて授業に臨むようになり、授業改善の一端が見られた。

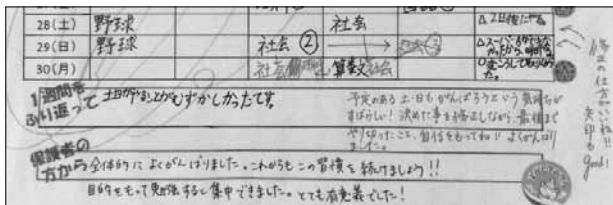


【図6】板書をもとにしたマイスタノート

③PDCAがんばりカードの成果

教師は、毎朝提出されるマイスタノートとPDCAがんばりカードにモチベーションを上げる励ましや取組を認める称揚のコメントを書き添え、キャリア・カウンセリングの視点で児童と対話しながら自主学習を支えた。計画したことを順調に達成し、手応えを感じていることが分かるカードには一言コメントを書き加え、できていることを実感できるように励ました。そのことにより、計画通りできなかったときには、予定表に矢印で修正を書き込み、自己調整的に取り組もうとしている様子が伝わってきた。児童自身がPDCAサイクルを回すことができたことが成果である。

保護者から、「今までは、アドバイスに困っていたが、メニューから助言の視点が分かり、『〇〇してみたら?』と提案すると喜んで取り組んでいた。」との感想をいただいた。自主学習のねらいやその解決の仕方等を可視化して発信したことで、家庭では児童の主体性を大切に声かけにより、自主学習力を成長させようとする保護者の意識の変容があったと考えている。



【図7】修正した計画を書き込んでいるがんばりカード

(2) 発展的学習に取り組む児童の増加

同学年教員からは、授業の発展的学習の課題を考える際、「普段の教材研究に比べ、『理科のひろば』にも目を通し、より視野を広げた教材研究になった。」という声を聞くことができた。また、「自分の生活に生かす」「他でも一般化して考える」という内容は、単元の出口にあたる内容と絡むことが多いので、「ぶつ切れの教材研究ではなく、単元を通した大きなまとまりでの教材研究を行った。」と、単元で付けたい力や学習の道筋を明確にもった上で授業が行われたことが分かった。授業とつながりのある課題をマイスターで取り組めるように発展的学習のメニューを吟味したことで、児童が「授業で勉強してみて、自分の身近な事にも活用できるかどうか調べたい。」と進んで解決しようとしていた姿から、粘り強く、発展的に学習する意欲が向上したことが評価できる。発展的学習のメニューを吟味すること自体が教材研究となるだけでなく、児童の主体的に学ぶ態度を強化することにつながったと考える。

(3) 保護者との連携・協働による自主学習の推進

図8は、本校PTA広報部が令和元年度2学期末に発行したPTA新聞である。自主学習に取り組む働きかけを学校が組織的に行っていることから、マイスターが特集されることとなった。PTAから自主学習のねらいや具体的な取組の方法を整理して発信されたことで、このPTA新聞が学校と家庭をつなぐ架け橋となり、家庭での支援のあり方や他学年や友達の取組を共有でき、保護者の方は改めて本校の自主学習の方針を再確認した上で、自主学習力の定着に向けて力を貸して下さっていると考えている。

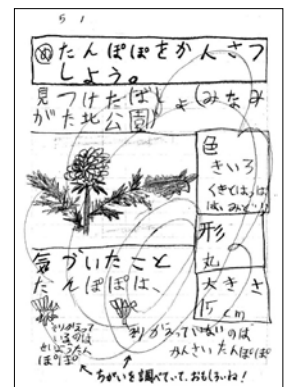


【図8】PTA新聞「学校日和」

(4) コロナ禍のもとでの自主学習力の発揮

本校では、発展的学習は高学年から位置付けているが、「ステイホーム応援プロジェクト」では、中学年の発展的学習の課題も紹介した。そのことにより、3年生の中には、理科で学んだ観察するときの視点を身の回りの植物にも生かして観察し、マイスターノートにまとめていた児童がいた。始まったばかりの理科の学習に意欲的に取り組み、発展的な学習にも無理なく取り組めたことが分かった。

また、夏休み前に配付したハンドブックにより、児童は様々なコースを選んで自主学習に取り組んでいた。普段は漢字練習をすることが多かった児童が、地図記号調べに取り組み、振り返りに「地図記号をもっと調べたら、好きになった。」と書いており、進んで調べたことで、より意欲が高まった様子が伝わってきた。あまり取り組んだことのなかったコースにも挑戦したことで、学び方にも広がりが見られた。



【図9】休校中のマイスターノート

7 課題

P D C A サイクルを生かした自主学習の仕組は構築できつつある。仕組だけの共通理解にとどまることなく、自主学習力を育てる意義や目的、自主学習によって児童が成長したという成果の共有を校内で図ることで、学校・教師の果たす役割がさらに明確になり、この取組が普及し、定着し、そして継続していくものと考えている。今後も、自主学習の仕組の見直しを継続的にを行い、校内の体制づくりに取り組んでいきたい。



みんな分かる・みんなできる【かがやき学級】を目指して

—学びに前向きに取り組む学級集団づくりについての—考察—

真庭市立米来小学校 教諭 森岡 浩美

1 はじめに

(1) 現状把握

「指導が非常に困難な学級なのだが、担任をしてもらえないだろうか。」校長を定年退職直後、再任用教諭として赴任することが決まった米来小学校長からかけられた言葉である。1年生の頃から、落ち着いて学習することができず、担任が苦勞していたようだ。2年生の時は、市教育委員会、津山教育事務所、県教育庁義務教育課生徒指導推進室に指導を仰ぎ、7月から教育支援員を配置してもらっていた。私は学級担任から8年間離れていたが、子どもに教える仕事をしたくて再任用教諭に応募したのであるから、断る理由はない。「頑張ります。」と答えて学校を後にした。

学年始早々、前担任から引き継ぎの機会を得た。新3年生17名一人一人について詳しく説明してもらい、多くの情報を得た。様々な要因により、たくさんの課題があることを知ったのだが、とりわけ、決まりを守るという自律心が育っていないのが1番の課題であると感じた。一方、個々のよさもしっかり聞くことができたので、一人一人がそれぞれのよさを発揮して、学級集団として前向きに取り組むことができるような学級にしようと心に決めた。

(2) 児童との出会い《学級開き》

○学級開きのプログラム

- ① あいさつ
- ② 自己紹介…担任の後にはくじ引きの順番に、好きなこと等を2つ話す。本日発行する学級通信第1号に掲載することを予告してから始めた。話し終わった後、前担任から聞いたその子のよいところを2つずつ紹介した。
- ③ 仲間づくりゲーム「もうじゅうがりに行こうよ」
- ④ 学級目標についての話合い
- ⑤ お祝いのくす玉割り…手作りのくす玉（教諭時代から20年来使用している）の中には「はげまし合って伸びていこう」の垂れ幕
- ⑥ 歌「友だち」…音楽科の教科書の最初の歌
- ⑦ 詩の朗読「教室はまちがうところだ」…手書きし

たものを掲示して、声を合わせて読む。

⑧ あいさつ

○学級目標の設定

学級目標は【かがやき学級】と決めていた。まず、色紙に貼ったダイヤモンドの絵を見せる。「ダイヤモンドだ。」「知っているけど見たことない。」等と口々に反応する。「宝石のダイヤモンドはとっても高価だよ。見たことない、持っていないと言うけど、みんなの中には、キラキラのダイヤモンドの原石があるんだよ。みんな一人一人がダイヤモンドを持っているんだよ。」と返す。一人一人のすばらしいよさは、互いに磨き合わなければ美しく輝かない。輝く子になるために、次の4つのことを学級のめ

かんがえる子
がんばる子
やさしい子
きまり正しい子

あてにして頑張ろうと話した。
4つのスローガンは、それぞれを垂れ幕に書き、児童の意欲を喚起するよう演出を工夫した。

○教科書や配付物の準備

始業式当日は配付物が多い。過不足なくきちんと配付するため、一人分をセットにして廊下に準備した。学級通信は、あらかじめ用意したものに自己紹介の内容を大急ぎで追加し、すぐに綴じられるようにして手渡した。第1号に自分のことが書いてあるのをうれしそうに読む子どもたち。通信用のファイルを渡し、「このファイルにみんなの【かがやき】を一杯綴じていこうね。」と話した。

一生懸命話を聴いている子どもたちのキラキラした瞳を見て「この子たちは賢くなりたい、いい子だと認めてもらいたいと思っている。認め、励まして、よさを伸ばすことに専念しよう。」と一層強く思った。

学級開きには、校長と指導教諭も立ち会った。「おもちゃのミニマイクを持って自己紹介をする姿がとてもかわかった。」と、ほっとしたように言われた。

2 取組の概要

(1) 目的

みんな分かる・みんなできる【かがやき学級】になるためには、一人一人が、**か**んがえる子・**が**んばる子・**や**さしい子・**き**まり正しい子になること、そして、学級全体が学びに前向きに取り組む集団になることが求められる。そこで、教科指導と教科外指導について、仮説を立てて具体的な手立てを講じ、実践した。

(2) 仮説

教科指導：

学習規律を守ることを意識させ、板書内容をノートに丁寧に書いて学習に生かすことができるようになれば、児童は落ち着き、学習意欲と基礎的な学力を向上させるのではないか。

教科外指導：

協働してできたことを学級の宝として掲示したり、学級通信で一人一人のよさを紹介したり、連絡帳で毎日対話したりすれば、児童は自己有用感を高め、よりよい学級にしようと前向きに取り組むのではないか。

(3) 実践の具体

① 教科指導

ア 基本的な学習規律の指導ポイント

- ・毎時間評価し、身に付くまで繰り返し指導する。
- ・できるまで待つ。待った時間だけ、休憩時間が減ることを伝えておく。時には「めあてを書きます。」と言って、ざわついていても始めることもある。
- ・注意は最小限にとどめ、できている児童の行動をすかさず具体的に認めてほめる。
- ・話合いの仕方については、感染症予防対策のこともあり、実態に応じて指導する。根拠を基に述べるという習慣を付けさせることを重視する。話合いなのだから、その内容についてコメントできなければならないことを認識させる。
- ・教師の立ち位置を意識的に変え、対話の対象が教師ではなく友達なのだを認識させる。

イ ノート指導

前任校では、板書型指導案を核に据えた校内研究で授業改革を実践した。そのノウハウを生かして、次のように取り組んだ。

児童と同じノートに、算数科は毎時間見開き2ページ、国語科と社会科は1ページにノート指導案を書く。

ワークシートや資料を使うときは、後でノートに貼れるようにスペースを確保する。

「先生と同じようにノートに書こう。」と言って始めたが、教師と同じように書くのは難しく、「何まず空けるのですか。」「何行目から書くのですか。」等と書き方についての発言がやたらと多い。そこで、T2にノート指導案を渡し、T2が児童と同じノートに板書を視写していく。その様子を、拡大提示装置を用いてスクリーンに映し出す。これにより、児童はノートの書き方をすぐ確認できるし、教師もノート指導で立ち止まることなく、スムーズに授業を展開することができた。

教師の記述と少しでも違うと「間違えた。」と言って慌てて消す児童がいたため、「先生の板書は見本。自分らしさが表れているオリジナルな記述の方がよい。」と主体性を評価した。自分の考えを持つ時間は3分間とし、その間に机間指導で全員を観察する。児童の考えは、原則否定しない。考えの途中まででも書いたことを大いに評価し、自分の考えの後に、板書したことを付け加えるようにさせた。



ウ その他

○まとめ新聞の取組

理科と社会科では、単元の終わりに、学習内容を自分の言葉で8つ切り画用紙にまとめさせた。学習内容をアウトプットすることを重視してのことである。タイトルと振り返りを書くこと以外は、全て個人の工夫次第とした。2・3時間で仕上げた後、1人2分程度で発表し合った。1学期に作成したものをポートフォリオにして、個人懇談で保護者に見てもらった。

○日々のノート指導

道徳を含む全教科のノートは、提出させ、朱書きを添えて返却した。できるだけその日のうちに行い、翌日、その記述について、児童と対話するようにした。

○家庭学習の指導と評価

宿題は、音読、漢字、算数、及び自主学習である。漢字や算数の宿題用ノートは1冊、自学用は2冊用意した。朝学習が始まるまでの時間や休憩時間を使って、できるだけその日のうちに評価して返却した。間違いには☆印を付け、付箋を貼った。必ずコメントも書いた。児童に書くことを課す以上、教師も書くべきだと常々考えているからだ。未提出や直しのある児童につ

いては、出席番号を小掲示板に書いて知らせた。正当な理由がない場合は、休憩時間返上でさせた。これは、児童とのルールづくりで決めたことである。

自学ノートを2冊としたのは、ノートを返却してなくても、自主学習に取り組めるようにするためである。よいノートは、《お見事・あっぱれ自学コーナー》に掲示したり、校長の自主学習掲示板に掲示してもらったりした。家庭学習の指導と評価は、学習習慣と基礎的な学力の定着に欠かせない考える。

○評価テストの取組

テストの日時は1週間前には連絡し、宿題でテスト勉強を課す。テスト後は解説を丁寧に行う。満点を取った児童には、出席番号で知らせて頑張りを称える。80点未満の場合は再テストを行い、学習内容の定着を図った。

○水泳指導

天候不順だったが、水泳練習を13時間行うことができた。3・4年生29名を泳力で3つのコースに分け、3人体制で指導した。後半には、泳力を測定して掲示し、どれだけ伸びたかが分かるようにして意欲を喚起した。最初は顔つけもできなかったのに、25mも泳げるようになった児童もいた。

以上の重点的な取組に加え、平素から「分かった」「できた」という思いがもてるように、個に応じた指導を心がけると共に、できていることを認め、自力で解決しようとする意欲を高めることに注力して学力の向上を図っている。

② 教科外指導

ア 学級の宝の掲示

学級目標【かがやき】の視点で捉えた学級のよさを《学級の宝》として側面の壁に掲示した。協働して学校生活に貢献したこと、めあてをもって取り組み達成したこと等、児童と共によさを確認しながら掲示し、達成感をよりよく生活しようとする意欲に繋げた。

イ 学級通信【かがやき】

毎週一人一人のよさを《一人一人のかがやきナイスショット!》と題して学級通信に掲載した。3年生とは、週27時間の授業や給食指導等、学校生活のほとんどの時間を共有する。その生活の中で見られたよさや、ノート等の記述から感じたよさを紹介した。全員同じ文字数に仕上げることは苦勞をしたが、児童理解の力を養うことができた。児童においても、他者理解を深める手立てとなったように感じている。

また月末には、その月のよさを《今月のかがやき

ナイスショット!》として掲載した。学期末には、一人一人に【かがやき賞】の賞状を渡し、頑張りを称えた。

ウ おはようメッセージ

放課後に教室整美をする際、前面黒板全体に《おはようメッセージ》を書く。まず、【かがやき】の視点から捉えた今日よかったことや、明日頑張してほしいこと、楽しみにしてほしいこと等。時には、残念だったことや注意点も書いた。児童に見通しをもたせ、意欲を高める書きぶりになるように心がけた。

次に、明日の時間割と今日の宿題等。児童は登校して提出物を出し終えたら、この部分を連絡帳に書く。児童は視写した後、😊マークを書いて《今日の一言》を記入する。私は、連絡帳を確認した後、必ず😊マークを書いて《先生からの一言》を書く。たった一行ではあるが、児童の《今日の一言》への返信や、期待していること、昨日よかったこと等、前向きな言葉かけになるように努めた。

最後に朝の会が始まるまでの連絡事項を書く。口頭での指示をできるだけ少なくして、落ち着いた雰囲気を保つためである。

エ その他

○生活アンケート

毎月生徒指導に役立てる目的で生活アンケートを実施している。実施後は、気になる児童（6月は全員）と教育相談を行う。一人一人の思いや困り感に寄り添いながら、一緒に解決方法を考え、意欲をもって前向きに取り組むことができるように支援している。

また、困ったりいやだったりしたことは友達や先生に言うこと、よくないことは注意すること、自分は絶対しないことについて繰り返し指導し、安心して落ち着いた生活ができる集団づくりに努めている。

○誕生日会

児童の誕生日を学級全員で祝う。前日に色紙を用意し、該当児童以外の子どもたちは、シールにメッセージを書いて貼る。当日は、朝の会の最初にくす玉を割り、記念写真を撮る。みんなとびっきりの笑顔である。

○学級ギネス大会

教諭時代から使っている《森岡学級ギネス大会》のトロフィーを用意して行った。内容は、暗唱大会を2回となかよし標語、まとめ新聞についてである。

○帰りの会での《今日のかがやきコーナー》の取組

○始業前ルール《①提出物を出す ②連絡帳に書く

③自席で読書をする》の設定

3 成果と課題

(1) 津山教育事務所、生徒指導推進室の評価から

5月20日に津山教育事務所、5月27日に県教育庁義務教育課生徒指導推進室の訪問を受けた。20日は理科のまとめ新聞の授業、27日は国語科で途中からペア学習をする授業であった。参観された先生方から、落ち着いて学習に取り組んでいると好評価をいただいた。

(2) QU調査の結果から

6月18日、1回目のQU調査を行った。学習意欲、友達関係、学級の雰囲気のものも全国平均以上だった。学級生活不満足群に4名の児童がいた。要支援群ではないが、困ったときに相談相手がいなかったり、認められていないと感じていたりしている。人と関わる力を養い、認め合う学級づくりを一層進める必要がある。昨年度落ち着きを欠き、目を離すことができなかったA男は、承認得点が高かった。よさをすかさず、みんなの前で認めるという手立てが功を奏したと考える。

(3) 生活アンケート(4・6月)といじめについてのアンケート(5月)の結果から

生活アンケートでは、特に「学校に行くのが楽しい」「今、友達からつらいことをされたり、困ったりしていることがある」の項目に注視した。

楽しさについては、4月に唯一人「楽しくない」と回答していたB男は、6月には「とても楽しい」に好転した。つらさについても、4月には「つらいことがよくある」と答えていたが、「たまにある」に好転した。

だが、4月も6月も「つらいことがたまにある」と答えたC男、「あまりない」が「たまにある」に変わったD男、「全然ない」が「たまにある」に変わったE男やF女がいる。引き続き、積極的な対話を通して実態を把握し、問題の早期発見・早期対応に努める。

(4) 児童の《1学期ふり返りカード》から

《1学期ふり返りカード》を使い自己評価を行った。その中で、学習が楽しかったという児童16/17名、学習がよく分かったという児童16/17名、友達となかよくしたという児童16/17名という結果であった。今後とも学習を楽しみを感じるような手立てを講じたい。

(5) 保護者との関係から

保護者対応は、迅速・誠実が基本である。本年度は、感染症予防対策等の関係で、家庭訪問が実施できなかった。その代替策として計画していた希望懇談(17名中13名の希望)もやむを得ず中止となった。4月に予定していた参観日も中止となり、6月20日の土曜参

観日が初対面という保護者がほとんどだった。昨年度は、保護者が自由に参観する期間を1週間設けたり、ケース会議を開いたりしたようだが、この日の学級懇談は、穏やかな雰囲気の中で意思疎通が図られた。無記名の保護者アンケートにも、マイナスの記述はなかった。学期末の個別懇談でも、「楽しんで学校に通っていて、安心している。」と口々に話された。学級通信や電話連絡等で児童の様子を伝え、協働して指導・支援ができる関係づくりをしてきた成果と考える。

(6) 仮説の検証

学習規律とノートの指導を徹底させたことで、児童は落ち着いて、しかも時間を持て余すことなく学習に取り組んだ。新しい課題に対しても「前のノートを見ればできそう。」と、既習事項を生かして自力で取り組むという学び方を身に付けつつあると考えている。

一人一人のよさに気付かせ認め合うという取組によって、児童は自己理解・他者理解を深め、自己有用感を高めることができた。しかし、よりよい学級にしようという前向きな態度が十分に醸成されているとは言えない。3年生という発達段階を踏まえつつ、今後は、学級目標【かがやき】のローガンの1つ「**やさ**しい子」を重点にして取組を推進する。



4 おわりに

校外行事や全校集会のない1学期だったが、バイタリティあふれる3年生は、毎日の学習に前向きに取り組んだ。できないこともあるが、どの子も頑張ろうとしている。勉強が分かりたい、できるようになりたいと思っている。そして、友達となかよく生活したいと思っている。いろいろな人たちから「3年生が変わりましたね。」と言われるのは、子どもたちの頑張りたいという気持ちに寄り添い、できたことや頑張ったこと等を具体的に認め合うという指導の成果ではないかと考えている。

本年度の実践の多くは、以前教諭時代に行っていた取組を基にしており、子どもたちを変えられることができる教師という仕事に、改めてやりがいを感じている。【学び続ける者だけが、教えることができる】というのが私の信念である。ささやかな実践ではあるが、望ましい学級集団づくりに奔走している若手教師にとって、少しでも参考になることがあれば幸いである。



児童の意識を大切にし、深い学びをめざす理科学習

—3年生「音を出して調べよう」の実践—

赤磐市立山陽西小学校 指導教諭 東野圭佑

1 はじめに

本単元「音を出して調べよう」は新学習指導要領改訂にともない、第3学年の学習に加えられたものである。この単元では、音を出しているときの震え方に着目して、音の大きさを変えたときの現象の違いを比較しながら音の性質について調べる活動を通して、それらの理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に差異点や共通点を基に、問題を見出す力や主体的に問題解決しようとする態度を育成することをねらいとしている。

本実践では、ねらいを達成すると同時に児童が主体的に問題解決に取り組む過程で、実感を伴いながら音に関する認識が変化したり、広がったりする過程を「深い学び」と考えた。

また、「深い学び」に対する評価は、単元前、中間、単元末に児童に音に関する認識（分かったことや驚いたことなど）の質問紙や授業中の行動など学習中の観察で行う。

2 児童の実態

音は児童にとって、とても身近であり、様々なことを経験的に学んでいると思われる。また、理科学習が始まったばかりの3年生は理科に対しての期待感や学習意欲が高い。児童の生活経験や学習への期待感を大切にしていきたい。

3 指導の工夫

指導にあたっては、以下の2点の手立てを工夫して行う。

① 児童の意識の流れを大切に単元構成

「深い学び」に向かうためには、児童が一つ一つの問題を自分事として捉え、納得できるまで追究しようとするのが大切である。そのためには、単元を児童の意識の流れに沿った展開に構成する必要がある。

② 児童が主体的に取り組むための教具の工夫

教具に関しては特に右図のような「マイ糸電話」を使用する。「マイ糸電話」を一人が一つ手にすることで、

「色々な物の音を聞いてみたい。」「友達とつなげてみたい。」などと自分の思いをもって学習に取り組むことができる考える。

<マイ糸電話>

紙コップにたこ糸を取り付ける。たこ糸の片方の



はしに「甲丸カン」を取り付け、色々な物に取り付け、取り外しが簡単に行えるようにする。



<甲丸カン>

「マイ糸電話」のはしに取り付けている金具。手芸用品等で取り扱われている。

4 指導計画（単元構成）

「音」に関する質問紙①

第一次 音の震えを調べる。

第1時 楽器の音を出そう。

第2時 音が出ると震えているか調べよう。

第3時 音の大小と震えの大小について調べよう。

第二次 音の伝わりと震えを調べる。

第1時 音が伝わる時、物が震えているか調べよう。

第2時 楽器を使って音の伝わりと震えを調べよう。

「音」に関する質問紙②

第三次 「マイ糸電話」を使って色々な音を調べる。

第1時 「マイ糸電話」を使って色々な音を聞こう。

「音」に関する質問紙③

5 指導の実際

(1) 音に関する質問紙①

始めに行った質問紙では「身の回りで音が出る物にはどんな物があるか。」「音を出したとき、聞いたときに何か感じたことはあるか。」「音について知っていることはあるか。」の3点を質問した。

身の回りの音では特に、雷や雨、風など「自然の音」やドアや筆箱、楽器など「自分で出す音」、電子レンジやスマホなど「機械が出す音」の大きく3点に分けることができた。この中で学習として自分たちが扱いやすい物として、「自分で出す音」を扱って学習を進めることを確認した。

音について感じたことや知っていることについては、「音は目に見えない。」「ひびいてくる。」「震える。」「大きさが変わる。」などの経験が出された。そこでまず、音楽室へ行き、様々な楽器で音を出す活動を通して、個々の意見を確かめた。

(2) 第一次 第1時

児童は、色々な楽器で音を出し、見たり、触れたりしながら感じたことを意見交換した。



活動の中で、「音は目に確かに目に見えないな。」「音が出ると楽器が震えているよ。」「震えない楽器もあるんじゃないかな。」といった問題を見いだすことができた。そこで、音と震えに関する考えが混乱するのを避けるため

に、ひとまず震えの分かりやすい楽器を使用し、音と震えについて、学習を進めることとした。

○震えの分かりやすい楽器

・トライアングル・シンバル・太鼓

○震えの分かりにくい楽器

・カウベル・ウッドブロック・クラベス

これらは、単元の後の方で扱う。

(3) 第一次 第2時

多くの児童が実験に参加できることを重要であると

考え、児童の実験は数が多く確保できるトライアングルを使用し、2人に1つで実験を行った。

トライアングルに付箋を貼り付けることでトライアングルの震えを視覚的にも分かりやすく捉えることができた。また、直接手で触れ、「音が出ているときには震えているよ!」「強く触ると音が止まるよ。」「触ると震えが止まるから音が止まるんじゃないかな。」といった気付きや考えが出された。



この活動を通して、「音が出ているときにはトライアングルは震えている。」「震えを止めると音も止まる。」ということが分かった。さらに他の楽器も使用することで震えと音に関して一般化することを図った。



(4) 第一次 第3時

本時では、前時までの活動を通して、「音が大きいと震えは大きい。」「音が小さいと震えは小さい。」という見通しをもっていたため、トライアングルとその他の楽器を用いて個々が前時までと同様の方法で実験を行うことができた。本時の終わりに、トライアングルに貼り付けていた付箋を想起させ、「付箋をどんどんとつなげていき、耳を当てると音が聞こえるかな?」と問いかけた。すると「それって糸電話みたいだね。」「糸電話をトライアングルにくくりつけてみればいいよ。」といった方法が発想された。

そこで、「マイ糸電話」を作成し、音の伝わりを追究することとした。

(5) 第二次 第1時

「マイ糸電話」の作成に関しては、あらかじめ、糸

を切り、カップに穴を開けておくことで、授業外の時間で作成することができた。



「マイ糸電話」をつなげて音を出してみる中で、「糸をピンッと張って！」「ゆるむと聞こえないよ！」といった声が児童から聞かれ出した。

そこで「どうしてピンッと張らないといけいないのか。」という問題から「音」と「震え」に着目しながら実験を行った。



張られた糸電話



緩んだ糸電話

糸が張っている状態と緩んでいる状態とで比較しながら実験を行うことを通して児童から「ピンッと張ると糸が震えていて音も伝わるよ。」「糸が緩んでいると糸は震えないし音も伝わらないね。」といった発見が聞かれた。

さらに、黒板に耳を当てて黒板をたたき、黒板の震えを感じたり、階段の金属製の手すりに耳を当て、全員で音と震えの伝わりを感じたりする活動を通して、「音が伝わる時、物は震えている。」というまとめを行うことができた。



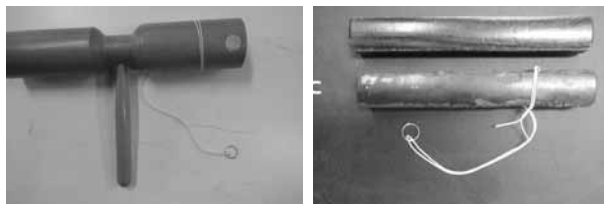
手すりの音と震えを感じる様子

本時の終わりに、第一次の第1時で「震えない楽器」として「ウッドブロック」、「カウベル」、「クラベス」について「音は聞こえていたけど本当に震えていないのかな？」という質問を行った。予想は半分半分まで未だ「震えていない」と考える児童も見られた。そ

こで次時に実験を行うこととなった。

(6) 第二次 第2時

実験は、楽器に次の写真のような糸と丸カンを取り付け、そこに「マイ糸電話」を楽器につなぐ方法で行った。



クラベスの実験

糸をつないで調べることで、その震えを触って確かめたり、付箋を貼って視覚化したりとこれまで学んできた方法を試している姿が多く見られた。授業のふり返りでは、「音」に関する質問紙②を行った。

そこでは次のような記述があった。

- ・音が伝わる時には震えている。
- ・ウッドブロックは震えないと思っていたけど、震えていて音も伝わった。
- ・震えが分かりにくい楽器もひもや付箋をつけると震えていることが分かった。
- ・音がすると、必ず震えている。
- ・楽器によって震え方の強さは違うけど震えている。
- ・はじめは震えていないと思っていた楽器が震えていたのでおどろいた。
- ・震えていないと思っていた楽器を確かめることができてよかった。など。

次時には、様々な素材を用いたり、繋ぎ方をしてみたりして活動を行うこととした。

(7) 第三次 第1時

学習の最後に試してみたいことを聞いてみると児童からは次のようなことが上がった。

- ・クラスの全員で糸電話をしたい。
- ・マイ糸電話を糸で繋ぎたい。
- ・マイ糸電話を針金で繋ぎたい。
- ・マイ糸電話を紙テープで繋ぎたい。

・マイ糸電話をゴムで繋ぎたい。

など、意見を基に、物の準備は教員が行い、実験は児童に任せて行った。



最後の時間で聞かれた「音」に関する質問紙③には次のような記述が見られた。

- ・紙テープでも音は伝わり震えていた。
- ・毛糸はふわふわしているから伝わりにくいかと思っただけ伝わった。
- ・針金はブワンプワンの感じで音が聞こえた。
- ・大勢でのシンバルでもちゃんと聞こえておどろいたし、楽しかった。
- ・マイ糸電話を机や黒板、ロッカーに繋いでもきちんと音は聞こえた。ひもは震えていた。
- ・ゴムは音が聞こえづらかった。
- ・全員糸電話は遠くの人が話すことはほとんど聞こえない。きっと、遠すぎて震えが伝わりにくいのだと思う。近くの人が話すことは聞こえた。
- ・全員で糸電話をためしてとても楽しかった。伝わりやすさや伝わりにくさがよく分かった。

そのほかにも、学習を通して感じた個々の驚きや感動などが多く記されていた。

6 成果と課題

(1) 成果

本実践を通して、単元のねらいは、テストの結果からも達成されたと考えている。「深い学び」については、時間の経過とともに次の表にまとめた。

認識の変化と興味の広がり「深い学び」	
第一次	震える楽器を用いて、教科書に沿った学習
第二次	震えないと思った楽器についての再検討 「震えない楽器もある。」と考えていた児童の認識に変化が表れた。
第三次	マイ糸電話を用いた学習 ・蜘蛛の巣状に糸電話をつなぐ。 「大勢で聞くシンバル」「全員糸電話」など ・糸電話の中間に別素材をつなぐ。 「針金」「ゴム」「毛糸」「紙テープ」 ・様々な場所へマイ糸電話をつなぐ。 「ロッカー」「机」「いす」など このような主体的な活動を通して、音に対する意識の広がりが見られた。

表のように、学習が進むにつれて、認識の変化や広がりが見られた。また、記述しているような児童の姿から「学びは深まっている。」と捉えてよいと考える。

特に第二次に児童の意識にあった「震えない楽器もある。」を再検討したこと、マイ糸電話を使用したことが成果につながったと考える。

(2) 課題

課題としては、「音は空気の振動で伝わる」という点についてである。本単元では、空気の震えは扱わないことになっている。そのため、震えを説明しにくいリコーダーや声が耳に届く仕組み等の扱いが難しく、口頭で簡単に説明する程度にとどまった。音への関心が高まるにつれて疑問は高まっていた。

7 おわりに

児童の意識に沿った問題解決を行っていくこと。児童の学びが主体的になるような教具を工夫すること。これらのことで、学びも深まっていくと改めて感じることができた。限られた時間数の中で効率的に授業を進めることを求められることもあるが、可能な限り、児童の意識を大切に授業づくりを行い、児童の「やっぱいいそうか!」「え?そうだったのか。」「納得したよ。」という姿を増やしていきたい。



「キャリア・パスポート『スタイルブック』を 活用した質の高い振り返りの実践」

—学びに向かう力の育成と進路実現に向けた効果的な指導を目指して—

岡山県立井原高等学校 主幹教諭 前崎靖彦

1 はじめに

高等学校学習指導要領（H30.3公示）総則において、生徒が「学ぶことと将来のつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と明示された。特別活動においては、「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行う」際に生徒が、「活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」とされた。文部科学省は、児童生徒が活動を記録し蓄積する教材として「キャリア・パスポート」の在り方や活用方法について、これまで検討を進めてきた。

また、平成30年度入学生からは、高大接続改革の一環として、多面的総合的評価が導入され「生徒自らが学びに向かう力」の育成が求められている。生徒の学びに向かう力は、質の高い振り返りの中で、未来志向やメタ認知及び成長実感が伴うことで、効果的に高められるともいわれている。1) 調査書においては、生徒の特徴や活動履歴の記載が必須となった。こうしたことを踏まえ、本県においても本年4月より、地域・学校の実情に応じたキャリア・パスポートの準備に着手し、円滑な実施に向けての周知が図られたところである。

2 実態および課題分析

本校専門科生徒における進路希望調査、学習実態調査、授業アンケート等の状況や結果を参考にし、課題を整理した。

- ◆その場の感想や事象の振り返りは行うが、自己の変容への気づきや課題に対する改善策、対応策を考えるなど、質の高い振り返りに達する生徒は少ない。
- ◆基礎学力が定着していない生徒や家庭学習習慣が確立していない生徒が多い。そのため、授業や定期考査等、学びに向かう力に大きな差がある。

- ◆キャリア形成を意識した学校生活や行事の振り返り機会が少なく達成規準がないため生徒の成長実感に繋がりにくい。
- ◆主体性を含む多面的総合的評価の導入に向けた活動履歴の蓄積と調査書活用に関わる仕組みづくりができていない。

3 課題の解決策

- 実態および抱えている課題から、具体的な解決策を見だし、実践的に取り組むこととした。
- ◆振り返りの機会を定期的に作り、他者視点を入れる等、自己の変容に気づかせ、質の高い振り返りをさせる。
 - ◆定期考査に向けた目標設定と結果分析の仕組みを作り、学びに向かう力の向上や学習習慣の定着を図る。
 - ◆ルーブリック評価による達成規準の明確化と教員の共通理解を図り、指導と評価の一体化を目指す。
 - ◆進路目標と学習成績や活動実績を結びつけ、早期にキャリア意識を高め、効果的な指導に繋げる。

4 達成された姿

- 学びのPDCAサイクルを目指し、生徒の成長や達成された姿をイメージした。
- ◆「性格」、「行動」、「学習面」、「生活面」において自己の変容に気づき成長が実感できた。
 - ◆学習の成績履歴を把握し、理想と現実のギャップに気づき、自らの進路実現に向けて努力できた。
 - ◆「目標設定」と「振り返り」により、活動や経験を学びに向かう力へ繋げることができた。
 - ◆「振り返り」と「他者視点」を入れた蓄積教材により、生徒の成長実感が効果的な進路指導に結びついた。

5 実施概要

四年前から、計画的かつ系統的なポートフォリオを活用した質の高い振り返りと主体的に新たな学びを喚起させるアイテムとしてキャリア・パスポートの作成に取り組み、本校専門科では、その名称を「スタイルブック」とした。「スタイルブック」という名称につ

いては、自分らしさを発見しながら、自らの進路目標に向かっていくということを意義とした。

これまでの取り組みを以下に示す。

- ◆平成29年度…進路実現のための視覚的なポートフォリオを作成～専門科のカリキュラムを整理し、「学科ビジョン」、「教育課程」、「地域連携」、「資格」、「進路」等、自らのキャリア形成の意識付けを支援するためワークシートを作成した。
- ◆平成30年度…キャリア・パスポートを「スタイルブック」という名称に設定～学習面・生活面における自己の変容と成長を図るワークシートを冊子綴りにした。また、ファイル管理を行い、教材等を蓄積できるようにした。
- ◆令和元年度…学校行事振り返りシートの開発及びスタイルブックタイムの導入～学校行事を通じて身につけさせたい力を教員間で共有し、生徒の到達目標を可視化したルーブリック評価を作成した。
- ◆令和2年度…一年間の成長実感に繋げる仕組みをつくり、学びの総括シートを作成した。

6 実施内容

① グランドデザインと指導ガイドの作成

高校三年間で生徒へ身につけさせたい力を教員間で検討及び共有し、学校生活における行動と生活スキルを六つに精選した。また、指導の方向性を確認するためにガイドラインを作成した。



【図1：スタイルブックデザイン】

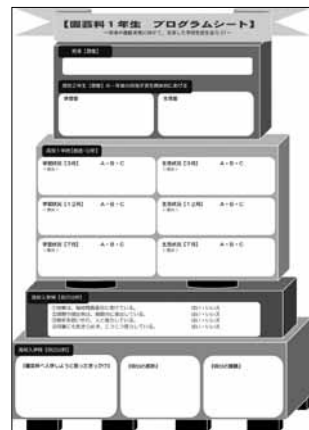
② スタイルブックワークシートの作成と指導

■「進路実現プログラムシート」

高校入学時、学科ガイダンスの中で、中学校時代の学習・生活面の自己分析を行った。また、1年後のなりたい自分像や卒業後の理想を描いた上での学習・生活面の評価を実施し、進路目標の実現に繋げた。



【図2：表紙】



【図3：プログラムシート】



【図4：振り返りの様子】



【図5：ガイダンスの様子】

■「ワークシート～学習編」

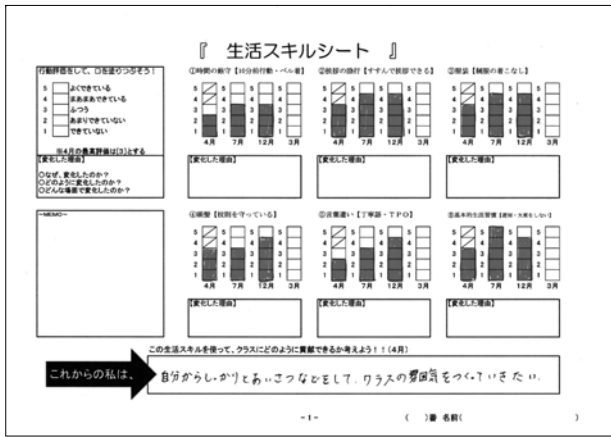
定期考査の目標点や結果を振り返る履歴シートを作成した。また、各教科の評価点や5段階評価、学習成績評定平均値が一覧で可視化できるシートも作成した。目指す進路実現に向けて掲げた成績目標と結果の推移は、考査への意欲的な態度に繋げた。



【図6：ワークシート～学習編】

■「ワークシート～生活編」

毎学期末、生活スキル（6つの力）について自己の変容と成長が可視化できるボックスチャートシートを作成した。各項目の到達度と原因を振り返り、高校生として望ましい生活態度の育成と自らの改善に繋げた。



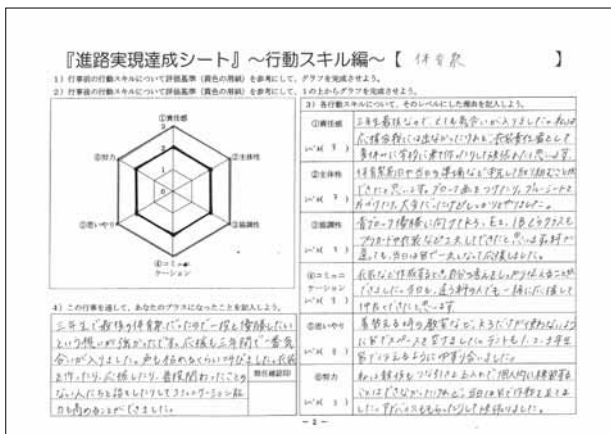
【図7：ワークシート～生活編】

■「ワークシート～行動編とループリック評価の作成」

学校行事を通じて身につけさせたい行動スキルについて教員間で共有し、指標となるループリック評価表を作成した。それぞれ、「6つの力」について変容と成長をレーダーチャートに示し、また、その根拠を記述することによって自己表現力の向上にも繋げた。

【表1：ループリック評価（行動編）※一部抜粋】

主体性	3	相手や周囲の気持ちを理解し、自ら考え進んで物事に取り組むことができる (た)。
	2	自ら考え進んで物事に取り組むことができる (た)。
	1	自ら考え物事に取り組むことができる (た)。
協調性	3	誰とでもどんな場面でも助け合いながら、同じ目標に向けて活動することができる (た)。
	2	グループや身近な人と同じ目標に向けて活動することができる (た)。
	1	仲の良い人と同じ目標に向けて活動しようとしてできる (た)。



【図8：ワークシート～行動編】

■「進路実現達成シート～総括編」

年度末に、資格取得や表彰、ボランティア、自己PR等、総括シートに記録する。これまでの行事シートの中から一年間でどのような力が身についたかを振り返るシートを作成した。調査書における活動履歴の入力は、本シートを補助資料として担任が入力できるように枠組みを構成した。



【図9：ワークシート～総括編】

③ 「振り返り」の場面設定

全クラスにおいて「スタイルブックタイム」を導入し、考査や行事の事前事後において「振り返り」ができる時間の確保と場面設定のスケジュールを可視化した。一斉時間の設定により、担任・学年間の情報共有や巡回指導も可能となり、取組の実態把握や課題発見にも繋がった。

④ 教員研修会の実施

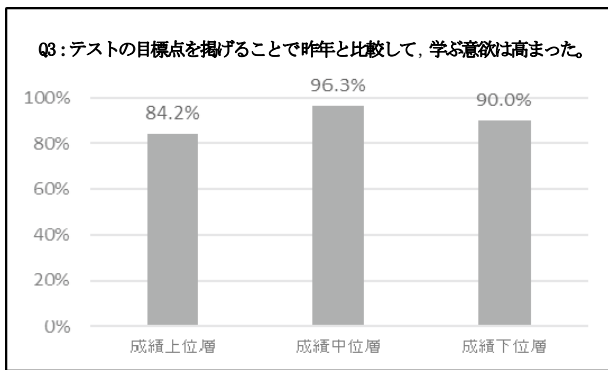
年度末には、生徒アンケートの分析会、教員アンケートによる検討会を実施しながらスタイルブックの充実に向けて取り組んできた。また、年度初めには、ガイダンスを実施し、経緯やねらいを再確認しながら、指導方法の検討や効果的な活用法について協議・検討を行った。共通理解のもと教員間で情報交換やアドバイスも行い、指導力の向上に繋がながら進めることができた。



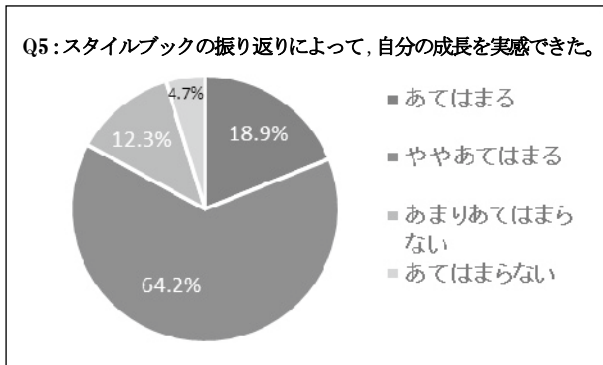
【図10：教員研修会の様子】

7 実践の成果

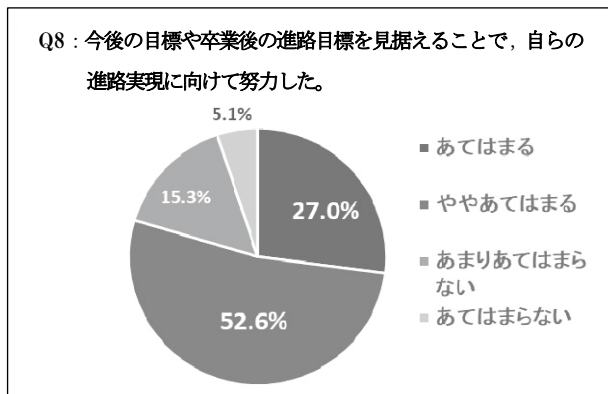
これまで、中間期と年度末期にアンケートを実施した。導入による効果の検証と教員の指導方法の改善に向けて分析を行った。



【図11：生徒アンケート】



【図12：生徒アンケート】



【図13：生徒アンケート】

資料1：【生徒アンケートの記述（※一部抜粋）】

- ◆これを活用することにより、自分がどのくらい勉強したかなど記録がとれて、前よりは学習意識につながったと思う。
- ◆自分の将来についてあまり考えなかったけど、最近はしっかり考えることができるようになった。
- ◆第1回定期考査から全てのテストの点数を見えることによって、何点取らないといけないのかが分かり、勉強の意欲が高まったから良かった。第1回定期考査から自分がどれだけ成長しているかが分かりやすく良かった。

スタイルブック導入について、成績別及びクラス別に10項目のアンケートを実施した。導入後の学びに向かう力が向上したと実感した生徒は成績中位層（4割）において96.3%であった（図11）。考査前後の場面設定及び中位層の引き上げは、学び合う集団づくりにも有効であり、ツールとして充分であると言える。特に定期考査に対する「目標設定」と「振り返り」の効果は、記述アンケート（資1）からも読み取れる。学習成績の履歴と変動を把握し、学習意欲への喚起や学習習慣の定着に向けて、効果的な指導にも繋がった。

また、1年時より理想と現実のギャップに気づくこともできると同時に教師側も学習の過程における多面的・多角的な評価に基づいた進路指導が可能となった。教員アンケートの中でも「スタイルブックを活用することで生徒の学習意欲が高まったと感じる。」という項目は70.4%であった。多数の教員が、生徒の学びに向かう力の向上を感じることができており、クラス担任の指導力向上にも期待できると考える。

スタイルブックの活用においては、約83%の生徒が肯定的評価であった（図12）。振り返りの場面設定や他者視点からの気づきなど、自己変容の分析と成長実感が、学びに向かう力に繋がったとも考える。

さらに、79.6%の生徒が、今の学びとキャリア形成を意識することができている（図13）。生活・行動（6つの力）力の焦点化や評価規準の可視化等によって、指導と評価の一体化ができ、効果的に活用できたと考察する。

8 おわりに

キャリア・パスポートを作成、実践していく中で、生徒一人ひとりの学びの多様性に応じた効果的な進路指導の在り方について深く思考することができた。社会で求められる力が変化していく中で、「これまで」と「今」を、どう「これから」に繋ぐか、教師側に課せられたテーマと考える。今後は小・中・高の学びを繋ぐツールとして、近隣の学校と連携しながら、さらにキャリア教育の充実を図っていきたいと考える。

【参考文献】

- 1) ㈱ベネッセコーポレーション（2018）「新入生一期生初年次指導研究会」
- 2) リクルート（2018.7）「キャリアガイダンス」
- 3) 文科省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2018）「キャリア・パスポート特別編」



多層的支援体制の構築による

「一人も置き去りにしない学校」を目指して

—特別な教育的ニーズがある児童への指導・支援を「アップデート」できる学校体制づくり—

津山市立北小学校 校長 吉田 英生

I はじめに

私は長年、特別支援学級担任や通級指導教室担当をし、多くの障害がある児童への指導・支援に当たってきた。その中で、障害の有無に関わらず子どもは教育的な働きかけによって全員が必ず成長するという手ごたえを感じてきた。児童の発達や個性に応じて一人一人の教育的ニーズを把握し、その子どものよいところや得意なことを生かす視点も大切にして教育に当たれば、どの児童の資質・能力も高めることができると考えている。本校で校長として学校経営に携わることになり、全児童を成長に導く学校となるためには、多様な学習の場や機会があり、学び方の違いに応じた多層的支援体制を構築する必要性を感じ、学校づくりに取り組んだ。

II 研究の方向性

本校は、児童数240人程度の中規模校であるが、不登校傾向児童が多く、学力の二極化傾向や自己肯定感が低い児童の荒れた言動の顕在化などの教育課題があった。

国は、「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供を示し、平成29年3月に告示された学習指導要領総則においては「児童の発達の支援」を新たに項目立てし、一人一人の発達や個性に応じてその資質・能力を高めていくこと、としている。つまり、一人一人の教育的ニーズを把握した個へのアプローチがより大切にされる時代になっていくと考えられる。

そこで、学校経営のキーワードとして「一人も置き去りにしない学校」を掲げ、学校づくりの柱を「一人一人の子どもの教育的ニーズに応じた温かな教育実践を創造する学校づくり」と設定した。そして特別な教育的ニーズがある児童はもとより、すべての児童にとっての温かな教育環境、人との関係の中で人間性を豊かに育みながら、取組を「アップデート」し、手だてを創造できる多層的な支援を実現する学校体制づくりを目指した。

全職員の知識や経験、教育技術を集約し、多角的なアセスメント、手だての検討・実施・修正を繰り返しながら、個々の児童のニーズに最適な支援をするためにどのような校内体制を構築するべきか、整理することから始めた。

III 研究の実際

1 個への指導・支援と校内体制づくり

① 実態の把握

学校における一人一人の教育的ニーズを把握し、教育実践につなげる校内体制づくりと1年間の運用サイクルを確立させるためには、校内特別支援教育委員会(以降「校内委員会」)が中心となって児童の実態を把握し、課題解決を日常的に図ることが大切である。

小学校では、学級担任が日々の学級生活や授業で児童の様子を把握している。生活上又は学習上の困難がある児童の概要を大まかに把握するために、多忙な担任業務の負担軽減にも配慮したアセスメントシート(表1「特別な教育的ニーズ気づき表」)を作成し使用した。

(表1 「特別な教育的ニーズ気づき表」サンプル)

観 点 / 児 童 名		特別な教育的ニーズ気づき表															その他								
		指示理解	筋道立てて話す	読解困難	音読困難	作文困難	計算困難	文章題困難	図形困難	位置空間困難	不注意・注意集中	指示不履行	離席	衝動発言	忘れ	対話妨害	かんしゃく	集団不参加	状況の読み取り	会話スキル未修得	ことばの意味理解困難	こだわり変更困難	パニック	過敏性	
A																									
B						3						2					2					2	2		
C																									1
D			1		1		1			3	2		3	3	3										
E	2		1			1				2															
F		2	3	3		2								1											
G		1		2									2	3		1	3			2	2	3	1	3	

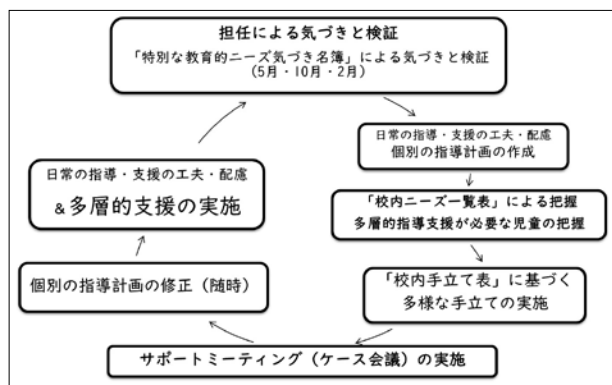
この表は、担任が学級の児童について、困難さの状態に応じて「1(少しある)~3(かなりある)」を短時間で記すことができるものである。アセスメントという、心理検査による分析的な評価と考えがちであるが、日々のノート、行動観察、保護者からの聞き

取りなども重要な多角的アセスメントである。担任が、教育の専門家として一人一人の教育的ニーズを把握し、1年間の教育実践をスタートすることに大きな意味がある。

5月初めには担任が把握した児童実態を校内委員会が集約する。特別な教育的ニーズがある児童の数、大まかな状態像を「校内ニーズ一覧表」にし、個別の指導計画作成を推進し、まずは担任等による日々の授業での指導・支援が行われるのである。しかし、多層的支援体制がないと、「1年間担任が支援したが、子どもの困難さは改善、克服されないままであった」ということになってしまうことが多い。

「気づき⇒把握・集約⇒多角的アセスメント⇒手だての検討⇒手だての実施⇒手だての修正⇒実態検証」のサイクルを校内委員会が常に回していく。

図1 「校内特別支援教育委員会の支援・検証サイクル」



② 多層的支援体制と校内特別支援教育委員会の機能
多層的支援体制のタイプは次のようなものがある。

- A：学級における担任等による指導・支援や配慮
- B：校内体制による少人数の取り出し指導、生活指導
- C：通級指導や特別支援学級の弾力的運用による個別又は少人数の指導・支援
- D：その他、専門機関との連携や保護者支援

カテゴリー分けすると4つであるが、その中身は多種多様である。その手段、方法を日々創造し、個の教育的ニーズに応じて「アップデート」させていくのが、月1回の定例校内委員会である。

定例校内委員会では、校内ニーズ一覧表から、校内体制による指導・支援が必要な児童を抽出し、具体的な手だてを考え、「校内手だて表」に記す。実際には、前年度から継続的に実施している手だてや既に始めている手だてがあるので、それを整理し、校内外リソースを使ってできる指導・支援として一覧にするのである。

(表2 校内手だて表 サンプル)

特別な教育的ニーズ対応 校内手だて表		学校組織として、どの子どものニーズに「だれが・どのように・何を」対応していくかをまとめる													
観点 / 児童名	授業を複数で指導する体制	学校生活場面 授業・教科場面 指導と支援					保護者支援			校外関係機関		その他			
		特別支援学級での取り出し指導	補充学習を取り出し指導	補充学習のサポート	個別学習タイムの個別指導	個別プリント用意	月1回の教育相談	定期的家庭訪問	登校支援	病院連携	子育て支援				
A	○	○													
B			○			○			○	○			○		
C											○				○
D	○	○													○

③ 一人一人の教育的ニーズに応じた支援方法の創造

本校では、個別の児童の指導・支援の手だてを話し合う場を「ケース会議」ではなく、「サポートミーティング」と呼んでいる。前述のように、実態把握は「チェック表」ではなく担任の「気づき表」、校内体制づくりのために作成するのは「障害一覧」ではなく「校内ニーズ表」である。ささやかな違いに思えるが、言葉には教師の意識をつくる側面がある。子どもの能力を切り刻んで分析し、チェックしたことを取り出し、本に書いてあるようなことを個別にすることが特別支援教育だと狭小に考える教師では寂しい。児童を取り巻く生活環境、家族の歴史、その子の好きなこと・苦手なこと、友だちとの関係など、多様な角度から一人一人の教育的ニーズを捉え、手だてを創造していく場がサポートミーティングである。

多忙な学校現場であるので、会議のルーティンを決め、会議時間を45分以内に設定した。すると、子どもの支援策に集中することができた。サポートミーティングの持ち方の基本形(ルーティン)は次のようにした。

- ①子どもの状態、学級の現状の報告 (5分)
- ②質問と参加者からの補足 (5分)
- ③手だてを箇条書きにして出し合う (5分)
- ④手だてを検討する (15分)
- ⑤支援方策をまとめる (10分)

- また、次のような内容が支援の視点となる。
- A：個の困難さにかかわること
 - B：教師と子どもの関係にかかわること
 - C：児童とクラスメート、学級集団にかかわること
 - D：保護者にかかわること
 - E：担任以外の教職員とのかかわり、学校全体での取

り組みに関すること

個の状態や障害特性に配慮した指導だけでなく、生活環境や人との関係に働きかけるアイデアも出すように参加者に助言した。すると、「板書をタブレットで写して渡す」「テスト時間の延長を認める」「壁面に好きなキャラクターの頑張りシールカードを貼る」「授業の半ばに動くことができる時間をつくる」「仲良しの友だちと隣席にする」「班学習で予習しておく」「学校の玄関で毎朝だれかが声かけする」「放課後に個別指導をする」など、様々な案が出る。参加者一人が複数の具体策を考え、話し合えば、明日からできることが必ず見つかる。

また、サポートミーティング用のワークシートは、児童のよい点、好きなコトなども記入できるようにし、課題や困ることばかり話すのではなく、児童のよい点を生かすことも肝要である。

全ての支援アイデアを出し合った後、会議の最後に、「だれが」「いつ」「どこで」「どんな」支援を始めるのかを整理してまとめ、直近の時間に職員全体へ周知するようにした。

サポートミーティングには次のような効果がある。

- ・児童の困難さへの手だてに行き詰っている担当が、会議を通してすぐに実践可能な手だてを得ることができ、協働した取組ができる。
- ・いわゆる「専門家」頼みのケース会議と異なり、身近な教職員がチームとして取り組み、気軽に開催でき、成果も手だての修正等の機動性も高い。
- ・短時間で支援の具体策が見えてくるとともに、派生的には、多角的な手だての立案が、教職員の指導力量を高める。

サポートミーティングの結果は、前述の「校内手だて表」にすぐに反映される。「A君には、テストの読み上げ支援を始める」「7月から専科による算数の取り出し指導を行うよう、本人と保護者に話をしていこう」など、多層的な支援がサポートミーティングのたびに幾重にも広がっていくのである。

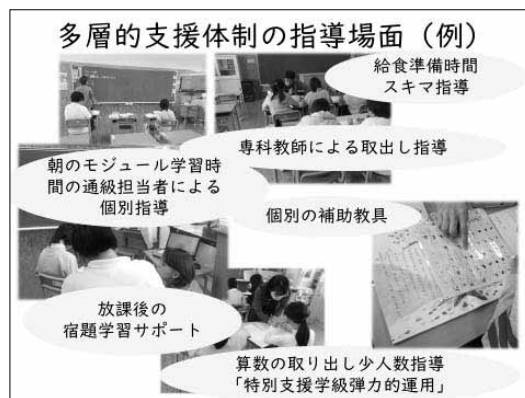
④ 児童の成長につながる多層的支援体制

通常の学級における授業での日常的な指導・支援が、校内体制の中でも基盤となる第1層の支援である。

第2層としては、少人数での適時に焦点を絞った多様な指導・支援の場づくりが必要である。本校では、朝のモジュールタイムでの3,4名の取り出し指導、給

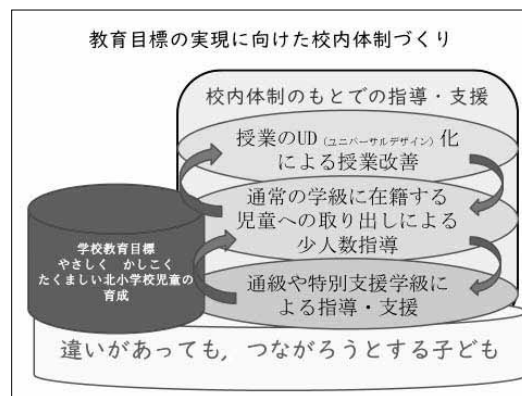
食準備時間での算数問題の補充学習、通級指導教室担当者による読み指導などを行っている。

(指導場面の実際)



第3層として、個の教育的なニーズに合った個別又は少人数での指導・支援として、通級による自立活動の指導、特別支援学級の弾力的運用による取り出し指導などがある。

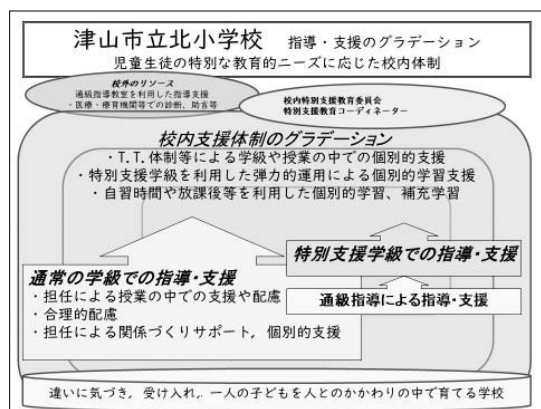
(図2 「教育目標の実現に向けた校内体制づくり」)



少人数での取り出し指導や通級指導によって、児童の指導・支援に生かすことができる知見や教材が見つければ、通常の学級担任に伝えられ、通常の学級における指導・支援に反映されていく。

第2層、第3層の指導形態をとる場合は、保護者へ連絡し、「いつから」「どこで」「誰によって」「どのような内容で」「何を目標にして」などの了解をとり、児童本人にも意欲喚起をする説明を行い、指導を始める。その成果検証は随時行い、第2層、第3層の指導期間は、1週間程度となることもあれば、1か月程度、或いは通年の取組となることもある。また、対象とする児童については、成果が出ればその形態での指導は終了し、必要があれば再開することもある。「無段階変速ギア」のように、教育的ニーズがあれば、それに対応する多様な多層な指導の場、機会、内容を用意することで、グラデーショナルな指導・支援ができる学校体制となってきた。

(図3 指導・支援のグラデーション イメージ)



2 校内研究推進体制

一人一人の児童を大切に考えた授業実践を行う学校文化を醸成することは校長の大きな役割である。前述した校内体制は教師間の協働性を高め、授業力向上のモチベーションアップにもなる。平成28年度からは校内研究のテーマを「授業のユニバーサルデザイン化」に定め、翌年度からは、小中連携で「授業のユニバーサルデザイン化」をテーマにして小学校で育んだ力を中学校区へつなげる取組も行った。

授業研究は、各学級に在籍する特別な教育的ニーズがある児童を抽出し、その学び方に焦点を当てた授業づくりについて研究を進めている。授業のユニバーサルデザイン化の際に「視覚化・焦点化・共有化」だけに留意するのではなく、子どもの様々な能力を活用する視点を持ち、身体化させたり、多様な表現方法を認めたりする授業デザインを考えていくように助言している。授業では導入・展開・まとめに合わせ、意図的に特別な教育的ニーズがある児童に対する手だてを授業者が入れるようになっている。目の前の児童一人一人への手だてを考えようとする教師の姿勢は、児童の学ぶ意欲を喚起し、多くの児童の主体的で協働的な学習態度を引き出していった。また、ペア活動を頻繁に取り入れることで「困ったこと」「わからないこと」を安心して出し、ヒントをもらえる友だちがいて解決につながるような授業が多くなっている。また、授業に「動き」を入れ（身体化）、話し合う、励まし合う、教え合う、見合う・聴き合うことで、互いの意見を知りながら、学び合う授業が展開されるようになった。

IV まとめ（成果と課題）

令和2年度全国・岡山県学習状況調査アンケートを校内で実施し、その児童質問紙の回答を集計したとこ

ろ、「自分にはよいところがあると思いますか」の質問に6年生は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」がそれぞれ55%と32%で計87%、5年生は43%と47%で計91%となっている。「全く当てはまらない」は、6年生では3名(0.8%)、5年生では1名(0.3%)であった。また、本校で毎学期実施している全児童アンケート(令和2年度1学期)では、「授業がよくわかりますか」の質問に対し、「よく当てはまる」「どちらかといえば当てはまる(よくわかる等)」の回答が、全校で207名(88%)、「全く当てはまらない(授業がよくわからない)」は、全校で3名(1.2%)となっている。このように児童の自己肯定感と授業が分かると感じている割合が年々高まってきており、学力についても二極化が緩和され、長欠児童も減少している。学校で、友だちとは違う勉強のやり方をするを恥じることなく、互いの違いを認め合う学校文化が醸成され、児童の言動に優しさと温かさを感じる日々である。

多層的支援体制の取組では、教職員一人一人の個性や能力が随所に発揮された。教職員の自己有用感も高まり授業公開が増え、若手中心の自主研修が開かれるなどの好循環が生まれている。

しかし、学年相応の学力が身につけていない児童やゲーム依存のため休みがちな児童がいるなど解決すべき課題は尽きず、各教科の特性を踏まえたさらなる授業改善などの課題もある。また、校内体制と校外の教育リソースとの連携を広げることも必要である。

今後も、夢を持って、全ての児童と教職員の成長につながる教育実践を創造していきたい。

参考文献

海津亜希子編著「多層指導モデルMIM 読みのアセスメント・指導パッケージ」学研 2009年



人材育成を念頭においた同僚性形成に関する試み

—より鮮明なVisionの展開にむけて—

岡山市立芳泉中学校 校長 山崎 克磨

1 テーマ設定の理由

昨今、様々な教育課題がある中、大量退職により若手教員が急増し、より人材育成の課題は急務となっている。本校も例外ではなく、2019年度の教員の年代別人数割合は、20代、30代、40代がそれぞれ18%、50代が48%とアンバランスな構成となっている。したがって今後数年間で年代間の大幅な入れ替えが予想され、学校経営を活性化する上での人材育成は喫緊の課題となっている。

また、ベテラン教員の割合が大きいことから、職員集団としての落ち着きがある反面、新たな取組に対するエネルギーや機動力の面ではやや停滞気味である。

そこで、学校経営の活性化に必要な人材育成を図るための実践内容の方向性を探り、実践とその結果検証をもとに、学校経営活性化のための人材育成を目指した学校経営の視点を提案したいと考えた。

2 研究方法

まず、現在教員としての一定の指導力を身に付け、校内の中心的立場になりつつあると思われる年代の教員を対象に、自分自身の成長のために何が有用であったかを問うアンケート調査を実施し、その結果から実践の方向性を探ることとした。また、関連する先行研究(事例)を調査し、アンケート結果と合わせて検討した上で実践内容を決定し、実践後の状況の変化や調査結果等をもとに考察を行うこととした。

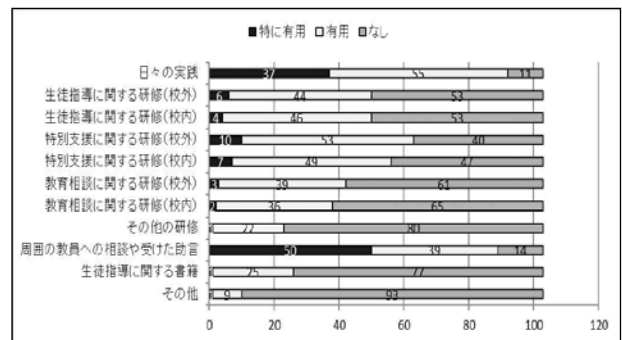
(1) 中堅教諭対象の人材育成に関するアンケート調査

岡山市教育研究研修センター主催で実施されている研修講座に「中堅教諭研修講座」がある。本講座は、従来の「10年経験者研修講座」に代わるもので、個々の教員の能力、適性等に応じた研修を実施することにより、教科指導、生徒指導等、指導力の向上や得意分野づくりを促すことをねらいとしている。本講座の2018年度受講者は小学校教諭77名、中学校教諭26名、合計103名であった。

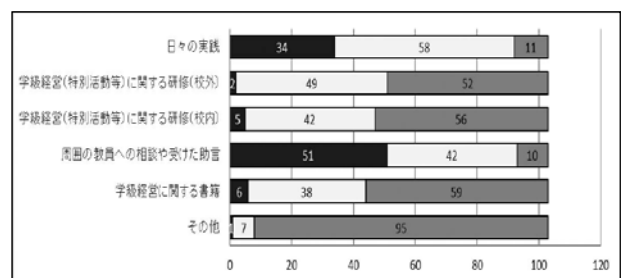
そこで、岡山市教育研究研修センターの協力を得て

本講座の受講者を対象に、人材育成に関するアンケートを実施した。アンケート内容は、「教科指導」「生徒指導」「学級経営」「マネジメント力」の四つの項目に分けて、指導力を高めるためにこれまで特に有用であったもの、有用であったもの、有用とは思わなかったものの3段階で回答し、特に有用であったものについては、具体的な内容を記述するものである。

以下のアンケート結果(図1・図2)は、それぞれの項目について、特に有用であったもの、有用であったもの、有用とは思わなかったものとして評価した実人数を示したものである。なお、教科指導とマネジメント力については紙面構成上割愛する。



【図1】学級経営



【図2】生徒指導

(アンケート結果)

いずれの項目も「特に有用であったもの」、「有用であったもの」の割合が高かったのは、「日々の実践」と「周囲の教員への相談や受けた助言」であった。特に生徒指導と学級経営については、その傾向が顕著であり、自由記述では、次のような内容が多かった。

- ・学年団をはじめ、周囲の先生のサポートや助言がとてありがたかった。

- ・実際に子どものことや状況がわかって共有できる人の助言が解決には不可欠である。
- ・困ったときには同僚の先生に相談して助言を受けることが一番力になる。
- ・日々の困りごとについて、大きなことから小さなことまで周囲の先生方に相談にのってもらった。特に大きな問題に対しては、管理職が柔軟に対応してくれた。等

これらの結果から、中堅教諭が自身の指導力向上のためには、日々の実践はもちろんのこと、周囲の教員に相談したり、助言をもらったりすることが大いに役立っていると感じていることがわかった。

(2) 先行研究から

「教員が学び続ける学校の条件調査」(2018佐々木)において、その条件には、校長が明確なビジョンを示し、教員に高い期待を寄せ、よきリーダーと認識されていることと、同僚性(学校で教員がお互いに相談し・相談される、教える・教えられる、助ける・助けられる、励ます・励まされる、癒す・癒されることのできる人間関係(浦野2007))や挑戦できる雰囲気が必要であるという結果を示している。

この調査は、「同僚性・挑戦性に係る認識」「校長のリーダーシップ」「学び続ける教員としての自己認識」について、28の設問を4件法で回答を求めたもので、平均値の高い学校と低い学校をそれぞれ抽出して、比較検討を行っている。その結果、「教員が学び続ける意思を持つ学校」にするためには、校長のリーダーシップは欠かせないこと。また、教職員一人ひとりが『チーム学校』の一員として自分の役割を自覚しながら意欲的に活動し、組織の相互のかかわりの中で成長できるような体制・環境づくりが重要であると述べている。

一方で、私は教員の成長エネルギーと対極にあるのがメンタルヘルスの課題であると捉え、メンタルヘルスの予防対策は、教員の成長のための重要なファクターになり得ると考えた。

文部科学省の教職員のメンタルヘルス対策検討会議(2013)がまとめた「教職員のメンタルヘルス対策について(最終まとめ)」の中で、教職員のメンタルヘルス不調の背景がいくつかの観点で整理されている。そのひとつに「職場等での人間関係」があり、その中で、以下のことを指摘している。

- ・教員は、同僚の教員に対して意見等を言いにくい

ことがあり、言いたいことが言えない雰囲気がストレスの原因になっていることもある。

- ・職場での教職員間のコミュニケーションに対して苦手意識を持つようになったり、上司や同僚に悩みを相談しづらいと感じるようになったりして、職場での人間関係が十分形成されず、メンタルヘルスが不調になる場合がある。等

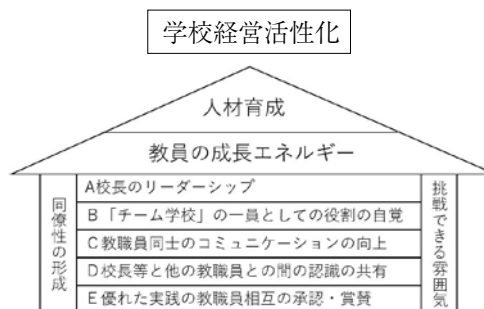
これらの課題に対する予防的取組として、次の内容の必要性を指摘している。

- ・開かれた学校、校長室、職員室、事務室。
- ・教職員同士のコミュニケーションの向上や風通しのよい職場の実現。
- ・校長等とその他の教職員との間の認識の共有。
- ・教職員が優れた実践をした時には認め、良いイメージを持って振り返ってもらうこと。

これらのことは、これまでの私の経験値とも多くの部分で合致するものであった。

3 研究の仮説

以上のことから、教員の成長と同僚性はあらためて深くかかわっていることがわかった。そこで、これらの内容を踏まえ、図3に示すA～Eの観点での多面的なアプローチにより、同僚性が形成され、教師が学び成長する環境が整うことで人材育成が促進されると考えた。



【図3】

4 実践内容

(1) 学校経営目標への位置づけと構成的グループエンカウンターの実施(関連:図3A・B・C)

同僚性を重視する姿勢を職員に浸透させるため、2019年度及び2020年度の学校経営の目標に「同僚性の形成」を明確に打ち出すとともに、教職員がチームづくりを意識するために、第1回職員会議冒頭で校長がファシリテーターを務め職員による構成的グループエンカウンターを実施した。

当日は、常勤の職員以外の非常勤講師、スクールカウンセラー、特別支援教育支援員、不登校支援員、アシスト業務、購買職員等の会計年度職員や嘱託職員にも参加してもらい、総勢70名を越える職員で行った。2019年度に使用したエクササイズは「芳泉探偵物語」で、まず参加者の中で相手を探して握手を交わした後、ワークシートに記載している質問内容（例：私の趣味は盆栽である等）を相手に尋ね、相手が「はい」と答えた項目欄に互いの名前をフルネームで記入していくもので、他者理解を促進するものである。

2020年度は、「インパルス」というエクササイズを同様の目的で実施した。まず、自由に相手を決めてハイタッチを交わし、互いの体温を感じ取って、全参加者で体温の高い順に並んで円を作る（写真1）。その後全員で手をつなぎ、ファシリテーターが定めた人から片方の握力を強め、その力を次の人、次の人へと伝えていくというものであり、一体感を体感できるものである。



【写真1】

構成的グループエンカウンターとは、集中的なグループ体験で、「ふれあい」と「自己発見」を通して、参加者の行動変容をねらいとする手法であるが、ここでは、「ふれあい」に重心を置き、職員の心理的距離を縮めることを目的に実施した。最初は突然の提案にやや躊躇していた様子も見られたが、徐々に和やかな雰囲気になり、予定時間を超える盛り上がりを見せた。中には新学期の学級開きで、同様のエクササイズを実践する教員もいた。

(2) マネジメントシートの活用（関連：図3B・C）

マネジメントシートは、各分掌で学校経営目標に沿った①重点目標を決め、②取組内容、③目標指標、④成果と課題、⑤次年度にむけてについて記録を残す

ものである。

分掌のキャップの教員が他の分掌担当者との協議を通して本シートを作成する。このことにより、キャップの教員が分掌の仕事を一人で抱え込むことなく、担当者同士のコミュニケーションを促進するとともに、各自の役割をしっかりと自覚することで、各分掌の活性化をねらうものである。2018年度に試行的に導入し、2019年度から本格的に実施している。そのため、年度初めと年度終わりには、研修時間を確保し、各分掌で活動内容について協議を行っている。この実践により、学年の垣根を超えて同一分掌を担当する教職員が密にコミュニケーションを図り、学校経営目標達成に向けたベクトルが一層大きくなった。また、シートの終わりには、当該年度の反省点をまとめるため、次年度への引継ぎ作業が円滑に行え、年々取組がバージョンアップすることが期待できる。

(3) 職員版「ポジティブ日記」の導入（関連：図3C・E）

教職員が共有できる「ポジティブ日記」（図4）を作成した。

月	日	曜	生徒	職員	学年	組	内容
4	5	水		○			○○先生…
4	12	水	○		1	B	○○さん…

【図4】

「ポジティブ日記」とは、いい行動・実践を見かけたら日記に綴るといものである。職員用共有フォルダにカレンダー風に作成した入力フォーマットを準備し、生徒や教職員がいいことをしている場面を見つけたら、気づいた教職員がその内容を入力して、その内容を相互にPC上で閲覧できるようにしたものである。

この取組のねらいは、自分に対してはもちろんのこと、周りの人たちをポジティブに捉えることのできる考え方や態度を育てることにある。しかし、この取組は教職員個々の時間的・精神的余裕がなければできないものであり、会議等の機会をとらえて日記の内容を紹介するなどして、この取組の定着を図っている。日記の内容を共有することで、教職員相互の承認・賞賛につながり、生徒観察においてもポジティブに捉える習慣が身に付き、良質なコミュニケーションの増加や互いを肯定する態度の育成につながると考えている。

(4) 定例ケース会議の実施（関連：図3B・C・D・E）

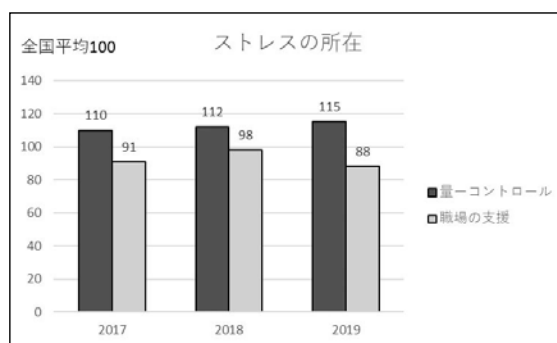
本校では組織的な運営を行うために、毎週時間割の中に組み込んで継続的に行っているものとして、「主任者会」、「生徒指導係会」、「教育相談係会」がある。これらの会議は、校内の情報共有を図り円滑な学校運営と課題解決のために行っているものであるが、「教育相談係会」では必要に応じてケース会議を行っている。

会議では、不登校や問題行動等の課題を抱える生徒を取り上げ、「インシデントプロセス法」の手法を用いて、当該生徒の支援策を担当者と共有し、それぞれの学年に反映させるようにしている。インシデントプロセス法は、参加者全員による体験学習型の事例研究方法である。そして教師一人一人が個々に取り組んでいたものが学校という一つの組織として取り組めるようになり、教師集団が一つのまとまりとして一貫性を保持しつつ、問題解決を促す指導体制が築けるといった効果が期待できるものである。

参加者には、「具体的な目標ができて取り組みやすくなった。」「安心して生徒にかかわれるようになった。」等の声が聞かれるようになった。

5 実践の結果

(1) 岡山市教育委員会によるストレスチェック結果



【図5】

図5に示すグラフは、仕事量と裁量権「量-コントロール」と職場の支援の届きやすさを表しているものである。数値はそれぞれ全国平均を100とし、それよりも高ければ仕事量が多く裁量権が低いことになり、職場の支援が届きにくくなっていることになる。したがって数値が高いほどメンタルヘルス不調に陥りやすく、低くければ不調になりにくいと考えられる。調査結果から仕事の量的なものは全国平均を上回っている。その要因として生徒指導上の課題の増加が考えられるが、反面職場支援が充実しているため、総合的にはメンタルヘルス不調のリスクが低いという結果であった。

(2) 岡山市教育委員会による教育総合調査結果

肯定的な回答の割合 (%)

質問文(対教職員)	2017	2018	2019
教職員は教育課題の解決に向けて連携・協力して組織的に取り組んでいる	95.6	81.7	90.8

教職員が連携協力して組織的に取り組んでいると感じていると肯定的な回答をしている割合が2018年度から2019年度にかけて約10ポイント上昇し、市内の平均値を4.7ポイント上回る結果となり、教職員の意識の変化が見られた。

(3) 状況の変化

年度途中において、特別休暇（産休・育休・病気等）を取得する教員とその代員教員が交代する際に、学年集会等を行って、教員と生徒による歓送迎会が行われるようになった。このことは教職員の同僚性を育むことはもちろんのこと、生徒の情操教育につながることも、生徒達にとって教員集団のまとまりを感じる場面となり、安心感を抱くことにもつながる。

また、2020年度には放課後を利用した若手教員を中心とした自主的な学習会「芳泉カフェ」が始まり、互いの実践を交流することでの学びの場ができるなど、想定以上の成果が表れ始める結果となった。

6 総合考察

多忙化する教育現場では、時間的・精神的余裕のなさから職場の風通しが悪くなり、OJT機能が低下しかねない。本研究では実践2年目でようやく同僚性の高まりを実感できるようになってきた。そして同僚性が高まると自然と教員の学ぶ意欲も高まってくることも確認できた。

各実践は、同僚性を高める他、教員の指導力向上にも貢献するところが大きな特徴である。各教員が、それぞれの実践をより深く理解し、日々の生徒指導や学習指導に生かしてくれることを期待している。

また、本校のように学校規模が大きくなると、個々の裁量権が少なくなりやすいが、逆に多くの教職員が持ち合わせているリソース（資源）は増える。学び合える教職員集団は、このリソースを有効に活用できるが、そのためには同僚性の形成が不可欠である。今後も引き続き人材育成を念頭においた実践を重ね、学校経営活性化を図っていきたい。



「学習するチーム」の形成と成長に関する考察

— 「学習する組織」の理論に依拠した自発的職能向上チーム形成の実践モデル—

岡山市立福浜中学校 校長 藤 枝 茂 雄

キーワード：センゲ 学習する組織 レッスンスタディ レバレッジ

1 はじめに — 研究の目的, 内容, 方法

組織力の向上に内発的組織改善の力は欠かせないが、本校では、平成31年度から令和2年度にかけて、中堅、若手教員からなる自発的な業務改善グループと言える集団が成立している。この集団は、研究主任をコアとして複数の若手教員等からなる学びの集合体と呼べるものである。これは、同僚性を基盤とする内発的な動きであり、行政サイドから課された研修とは明確に区別される意味において「レッスン・スタディ」(=同僚性を基盤とする自発的職能向上行動)として定義づけられるものであった。

本研究の目的は、このレッスン・スタディ・グループの成立と成長の過程の観察を通じて、その構成要素を可視化し、教育現場での学校組織マネジメントに寄与しようとするものである。

研究の内容・方法については、約一年半にわたる本校のレッスン・スタディ・グループのメンバーの動きを観察法や面接法により分析し、センゲの「学習する組織」の理論に依拠しながら、その成立、及び成長の要件を実践モデルとして可視化する。

上記レッスン・スタディ・グループへの分析的アプローチを行うに当たっては、一つの工夫を取り入れることとした。すなわち、センゲの理論は、実際の組織に成立した事例、いわば出来上がった条件をもとに構築されているため、「学習する組織」の初期段階での小さなグループへのアプローチの具体は示されていない。そのため、本研究では「学習する組織」の萌芽状態としての「学習するチーム」(前述の自発的なレッスン・スタディ・グループが該当する。)の存在を仮定的に位置付けることとし、その分析をセンゲの理論に依拠しながら行う方法をとることとした。本研究の研究仮説は図表1の通りである。

研究仮説
センゲのいう「学習する組織」の萌芽状態として、「学習するチーム」の存在を仮定的に位置付けて観察・分析することで、学校内の自発的職能向上グループの形成・成長過程を実践モデルとして可視化できるのではないか。

図表1 本研究の「研究仮説」

2 「学習する組織」の理論

センゲによる学習する組織の構造は、デミングの「チームの中核的な学習能力」の構造をベースに持つ。デミングは、チームの中核的な学習能力は、「複雑性の理解」「内省的な会話の展開」「志の育成」の3つの要素によって支えられるべきであるとした。複雑性の理解は、直面する問題を目先の事象だけから捉えるのではなく、関連性をもってつながる同一パターンのサイクルとして捉えることであり、その見方・考え方を「システム思考」とした。内省的な会話の展開とは、因習や先入観からなるメンタルモデル(内面の世界観)の自己更新を含む対等な立場での自由な議論の保障、志の育成とは、真の意味での職業への熟達と組織に共通する使命感や基本原理を追求する姿勢を指している。

センゲは、デミングの理論を発展させ、学習する組織を「自らの最高の志を実現する能力を継続的に高めることができる組織」*1と定義した。そして、学習する組織に不可欠な要素として次の5つを提示した。

要素①：システム思考

パターンの全体を明らかにして、それを効果的に変える方法を見つけるための概念的枠組み。

要素②：自己マスタリー

継続的に自らが個人のビジョンを明確にし、それを深めること。

要素③：メンタルモデル

人がどのように世界を理解し、どのように行動するかに影響を及ぼす深く染みこんだ前提としての一般概念。組織としての学習とは、内省的な会話により、共有されるメンタルモデルを変えるプロセス。

要素④：共有ビジョン

組織全体で深く共有されるようになる目標や価値観


や使命。「そういわれるからする」ではなく、「そうしたいと思う行動」を引き起こす力の源泉となるもの。

要素⑤：チーム学習

チームのメンバーが前提を保留して本当の意味でダイアログ（対話）を通じて「ともに考える」能力。チームが学習できなければ組織は学習し得ない。

3 本校における「学習するチーム」形成の状況

本論の考察の中心となる本校における学習するチーム形成の観察記録を平成31年度から令和2年度上半期までの時系列で表したものが次の図表2である。

No.	学習するチームの自発的な職能向上活動
①	平成31年10月・11月、研究主任を含む教員5名が、授業改善活動の一環として岡山大学清田教授のもとを訪問。助言を受ける。(レッスン・スタディの芽生え)
②	令和2年4月～5月、研究主任を含む15名からなる自主的な学習するチームが形成され、岡山大学で清田教授、稲田教授を交えた自発的学習会を開く。(レッスン・スタディの発展。4月～6月までの間に4度)
③	5月 総合的な学習の国際交流単元を担当する若手教員の授業計画案を教員グループで協議する姿がよく見られるようになる。
④	<p>コロナ対策にかかる臨時休業中には、スカイプによる国際交流・学力向上推進の自発的チーム会議を在宅勤務の清田教授を交えて実施。(4/23, 5/7, 5/14)</p>  <p>清田教授との自発的遠隔会議の様子 R2.4.23</p>
⑤	転任してきた教員を中心に、新たなレッスン・スタディ・グループができ、食育SATシステムにかわるバーコードを活用した自作食材カードによる食育授業のための準備が始まる。
⑥	台湾交流校への国際交流学習のためのアンケートを考える授業計画を作成する担当教員を支援するために、学習するチームのメンバーが、岡山大学大学院の留学生が受講する演習を聴講。

図表2 学習するチームの自発的な職能向上行動

このような学習するチームの一員となった教員から新規に提案された内容（＝学習するチームの成果物）は、図表3に示したように様々な外部からの知見が取り入れられた斬新で非常に質の高いものであった。

	所掌分掌	新規に提案された計画（成果物）
教員	教員研修	「生徒の学びを見取る力」を、異教科・異校種間の「共通言語」として用いた教科横断的な学びに関する校内研修計画。非言語的な要素に焦点を当てて、斬新な発想で、生徒に対する教員のアセスメント力の向上と教員間の相互作用を促すもの。
教員	国際交流 (総合)	台湾からの交流訪問生徒向けの岡山紹介ガイドづくりを目指した国際理解学習単元計画。岡山大学の中国語圏出身留学生の協力で作成した動画を教材として、アンケート作成前の自他理解力を高める活動（非言語で相手の伝えたいことを感じ取る演習等）を組み込んだもの。
教員	食育	栄養情報を入力した自作のバーコードを活用した献立作成演習の授業計画。高価な食育SATシステムを使うことなく、自由な献立に対する栄養バランス評価の学習可能性を既存の食育SATシステム以上に拡大できるもの。

図表3 「学習するチーム」を構成する教員からの新規提案

4 「学習するチーム」の成長

(1) 本校における「学習するチーム」の発達段階

平成31年度から令和2年度にかけての約一年半の期間で観察された学習するチームの発達段階は、次の4段階で表すことができる。

- ① 学びの意欲のある教員が、個々に活動している。チーム化に至っていない。
- ② 学習するチームの母胎である「学習する教師の集合体」が形成される。
- ③ 新たな「学習する教師の集合体」が生まれたり、統合・再構成されたりすることにより、核となる教員を持つ「学習するチーム」が成立する。
- ④ 「学習するチーム」の影響を受けながら、職場全体が学習する組織のスパイラルに入っていく。

(2) 「学習するチーム」構成教員の個の変容段階

学習するチームを構成する教員には、センゲの示した学習する組織の5つの要素に関して、どのような変化が起きていたのだろうか。このことを調べるために、センゲの理論をもとに教員のメンタルモデルのルーブリックを作成した。(図表4参照)

第四段階	自分の職能成長の喜びと子どもたちの成長の喜びが一致し、個人のビジョンの実現のために「そうしたいから行動する」という自己内の動機付けが成立している。
第三段階	モデルとなる教員の行動を見たり、彼らと対話（ダイアログ）を行うことで、既存の教師観への疑問と自己更新の必要性を内発的に認識するようになっていく。

第二段階	校長の学校経営ビジョンに対して、「期待されているものを達成しよう。」という外発的な積極性による職務達成意識が見られる。
第一段階	教員間のつながりが希薄で、自分のことは自分でこなせばなんとかなるという意識をもつ教員集団の一員の状態にある。

図表4 教員のメンタルモデル・ルーブリック

その後、学習するチームの主たるメンバーである教員と面接を行い、図表4に表した教員のメンタルモデル・ルーブリックを示しながら、チームとしての活動に参加する前と参加した後のメンタルモデルの変容を聞き取ってグラフに表した。(図表5参照)

このデータからは、それぞれの教員が、学習するチームの一員として活動することで、自らのメンタルモデルの段階を外発的な動機付けによる個業的な職務

第四段階		◎		◎	◎		
第三段階	◎	●	◎	◎	◎	◎	◎
第二段階			◎	●	●	●	●
第一段階	●		●				
メンタルモデルの段階	教員A	教員B	教員C	教員D	教員E	教員F	教員G

●：学習するチームによる活動前 ◎：同活動後

遂行レベル（第一段階～第二段階）から、図表5「学習するチーム」参加前と参加後のメンタルモデルの変化（各段階の定義は図表4による。）対話による内発的自己更新による協働的な業務遂行レベル（第三段階～第四段階）に変容していることがわかる。

また、面談での興味深い内容として、「メンタルモデルの自己認識が第三段階に到達する頃には、自分の理想とする教師モデルの存在が強く意識されるようになっていないか。」という意見も聞かれた。

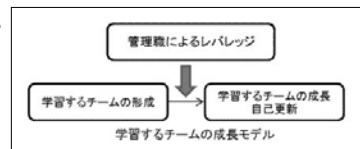
5 管理職によるレバレッジ

セングは、組織の成長について、システム思考の見地から「小さなものを絞った行動を正しい場所で行えば、持続的で大きな改善を生み出すこともあり得る」とし、そうした行動をレバレッジと呼んだ。

レバレッジについて興味深いことは、二者択一の結果を求めるものではなく、一方の目標に主眼を置きながらも、もう一方の目標を持つ意志があれば、長期的なシステム思考のサイクルによって、両方の目標を持つことを可能とするということである。

学習するチームの成長が、学校組織マネジメントの枠組みの中で有効に機能するためには、チームの成長のための図表6に示したような管理職によるレバレッ

ジ行動が必要になる。



図表6 学習するチームの成長モデル

(1) 管理職としてのマネジメントからの支援行動

学習するチームの萌芽期において、管理職としてのマネジメントの立場から以下のようなアクションを行った。

- ① 理論と実践の往還が円滑に進み、中学校と大学双方に有意義な連携体制が構築できることを目的として、市教委に対して、本校研究主任の大学院指導教員が岡山市教委の学力向上事業に携わる大学教員として登録されるための人材情報の提供を行った。
- ② 学力向上対策という校務分掌を新設したり、総合的な学習をはじめとする重点的校務分掌を校務分掌表に位置づけ、期待される実現状況を示した。
- ③ 総合的な学習の時間（以下、「総合」と記す。）の抜本的な改善を図るため、「総合」の単元構成の提示と全学年共通の単元「岡山探究」の新設、教科横断的な学びにつながるオリジナルの「岡山探究教材」の作成・学年への提供などを行った。
- ④ 校内研修に保護者を参加した授業改善の校内研修の構想を最終面談で聞き、令和2年度からPTAに働きかけて「授業改善協力者会議」の立ち上げの同意を得た。
- ⑤ 日本教育公務員弘済会岡山支部が公募する学校研究助成、教育文化事業助成の申請等により、学習するチームを資金面でも支援できる体制を確保した。

(2) 関係教員が感じた管理職のレバレッジ

学習するチームとともに成長した教員が管理職のどのような行動をレバレッジと認識していたかについては、令和2年5月に行ったインタビューの内容（一部要約）から考えてみたい。(図表7参照)

① 自分たちの実践の意味付けや価値付けについての共感と支援がありがたかった。それによって学校のマネジメントにベクトルを合わせた実践への意欲が湧く。「一生懸命の大人の中で育っていく子ども」という自分の描く学校の姿に近づけると思う。

② 分掌については、方向性は明確に示されたが、内容についてはそれぞれの教員の裁量が大きく認められた。6月の職員会議まで今年度の分掌における正式提案が全員に猶予されたことも取組をじっくりと考えることに繋がった。「やらされる」ではなく、「自分がしたいから行う」形で、教員の「学びに向かう力」が出てきたように思う。

③ 生徒の学校での学びと地域での経験が繋がるような朝読書自作教材(H31年度21回実施)などを管理職から提供してもらい、生徒にも教員にも教科横断型の学びに関する気づき作り出されたと思う。

図表7 学習するチーム構成教員が感じた管理職のレバレッジ

この記録からは、校長の具体的な行動の一つ一つよりも、教員を信頼した共感的・支持的な行動から受ける精神的な要素をレバレッジとして受け止めていることが分かる。

6 「学習するチーム」の形成に必要な要素と実践モデル

これまでの考察から、本校でのレッスン・スタディの成立を可能にした学習するチームの形成・成長に必要な要素をまとめてみたい。

① 「社会関係資本」として機能する外部資源へのアクセス

研究主任を核とする学習するチームの成立には、本校の場合、研究主任と連合大学院との関係が大きい。つまり、外部の教育資源へのアクセスが、本校の志ある若手教員たちの社会関係資本として機能した。大学にかかわらず、「システム思考」や「メンタルモデル」の自己更新に向けた相互作用を促す外部資源へのアクセスは重要なポイントとなる。

② 自らの熟達度への向上心と、職業への熟達を生きる価値とするスピリットの共有

教員たちが潜在的に持ち合わせている職業的熟達(自己マスタリー)への志が、レッスン・スタディを通じて喚起された。そこでは、目先の指導法ではなく、「教育において私たちはどうなることが幸福なのか」という内省的な問いかけが校内研修の冒頭にも位置付けられていた。こうした、内面からの指導観・教育観の更新をもとにした教職への熟達を生きる価値とするスピリットが共有された。

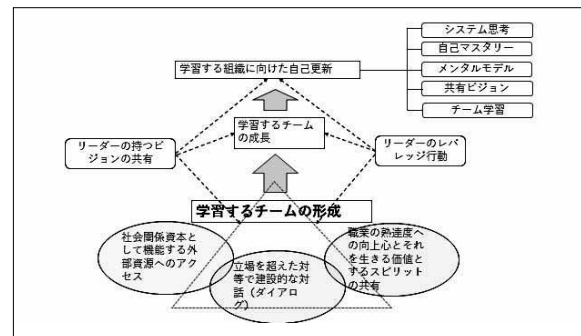
③ 立場や主張の前提を排除した対等で建設的な対話(ダイアログ)

彼らのレッスン・スタディでは、立場を超えた建設的な対話が常に行われていた。研究主任と同じ立ち位置で、スカイプ通信で指導教員である清田教授と繋がり指導計画原案をグループで協議したこともあった。そこでは、対等で建設的な対話(=ダイアログ)がチーム・コミュニケーションのベースとなっていた。

④ リーダーの示す納得できるビジョンの共有と、共感的・支持的なレバレッジ

チーム学習としてのレッスン・スタディは、管理職によるレバレッジにより、学校組織マネジメントとの相互作用を強めることができた。今回は、「総合的な学習の時間」の抜本的な改善に向けた管理職のビジョンの明示と教育課程改善にかかる具体的なマネジメント行動が、学習するチームの成長スパイラルとうまく相互作用することができた。

本校の実践を踏まえて導いた学習するチームの形成に必要な①～④の4つの要素間の関係を実践モデルとして表したものが図表8である。このモデルは、外部資源のアクセス、教師自らの向上心、対等な対話を保障する同僚性が重なり合ったところに学習するチームが形成され、そのチームの成長は、管理職のレバレッジ行動とビジョンの共有のための行動によって促されるという本論の結論を総括するものである。



図表8 「学習するチーム」の形成と成長の実践モデル

7 おわりに

本研究の結論として提示した実践モデルは、各学校の組織の中に潜在的に存在している「学習するチーム」の萌芽状態を見いだす視点として役立つものと考えている。

学習するチームを支える4つの要素の現れ方には各学校の個性が反映される。それを管理職が確実に捉え、その成長を促す学校組織マネジメントを行うことにより、主体的なレッスン・スタディを実現する学習するチームのさらなる成長、及び「学習する組織」へと発展させていくことが重要であると考えられる。

【参考・引用文献】

・ピーター・M・センゲ著 枝廣淳子他訳「学習する組織」英治出版 2016年

* 1 同上書39ページ



「共通言語」としての媒体を取り入れた 教員研修と「総合」の指導に関する考察

—異教科間，異校種間，異国間交流の障壁へのアプローチ—

岡山市立福浜中学校 研修・総合推進グループ 教諭 松浦 藍
キーワード：校内研修 国際交流 SEL ANCS

1 問題の所在と研究の目的

中学校区の公立学校園が連携して同時にコミュニティ・スクールの指定を受ける岡山市の「地域協働学校」が，昨年度，市内すべての中学校区で整備された。それによって中学校区内の公立学校園の教員が相互に公開授業を参観したり，その後の研究協議も合同で行ったりする機会が一層増えてきた。

しかしながら，小中学校や幼稚園の教員が合同で研究協議を行う場や，同一学校内で専門教科の異なる教員が研究協議を行う場においては，校種や教科の違いが相互交流の障壁となる状況は依然として存在している。また，国際交流の場でも，言語の問題が同様に障壁として存在する。そのため，この「障壁問題」に対する有効なアプローチを模索することは，教育現場の大きな課題の一つであるといえる。

本校研究グループは，相互に交流を図ろうとする二者の間に「共通言語的な媒体」を介在させることにより，この障壁を緩和することができるのではないかと考え，研究仮説を次のように設定した。

研究仮説：

交流しようとするそれぞれの立場のものをつなぐ「共通言語的な媒体」をツールとして介在させることで，異なる二者を隔てる「障壁」が緩和され，従来の交流とは異なる効用感を対象者（参加者）にもたらすことができるのではないかと。

2 研究の内容・方法

研究の内容は，従来の活動に「共通言語としての役割を果たす媒体」としてのツールを加えることにより，障壁を緩和する効果を考察するというものである。

そのための方法であるが，まず，「障壁」が存在する以下の3つの「場面」に焦点を定める。

- ①異なる校種の教員等が集まる公開授業及び研究協議
- ②異なる教科専門性を持つ教員が集まる校内研修
- ③外国の生徒（学生）との国際交流活動

そして，それぞれの場面における活動に対して学術的な知見をもとに本校で作成した「共通言語としての役割を果たす媒体」を組み込んだ取組を行う。最後に，その取組によってどのような効果が得られたかについて，生徒の活動の状況や指導に当たった教員の評価を

もとに取組の有効性を考察するというものである。

実践的アプローチの対象とした3つの場面と「共通言語的な媒体」，及びそれを理論的に支える学術的知見（理論）は，次の表のように整理することができる。

障壁へのアプローチの場面	障壁へのアプローチの方法・ツール (共通言語的な媒体)	根拠理論
①教員全員を対象とした校内研修	協働のための共感性の重要性への気づきをテーマとした演習テーマの設定	ANCS
②校区全体の教員を対象とした公開授業とその後の研究協議	参観・協議の主眼を，「子どもたちが獲得した力を見取ること」に設定	Habits of Mind
③中国語を母語とする外国人留学生との国際交流	絵柄と色による非言語的自分史の相互交流による他者の思いを理解するプロセスの設定 相手の表情など非言語的情報から推察した結果と実際を比較・省察する演習	ANCS SEL

ANCS：創造性が社会と出会う美術教育。学習者の共感性の幅を広げ遠くにある価値に気付かせる教育モデル
SEL：自尊感情，対人関係能力の育成をめざす教育アプローチ (Social Emotional Learning)
The Habits of Mind：答えが分からない状況で賢明に行動するための16の思考習慣。成功した人に備わっているとされる非認知力（＝学力として測定されていない力）

障壁へのアプローチの方法（ツール）は，後に述べるSEL (Social Emotional Learning) やANCS (Art Education Nurturing Creativity through Encounters with Society), The Habits of Mindなどの学術的知見をもとに本校で考案したものである。

3 「共通言語としての媒体」を支える学術的知見

(1) Social Emotional Learning (SEL：自尊感情，対人関係能力の育成を目的とした教育アプローチ)

日本SEL推進協会によると，SELとは，「自らの『頭で考えていること』，『気持ちで感じていること』，『からだ』の状況を理解しマネジメントできることが，他者の『頭』，『気持ち』，『からだ』の状態を理解し共感する力を持つことになり，相手との良好な関係を築くことにつながる」という考え方を基盤にして，自己理解，他者理解を体現するためのスキルを育む教育アプローチと説明されている。別の表現を用いれば，「自尊感情，対人関係能力の育成を目的とした教育アプローチ」といえる。本校の実践では，上記表中①と③の活動の前半部分にSELの理念を取り入れている。

(2) The Habits of Mind (答えが分からない状況で賢明に行動するための16の思考習慣)

アーサー・コスタ博士は，「共感して聞く習慣」，「五

感を使う習慣」など16の非認知能力（＝学力としては測定されない能力や習慣）が成功した人には共通して備わっているとされた。その研究をもとにコスタ博士が開発したものがHabits of Mind（答えが分からない状況で賢明に行動するための16の思考習慣）である。これは、「成功するために必要な学力以外の望ましい習慣・心の能力」ということもできる。

本校では、コスタ博士が提示した16の非認知能力の中から、教育活動の目的に適合したものを選択して公開授業で配付する「生徒の学びを教師が見取る指標」の中に組み込むこととした。さらに、異教科や異校種の教員による合同研修や公開授業・研究協議の場においても、「獲得されている非認知能力」の見取りをテーマとした協議を取り入れることで、「障壁を緩和する媒体」として機能させようと考えた。

(3) ANCS（アックス）：Art Education Nurturing Creativity through Encounters with Society（創造性が社会と出会う美術教育）

ANCSとは、岡山大学の清田教授らが提唱している学習モデルで、「やってみたい」、「やりとげたい」という子どもの夢や願いを「創造力」を用いて叶えたとき、その子どもの中にある社会が広がっていくという考え方を基盤としている。

ANCSの中には、「4つの育み」として「自己の深まり」「共感性」「深く見つめる」「社会への広まり」という概念が含まれている。そこでは、美術による学びを通じて学習者が共感性の幅を広げ、自分よりも遠くにある価値に気付くことが目指されている。

本校では、国際交流における言語の壁を緩和するアプローチの中に、共感性や自分とは異なる価値への気付きを大切にするANCSの理念を取り入れた。

4 「障壁」へのアプローチを意識した取組の実践と評価

(1) 生徒が獲得した力を見取る中学校区公開授業、及び研究協議

① 公開授業の実際

令和元年10月29日に校区の公立保育園、幼稚園、小学校の教員を対象に行った「総合」の公開授業では、「他の班が考えた星の発表を聞き、いろいろな幸せについて考えよう」という「めあて」のもとで、「惑星浜っ子移住計画－よりよい世界を目指して－」の学習を実施した。この学習は、世界中から無作為に選ばれた1000人が5年間地球外の惑星に住むための移住計画

を作成するという仮定の下で、多様性を持つ人々が新しいコミュニティを形成して幸せに住むことができる条件を対話的に話し合うというものである。

研究主任のコーディネートにより、各教科担当の教員は、生徒がこの時間に教科による学びの成果を統合できるように、あらかじめ逆算して、仮想コミュニティを形成する話し合いのために必要な学習内容を自らの授業の中に取り入れた。

公開授業参観者には、研究協議のための参観シートを配付した。参観シートは、本研究を反映し、授業の中での生徒の主体的な学び、対話的な学び、深い学びに該当する姿を見取りメモするようにレイアウトした。さらに、公開授業を通して生徒に培われた力について、各参観者が生徒を見取って記述する枠も設けた。

② 公開授業の評価

公開授業はこれまでとは全く異なる新しい発想で計画したため、開会に当たっては、授業公開の狙いが「参観者が生徒の活動の中から学びに向かう要素を見極めること」を十分に確認した。その結果、授業後の研究協議では、参加者の幼稚園長から「これまでに参加した小学校、中学校の公開授業は、専門外の校種ということで意見が言いにくかったが、今日の協議では自然な形で自分の意見を言うことができた。」という感想も出された。このことから、授業の進め方や発問の仕方などに焦点を当ててきた従来の公開授業とは一線を画したこの公開授業の狙いは達成できたといえる。

(2) 「協働するための共感性への気付き」に重点を置いた校内研修

① 校内研修の実際

令和2年6月24日に実施した校内研修は、従来の教科中心の形を改め「協働するための共感性への気付き」を主眼に置くこととした。演習では「利き腕が使えない人」「座ったまま立つことができない人」「言葉をしゃべれない人」「アイマスクをした人」からなる4人グループを複数編成し、新聞紙だけを自由に用いて最も高い構造物を作る活動を行った。活動の終了後には、それぞれのハンディキャップを設定された人の活動中の心情を振り返りながら、自分以外の人からの自分へのコミュニケーション（呼びかけや作業依頼等）の意味について考え、意見交換を行った。

この演習を支えた学術的知見は、ANCSとSELである。ANCSについては「共感性を育む」という目的と結びついており、SELについては、「自分の身体の状

態を理解した上で他人の身体の状態を理解し共感する力を養う」ということと関連付けている。

② 校内研修の評価

新聞紙を用いた高層構造物の作成は、どの教員も楽しみながら取り組むことができたが、より重要なのは、その振り返りであった。省察を目的とした振り返りでは、次のような意見が出された。

教員A：自分のハンディキャップによるストレスやジレンマに意識が強く向いたときには、他人のハンディキャップに対する配慮や意識が薄らいでいたことに気がついた。

この省察の対象となった場面は、アイマスクをした参加者Aに、参加者Bが「新聞紙を丸めてほしい」と依頼した場面を、アイマスクのAは「Bが自分に精神的なやりがいを与えてくれるための気休め的な心遣い」と認識した。しかし、実際は、Bは「利き腕が使えない」人だったのである。この研修は、「ハンディ・キャップがあっても、共感的にみんながそれぞれのできることを理解し、補完し合えば全体の目的は達成できる」という共感と協働の教育的な重要性を再認識するための非常によい機会となった。

(3) 相手の伝えたいことを見取る活動を取り入れた国際交流活動（総合的な学習の時間）

① 国際交流活動の実際

第三学年の総合単元「国際理解・国際交流」については、新型コロナウイルスにより台湾の学校との交流が中止となったため、一学期の交流活動は、岡山大学の中国語圏からの留学生を対象に行うこととした。このとき学年団では、「共通言語的な媒体」を意識しながら、次のような活動の流れを作成した。

活動の流れ →

	①受容	②共有	③思考表現	④伝える	省察する
二者間の障壁を緩和するアプローチを取り入れた国際交流活動	非言語による「自分史づくり」を行い、学級内交流により自己理解・他者理解を推進する。	留学生による非日本語のメッセージや動画を視聴し、相手が発信したもの自分の捉えの一致やズレについて話し合い、共感力を高める。	①②をもとにクラスで留学生のメッセージに答えるメッセージの形を考える。	留学生への返礼メッセージ（作品等）を作成し届ける。	①～④の活動について省察することで、国際交流に関するさらなる探究の出发点とする。

この活動に取り入れた「共通言語的な媒体・ツール」は次のように説明できる。

(ア) ANCSの知見を取り入れた自己理解と他者理解の促進プロセスを組み込んだ。

この活動計画には、ANCSの理念を受けて、「①受容（価値観の把握）」「②共有（価値観の共有）」「③思

考・表現（価値観のまとめ）」「④伝える（受容した価値観の発信）」という「価値観をベースにした学びのプロセス」を組み込んだ。

学びのプロセスの最初の段階では、交流相手の「価値観の把握」のスキルアップのために、ANCSの学術的知見を取り入れて自己理解を目的とした「自分史づくり」を行った。生徒は、まず、非言語的に絵柄と色彩を用いて自分史を作成した。次に、自らの作品を周りの生徒と相互に交換して、自分以外の生徒が自分史に埋め込み伝えようとした思いを想像し伝え合った。この活動によって、生徒は自分と他者の相違点や共通点について考え、省察を加えることで、自己理解・他者理解の力を高めていった。

(イ) 表情やゼスチャーなどから相手の伝えたいことを見取るSELの知見を含めた演習を取り入れた。

学年団では、岡山大学大学院に中国語圏の国から留学している7名の学生の協力を得て、日本語をまったく使わずに中国語とジェスチャーだけで留学生自らが本校の生徒に伝えたいことを表現する動画を作成し教材化した。生徒は、その動画を教室で視聴し、留学生の細かな表情や口調、さらには身振り手振りの中に手掛かりを見い出しながら、留学生が自分たちに何を伝えたかったのかを話し合った。

これらの活動の後に、生徒には、動画の中で流れた中国語を日本語に翻訳したプリントを配付した。それにより、自分たちが受け止めたイメージとの「ズレ」の部分について確認し合うことで、自らの他者理解に関する省察を行った。（以下に、省察の一部を示す。）

生徒A：動画の中で、微笑むような表情が確認できたので、人当たりのよい優しい人だと思った。実際は、優しいだけでなく、故郷への愛情がとても深い人だと分かった。よく観察することで相手を理解するためのたくさんのヒントがあることが分かった。

自分史を用いた自己理解・他者理解の活動を経て中国語圏の留学生のメッセージを読み取り共感力を高める活動には、どの生徒も興味をもって熱心に取り組んだ。動画が流れ始めるとすぐに真剣に非言語的な部分から相手のメッセージを読み取るようとしていた。省察が終わると、それぞれの生徒が抱いていた「未知の外国人留学生」というネガティブなイメージがずいぶん払拭されていた。そして、留学生に返信するメッセージやオリジナル作品の作成に際しては、画面の向こうから生徒に語りかけてくれた留学生の姿をイメージしながら生徒全員が一生懸命に取り組んだ。作品の中に

は、生徒が独自に調べた内容を独創的にまとめた岡山紹介の「ミニアルバム」なども含まれていた。



留学生に向けて生徒が作成した岡山紹介のミニアルバム（3年D組）

② 国際交流活動の評価

ANCSやSELの要素を取り入れた活動を組み込むことは、一見すると「回り道」のように感じるが、これらの活動があったことで、日本人の生徒と外国人留学生を隔てる壁は実際にずいぶん緩和された。そして、「自分とは違う価値観を持つ人間」として相手を意識し始めた生徒の姿が見られたのである。

以下に示したものは、指導に当たった学級担任教員の授業評価である。

教員B：この活動を通して、生徒の自分の価値観の外側にある価値観を受容しようとする態度を養うことができた。これまでの生徒は、自分の価値観の範囲内で他者を認識しようとしていた。しかし、「自分史づくり」や「留学生からの動画のメッセージを読み取る」活動を通して、自分とは違う価値観を持つ人が何を考えているのか、何を伝えようとしているのかを汲み取ろうとする態度が芽生えてきた。言葉が通じない外国人に対しても、表情やしぐさなどから何を伝えようとしているのかを考える力が涵養されたと思う。

また、生徒に行ったアンケートでは、次のような結果が見られた。

「自分史」と「留学生との活動」の評価（有効回答数137）

お互いの「自分史」を比べた活動における気付きとは	
① 言葉に表れないことを汲み取る大切さ	82%
② 知らない人との交流での共感力の大切さ	44%
③ それぞれが大切にしている価値を意識することの大切さ	73%
④ 自分史の交換が交流に向かうときの壁を低くしたという実感	60%
留学生の思いを動画から非言語的に読み取る活動の評価	
⑤ 注意深い観察で多くの他者理解の情報が得られることが分かった。	75%
⑥ この活動で未知の留学生への緊張感が和らいだ。	44%
⑦ 相手も自分のことを分かってくれるという気持ちが湧いた。	54%
⑧ この活動があったことでお返しの作品作りの動機が強化された。	69%

表からは、①の「言葉に表れないことを汲み取る大切さ」や、③の「それぞれが大切にしている価値を意識することの大切さ」への気付きが高い割合となっており、意図したアプローチが生徒にとって有効だったことが分かる。また、表中⑧で約7割の生徒が、これらの活動が、留学生へのお礼の作品の動機付けにつながったと答えており、最終目的とする活動への取組意欲を向上させたことも明らかになった。

5 総合考察－成果と課題

(1) 成果

- ① 壁を緩和するための「共通言語的な媒体」を本研究で用いた3つの場面では、いずれも授業者・参加者による有効性を認める評価が得られた。
- ② 生徒が獲得した能力の見取りをテーマとした研究協議の振り返りでは、幼稚園の先生から「教科指導のHow toをテーマとしてきた従来のものよりもはるかに幼稚園からの参加者は協議に参加しやすかった。」という意見も出された。
- ③ ANCSとSELの二つの要素を媒介した校内研修、及び国際理解・国際交流活動においては、顕著に「障壁」が緩和され、優れた成果を得ることができた。特に、国際交流においては、それまでの校内研修と公開授業による教員の知見の蓄積が相乗効果となり、留学生向けに生徒が作成した作品にも、生徒の省察にも優れた実現状況が見られた。

以上のことから、「今回の研究における異質な二者を隔てる障壁へのアプローチは、非常に有効であるという示唆が得られた。」という結論に至った。

(2) 課題

取組の当初は、教員の既成観念を更新することが困難だった。本質的な部分の共通理解が十分に図れたとはいえない研修もあった。本校では、岡山大学からANCSの専門家である清田教授を招いた研修等を行うことによりそれらを補うことができたが、この点は、他校において同様の実践を行う場合には特に注意が必要である。

(3) 今後の展望

今回の実践研究を先行事例として、今後再開されるであろう台湾光復高級中学の生徒との交流に向けて準備を整え、両校生徒にとって有意義な新しい国際交流の形を探求していきたいと考えている。

<参考文献・サイト等>

- ・「SELとは」日本SEL推進協会 <https://sel-japan.org/>
- ・「子どもが夢をかなえる図工室・美術室」創造性が社会と出会う美術教育 <https://www.ancs.site/about/>



買い物の場面での英語を用いた即興的な 「やりとり」を行うパフォーマンステストの実践

—生徒が楽しみながら「何ができるようになったか」が分かる実践を目指して—
岡山市立興除中学校 教諭 阿部 聡 生

1 本研究の目的

ここでは、本研究の目的を、すべての教科指導で求められる観点からと英語の指導に求められる観点から分けて、新学習指導要領解説を引用しながら記述する。また、生徒の実情をイメージしやすくするために、1学期末に行ったアンケート調査の結果も示す。

令和3年度より中学校において新学習指導要領が施行される。学校で勤務をする一教員としては、新しくなる3観点での評価をどのように行うのか、不安感をぬぐうことが難しい。指導要領解説の総則によると、この新しい3つの観点は現行までの「生きる力」をより具体化したものであり、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を整理したものとされている。各教科等を学ぶ意義を共有しながら教育活動を行うために、すべての教科の目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性」の3つの柱に分けて整理された。また、改訂の経緯には、既存の枠組みの改善も6点示されており、その中の1つには、「何が身についたか」（学習評価の充実）が挙げられている。

筆者が担当する外国語（英語）の内容にも、様々な改訂がなされている。そのうち、本実践研究で着目したのは、「実際のコミュニケーションを行うこと」と「即興的な『やりとり』」の2点である。これは、学習指導の改訂の要旨に、「一方、授業では依然として、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が適切に行われていないことや『やり取り』・『即興性』を意識した言語活動が十分ではないこと（中略）などの課題がある。（p.6）」とあるためである。筆者の担当する学年でも、同様の課題があると感じている。

以上の内容を整理し、本実践研究の目的をまとめると、以下の2つになる。①「何が身についたか」が分かるように、新しい3つの観点で評価を行うこと。これはすべての教科指導で求められる事項である。②実際のコミュニケーションにおいて「やりとり」のテストを行うこと。これは、筆者の担当する生徒も含めた、

英語科の課題である。新しい実践を生徒はどのような力が身についたと受け止めるのか、また、どのような感想を抱くのか。本実践研究を通してわずかながらでも明らかにしたい。

筆者の担当する学年は2年生110名で、中学入学時から筆者が外国語を担当している。2年生1学期の最後に行った4件法によるアンケート調査では、「英語が好き」に肯定的な回答をした生徒は69名、「英語の授業が好き」に肯定的な回答をした生徒は78名であった。普段の授業でも、生徒の半数以上が積極的に授業を楽しんでいる様子が見て取れる。一方、「英語が得意」と回答している生徒は39名にとどまっている。新しいテストを行うと、英語を不得意と感じている生徒が不安を感じてしまうことが考えられた。そのため、英語のやり取りのテストに対して生徒がどれくらい不安を感じているかを調べたいと考えた。

2 先行研究：パフォーマンステストとルーブリック

本節では、先行研究を参考に用語の整理を行う。本実践研究を行う上で、国立教育政策研究所の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（以下「国研資料」）と今井弘之・吉田達弘編著の「中高生のための英語スピーキングテスト」を参考にした。これは前者に実際にコミュニケーションを行う、パフォーマンステストの指導例が提示され、後者に具体的な実践がなされていたためである。これらの先行事例を参考に、教材・パフォーマンステスト・ルーブリックを作成した。

テストの題材は「買い物」にした。「中高生のための英語スピーキングテスト」に、題材を選ぶ際には、中学生にとって身近なものがよいと示されていた。「買い物」は1年生の教科書にも扱われている題材であり、言語内容としても既習の表現を使用できると考えられた。

パフォーマンステストは、生徒が実際に行なった言語活動を評価するテストである。「国研資料」には、生徒2人がやり取りをする場合に限定されるものではなく、教師やALTが生徒1人とやり取りをすること

も考えられる、と示されている。今回は、はじめてのパフォーマンステストに対する不安感を軽減するために、教師と生徒一人でのやりとりによるパフォーマンステストを行った。

ループリックは、生徒のパフォーマンステストの結果を評価するために用いる基準である。「国研資料」には、生徒のパフォーマンスを新3観点で評価する方法が提示されている。それを参考に評価を行うとともに、生徒と評価基準（ループリック）を共有した。生徒と評価基準を共有することは、自分自身で成果や課題を明らかにし、次のテストに向けて目標を持つために重要であるとされている。

研究課題 ※ () 内は分析方法

英語を不得意とする生徒も楽しく、自身の成果を感じることができるテストを行うことを目指して、研究仮説を次の2つに設定した。

学習者と教員が、ループリックを共有してパフォーマンステストを行うことで、

RQ 1 やり取りのパフォーマンステストを楽しめ、不安感を減少させることができる。

(テスト前後のアンケート調査結果の比較)

RQ 2 何ができるようになったか、何が身についたか、生徒が自分自身でも理解できる。

(テストの結果と生徒の自己評価の比較)

3 授業実践の実際

3.1 調査手順

パフォーマンステストは7月初旬にクラスごとに行った。実施1週間前に、パフォーマンステストの概要を説明し、ループリックを共有した。テストの前後に、パフォーマンステストに対する期待感と不安感を尋ねるアンケート（4件法）を行った。なお、本実践は、実際にやりとりの指導を行う前段階の活動と生徒に伝え、生徒の最終的な成績には含めていない。

3.2 パフォーマンステストの内容

1人あたり3分程度のテストを作成した。内容と目的は次の表のとおりである。

あいさつ	雰囲気を和ませる
買い物	生徒が客になり、買い物をする
フォローアップ	選んだものの理由を言う

主な題材は、英語で買い物をすることである。ただし、買い物をするだけでは、英単語のみでやりとりが成立してしまうため、なぜその商品を選んだのかをフォローアップで聞くことによって、より多く英語でのやりとりができるようにした。

ロールプレイの場面は、架空のファストフード店とした。生徒は下のメニュー図（例）を見ながら、自分の頼みたいメニューを3品以上購入した。



また、ファストフード店を4種類用意し、カードにして、テストの場で選ぶようにした。これにより、少しでもテストを受ける順番による不平等さを軽減するとともに、実際の言語使用場面に近づけるように配慮した。

3.3 ループリック

ループリックは以下のように作成し、生徒と共有した。評価の観点は、現行の観点を基に記述し、生徒にとって分かりやすいようにした。

観点	関心意欲態度	表現の能力	知識理解
具体	態度・言語の適切さ	注文と根拠	文法・音韻の正確さ
A	聞き手に配慮しながら、丁寧に伝えたい内容を伝えている。(I would likeなど) ※自然に丁寧な話し方ができている。	自分の注文したい内容を、根拠をもって、単語や文を用いて伝えている。 ※インタビューで判断	自分の注文したい内容やその根拠を、正確な単語や文を用いて伝え、あう技能が身についている。
B	聞き手に配慮しながら、伝えたい内容を伝えている。 ※アイコンタクトをするメニューを指で示すなど	自分の注文したい内容を、単語や文を用いて伝えている。 ※メニューなし・英語で注文	自分の注文したい内容やその根拠を、単語や文を用いて伝え、あう技能が身についている。
C	聞き手に配慮しながら、伝えたい内容を伝えない。 ※目を合わせないなど	自分の注文したい内容を、英語で伝えない。 ※ジェスチャーやthisなど	自分の注文したい内容やその根拠を、文を用いて伝え、あう技能が身につけていない。

関心意欲態度では、やりとりの際の態度と言語の適切さを判断基準とした。具体的には、丁寧な表現やアイコンタクト、ジェスチャーなどを自然に使うことができるかを評価の基準とした。表現の能力は、タスクとなる、「3品以上の買い物ができたか」をB基準、「商品を選んだ根拠をいえたか」をA基準とした。ここでは、言語の内容面を評価していない。知識理解として、生徒の言語面を評価した。主に、単語レベルの発話な

らB、文レベルの発話ならAと設定した。

新3観点との関連について整理すると、関心意欲態度は主体的に学習に取り組む態度、表現の能力は、思考判断表現、知識理解は、知識・技能にそれぞれ対応させている。

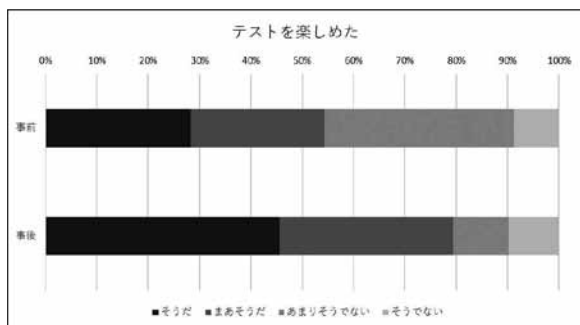
3.4 評価者

本実践の評価は、筆者とALTが行った。それぞれの評価基準に違いがないように、事前にルーブリックの共有を行うとともに、最初の10人の生徒のパフォーマンステストを一緒に評価することで、評価基準のすり合わせを行った。

4 授業実践の評価

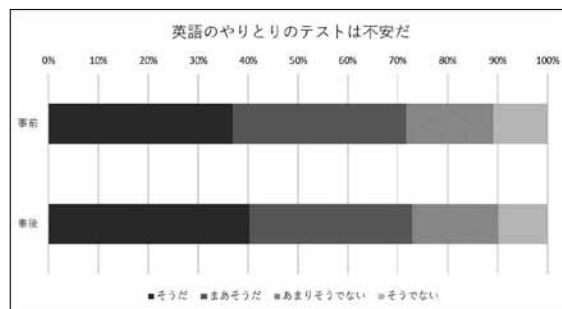
ここでは、一連のパフォーマンステストに参加し、アンケートにもれなく記述をした92名の生徒を対象に分析を行っていく。

RQ 1 やり取りのパフォーマンステストを楽しめ、不安感を減少させることができる。



テストの事前と事後に行った、「テストは楽しみ（楽しかった）か」の回答結果は上のグラフのようになっている。テスト前に比べ、テスト後のほうが英語でのやりとりのテストを楽しめたという生徒の様子が見て取れる。45名の生徒がテスト後により楽しかったと感じていた。感想にも、「楽しかった」「思ったよりできた」との記述があり、生徒の自信につながったと考えられる。

一方で、19名の生徒がテスト後に数値を下げており、テストをやってみると自身の期待よりも楽しく感じていなかった。そのような生徒の感想からは、「質問の意味が分からなかった」「英語が出てこなかった」などの記述が見られることから、自分が「できなかった」と感じたことが活動を「楽しくなかった」と感じさせた要因だと考えられる。



対して、「英語のやりとりのテストは不安か」の回答結果は上のグラフのようになっている。わずかに変動はあるものの、あまり変化が見られない。実際、42名の生徒が回答を変えておらず、一度の実践では不安感を大きく減らすことまでには至らなかったようだ。

まとめると、実際にやりとりのテストを行うことで、やりとりのテストを「楽しい」と感じる生徒を増やすことができた。対して、テストに対する不安感を大きく減らすことができなかった。「楽しい」と感じた生徒の感想を見ると、「できた」という成功体験が「楽しい」につながると推測できる。不安感を減らすためには、テストそのものの効果ではなく、テストに向けた継続的な指導が必要だと考えられる。

RQ 2 何ができるようになったか、何が身についたか、生徒が自分自身でも理解できる。

	関心意欲態度		表現の能力		知識理解	
	自己	教師	自己	教師	自己	教師
A	32	8	23	69	12	37
B	51	79	55	23	62	54
C	9	5	14	0	18	1

上の表は、観点ごとの生徒自身による自己評価と教員による評価の結果を一覧にしたものである。

丁寧表現や相手意識を扱う関心意欲態度は、生徒自身の自己評価が教員による評価に比べ、かなり甘くなっている。対して、表現の能力と知識理解は生徒の評価のほうが厳しくなっている。ルーブリックの共有方法に改善の余地があるとしても、単発ではルーブリックを共有しても、生徒が自分自身で正確な自己評価を行い、自分自身で何が身についたか把握することは、筆者の対象とする生徒にはまだ難しかったと考えられる。

生徒の感想をみると、関心意欲態度に関する内容として、「ジェスチャーやアイコンタクトをもっとしようと思った」、「相手の目を見てもっと話すようにしよ

うと思った」といった記述が見られた。「国研資料」にあるように、ループリックの共有は生徒自身が自身の課題を把握するのに一定の価値があるとされている。この点からみても、生徒が今後の英語でのやり取りの際に、非言語面への配慮や相手意識をもって取り組めるようになるのではないかと期待できる。

表現の能力と知識理解に関しては、「思ったより評価がよかった」といったような記述がほとんどであった。これは、生徒自身が「英語のテスト」としてしか本実践を捉えておらず、観点に分けて分析的に、「タスクをできたか」と「英語は文で言えたか」を判断できていないためであると考えられる。生徒の評価をより分析的にするためには、継続的な評価基準の共有や中間評価が有効のように考えられた。

以上の内容を基に、学習評価一般についても論を進めたい。今回対象とした生徒はループリックを用いた分析的な評価を参考に、自身の成果や課題を把握することまではできていないと考えられる。これは、生徒が自己評価を行えないということを示すのではなく、教科指導の評価の問題点を示しているようにも推測できる。

つまり、関心意欲態度は生徒の「やる気」を測るもので、頑張っている・やろうとしていることで高く評価されると生徒が考えているのではないだろうか。今回のテストでは、単に「やる気」ではなく、丁寧表現や相手を意識した非言語コミュニケーション（ジェスチャーやアイコンタクトなど）を自然に行えているかを評価すると伝えたものの、その内容の本質的な共有までは至っていなかったようだ。実際、生徒の感想からも、「would like toをつかったのにBだった」や「どうしたら関心意欲態度がAになるのか分からない」といった記述もみられ、非言語面や自然な言語使用が評価されているという意識が十分にあったか疑問が残った。本実践を契機に今後のやり取りにおいて、これらの点を意識しながら学習を進めるとともに、関心意欲態度の評価方法や場面に対して共通理解が深まることを期待している。

パフォーマンスとしての課題のみを評価基準とした表現の能力については、生徒の評価が厳しめであったことから、「英語で何ができたか」を評価して、言語的な内容は表現の能力は評価しないと、生徒が理解できるように、指導する余地があるように感じられた。知識理解についても同様であり、新しい3観点が導入

された際に、「何が評価されるか」を生徒と共通理解を図ることが重要であるだろう。そうすることで、生徒自身がテスト後に「何ができるようになったか」が分かり、自身の成果と課題が分かるパフォーマンステストになると考えている。

5 おわりに

本実践の成果は、来年度から実施される新評価と新領域（やりとり）に、生徒がどのように反応するかが明らかになったことにある。「できた・楽しかった」という成功体験は、生徒の今後の学習への動機づけにもつながり、更なる成長を期待できる。ただ、一度のみのテストでの評価では困難なことがらも多く、継続した指導と評価基準（ループリック）の本質の共有が重要であると考えられる。

また、本実践には、教員側として、準備・計画等を含めた実際を知る意味もがあった。教室の確保から平等性の担保、複数の教員で行う場合にはぶれのない評価基準が求められる。来年度からの英語でのやり取りの評価に際しては、校内・市内での英語科の教員の協力がより重要になるように感じられた。

筆者自身の今後の展望は、今回実践したパフォーマンステストを指導に繋げていくことが挙げられる。指導と評価の一体化も求められている新指導要領において、本実践を出発点として、やりとりに対する生徒の不安感を下げたり、生徒自身が自身の成果と課題をより正確に把握したりできるように、中間評価や継続した指導を行っていきたい。

参考文献

- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説 外国語編」
- 国立教育政策研究所（2019）「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」
- 今井弘之・吉田達弘編著（2007）「中高生のための英語スピーキングテスト」教育出版

みんなでできる！ 超盛り上がる！ 算数パズル・ゲーム60

岡山市立建部中学校 校長 松浦敏之

著者 松浦敏之

発行所 明治図書出版株式会社

発行年月日 2020年1月9日



1 はじめに

私が数学パズルに興味を持ったのは今から20年前で、勤務校の校長に中四国研究大会の発表者を押し付けられた？ことからです。研究など無縁だった私にとって、一筋の希望の光となったのが、「数学パズル事典」(上野富美夫編 東京堂出版 2000年)という一冊の本との出会いでした。

この本の内容などを参考にして、当時の「選択授業」の中で数学パズル・ゲームの実践を行い、その取り組みを大会で無事発表することができました。

数学は「数が苦」の授業と思っていた生徒がまるで「数楽」のように、生き生きと考え発表する姿に本当に驚きを覚えました。これを契機に、数学パズルの奥深さと面白さにとりつかれていきました。

そして、2016年に小学校長となり、初めて小学校勤務となりました。そこで自作の算数ゲームで授業に参加したり、家庭での自由課題として算数パズルを出題したりした小学生との交流は本当に楽しいものでした。

中学生以上に素直に面白がって取り組む姿を見て、新学習指導要領で求められている「主体的に学習に取り組む態度」とは、これだと実感しました。

この本は小学校の教員向けとして作られていますが、掲載している算数ゲーム・パズルは、該当学年以上の知識があれば、中学生を含めて誰でも考えることができ、楽しむことができると思っています。



小学一年生でもできるかもしれないけれど、中学三年生でもできるとは限らない問題です。中学生にとっても、彼らを数学の学びに向ける導火線になるはずですよ。

ぜひ、中学校数学科の先生方にも手に取っていただき、授業のちょっとした合間にアレンジするなどして活用していただきたいと願っています。

(明治図書「数学教育2020年3月号『自著を語る』より抜粋)

2 本書について

○構成について

本書は、授業で使うことのできる算数ゲーム・パズルを1～6年の各学年10問ずつ計60問掲載しています。

また、それぞれの問題は、「児童用ワークシート」1ページと「答え・解説」1ページで構成しています。

○問題について

問題の学年や単元名については、平成27年度版「わくわく算数」(啓林館)の単元名を使用していますが、「いつから指導できるか」という指導上の目安としてつけている程度ですので、その学年以降であれば、いずれの学年でも使用できます。

ただ、学習内容としてはできることになっていても、教材として最適の学年とは限らないので、児童生徒の実態に応じて使用してください。

また、それぞれの問題の「児童用ワークシート」は、複写して児童に配布されることを念頭に、当該学年までで学習する漢字を使用しています。

○答え・解説について

「答え・解説」は、先生方が読まれることを念頭に記載しています。

また、1ページという制限の中での記載であり、丁寧な説明となっていない問題もあります。

○使用方法について

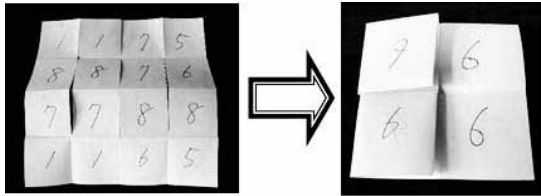
問題の「児童用ワークシート」をA4等に拡大複写し児童に配布するなどして、授業用教材や自由課題等として使えるようにしています。

なお、明治図書のサイトには、本書の電子版(書籍版より若干お安くなっています)もあり、複写し印刷もできるようです。

3 内容について

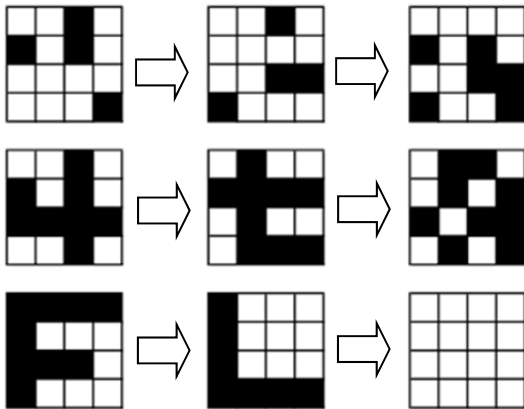
1年

たして9のパズル
 ばばぬきたして9 しんけいすいじゃくたして10
 たしざんバトル たしたらおなじさんかく(1)
 たしたらおなじまる T字パズル タングラム
 すうじパズル(1)(2)



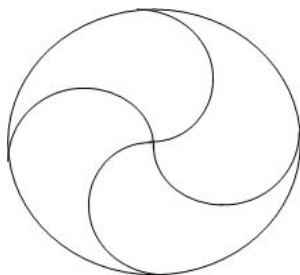
2年

たしたら同じ三角(2) ブドウ算
 オリンピックのはたパズル ひき算でゴー！
 たして29 10ゲーム(1)
 三角形をたくさんつくろう おれてむすんで
 次に来るのは？ 四角形をつくろう



3年

計算トランプドボン 計算ファイト！
 数のクロスワードパズル たして15になる整数
 $\times + \div -$ すごろく 消えた20円
 数えぼうを動かそう 数えぼうで正三角形を
 コンパスでお絵かき めぐる数



4年

ふしぎな計算 折り紙で正方形をつくろう
 4つの4で計算しよう 面積が増える正方形
 正方形と長方形に分けよう 表も裏もない帯
 平行四辺形はいくつある？ 何ができるかな
 10ゲーム(2) 〇〇年をつくる計算

今年、西暦 9 8 7 6 5 4 3 2 1 年です。

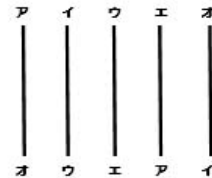
5年

美しい計算 どんな数でもわりきれぬマジック
 25ゲーム 長さのわからない長方形の面積
 折り紙で正三角形をつくろう ラングレーの三角形
 正方形をつなげよう(1)(2)
ルールを見つけよう マッチぼう12本でつくろう

1,11,12,1121,1321, ,132231,...

6年

数字当てマジック お宝そうさく
 仲間に分けよう 最短きよりを求めよう
 面積は何倍？ 100円玉を回そう
 魔方陣をつくろう もも太郎のオニ退治
 予言運命ゲーム あみだくじをつくろう



4 算数・数学の楽習応援サイト

中四国研究大会の発表者となった頃からインターネット上に「数楽パズルの道」というサイトを作って研究の成果を掲載したり、当時放送されていた「たけしのコマネチ大学数学科」の非公式サイトを作ったりしていました。

ここ数年更新できていなかったのも数学パズルのサイトは閉鎖したのですが、今回の新型コロナウイルスでの臨時休業中に「算数・数学の楽習応援サイト」として、算数ゲームや新たなパズルなど内容を新たに、Youtube動画を加えるなどして復活させましたので、是非一度ご覧ください。(右のQRコードをスキャンしてください)





ふるさと風土記矢掛

退職者 鳥越 昌
著 者 鳥越 昌
発 行 人 自費出版
発行年月日 2019年11月1日

I はじめに

① 執筆の動機

中学校の社会科担当教師として在職時代に、歴史・地理分野の教材として学区の郷土資料収集と実地調査を行い、副読本を作成したことがありました。これは生徒にとって身近なもの、既成の知識を改めて見直すきっかけとなり、学習への意欲関心を深める効果があり、家庭では保護者の関心もよびました。こうしたいきさつを踏まえ、ふるさと矢掛の今まであまり知られていなかった側面に触れ、より多くの方々の関心を深めていただき、ふるさとをより深く広い視野で知る手がかりになればと考え執筆した次第です。



B6判 101頁

II 内容の概略

内容は下記のとおり「旧宿場町矢掛」、「地名は語る」、「ぶらぶら見てある記」、「わが町 峠シリーズ」に分けて記述しています。

① 旧宿場町矢掛

旧宿場町の歴史的側面は多くの書籍がありますので省略し、宿場町発達の基盤となる地形的特色（自然堤防・後背湿地等）、歴史的町並み残存の景観、恵まれた浄水を生かした産業の変遷、明治以降の矢掛等を記述しています。

矢掛の町並を見下すように、北方に横たわるのが高妻山地で、その南麓には弥生から古墳時代にかけて多くの遺跡が残されており、これら先住民の営みが後の矢掛へと育まれていく高妻山麓は「ふるさと揺籃の地」といえます。

この高妻山地の南麓は古代山陽道が通っていたと考えられており、その名残として駅家から転じた「江木」という地名が残されていると推察されています。この高妻山地から小田川に向かって流下する和田川、内神

川等の小溪流が山地から土砂を運び扇状地を形成しています。この扇状地の土地利用を見ると扇状地の要に当たる山麓一帯は古くから集落が、扇中央から緩やかな扇端部に至っては水田、やや高い山麓一帯は畑地がそれぞれ発達しています。そして山麓一帯にはこんこんとわき出る泉があり、三成の七つ井戸として知られ古くから集落発達の基盤となっていました。

次いで宿場町として発達した矢掛の古い町並みのルーツをたどると、それは小田川、美山川、星田川の三河川が「生みの親」だと言えます。この三河川は上流から洪水のたびに大量の土砂を運び、合流地点に運ばれた土砂が積もり積もって堤防状の地形を形成、これが自然堤防です。この自然堤防上に形成されたのが古い矢掛の町並でした。自然堤防は平水時には水はけがよく、浄水に恵まれていることから次第に人が住みつくようになり、江戸時代に山陽道が堤防上に整備されると矢掛は宿場町としての機能を備えることになったのです。

しかし、自然堤防は洪水時には浸水の危険性は避けられず、そのため町家の建設には浸水防止の工夫が見られます。その一つ、町家の基礎部分に石垣を組み、建物を一段高くしており、町家の玄関まで石段が二段三段と築かれています。こうした石段は商店街の北側の裏町に行くとさらに顕著に見られます。自然堤防の北側は水はけの悪い低湿地でこれを後背湿地と呼びます。後背湿地に臨む場所では、浸水防止のため高い石垣を築いています。現在それが残されていて今も見ることが出来ます。浄水に恵まれていることから矢掛は水関連の産業が発達しました。即ち大量の浄水を必要とする鋳物、豆腐、酒、醤油、染め物等は江戸時代から、製麺、焼き麩等は明治時代から発達発展し、近隣の町村の需要に十分こたえるこ



後背湿地に臨む石垣

とが出来たものです。しかし、現在は僅かに醤油と焼き麩にその名残を留めているにすぎません。同じ運命をたどったものに河川の運んだ粘土が瓦の生産に利用され、歴史のある寺社の屋根の鬼瓦などにその存在を留めています。



昔の酒屋の井戸

明治維新以後、宿場町・交通の要地としての機能が失われ、さびれる町勢を挽回するために努力したのが県立中学校誘致でした。その努力が実を結び、明治35年、県立矢掛中学校が設立され矢掛は教育の町として近隣の市町村はもとより台湾など海外からの学生も多く在学し、教育の町として発展し現在に続いています。

現在の矢掛は、宿場町としての本陣・脇本陣が残り、昔ながら町家風景・(虫籠窓・格子、むくり屋根等)が保存され、伝統的な名物柚餅子等が今に町の風情を支えています。



むくり屋根



虫籠窓

② 地名は語る

現在、矢掛町内に残る地名のうちから、その土地の歴史・地形・産業を知ることの出来る17の地名を取り上げ、地名の持つ情報の大切さに注目しました。

まず、地形に由来する地名として尾崎、奥迫、峠等があり、元の川の氾濫原に由来する西沖や東沖、道路の湾曲により名付けられた大曲は目で見てわかるのです。

次いで歴史を知る手がかりとなるものに奈良時代の瓦が出土する瓦谷や前述した古代山陽道の駅家を暗示する江木や中世の地名を意味する上川内(垣内)、江戸時代から鋳物業に従事していた家の屋号からついた金谷、中世から江戸時代に栽培されていたと考えられる赤米栽培田を表す大唐田など地名から米作の情報を伝えている地名が残されています。



道路が直角に曲がっている状態を示す地名

さらに、産業面では江戸末期から明治時代にかけて山間の溪流沿いに発達した水車集落に付けられた地名が車谷あるいは水車谷です。その場所は東三成の大谷川、川面の星田川の支流大倉川に見られるものです。この地名がつけられた由縁は、



太唐米栽培の名残

播州から素麺製造の技術が前述の地に伝わり、その原料となる小麦粉を生産するための水車を設置する場所として前述の山間溪流が選ばれたことによるものです。当時は企業水車のことを一般的に「車」と呼んでいたことから、車谷あるいは水車谷という新しい集落地名が生まれたのです。地名にはこのように今は姿を消した地場産業の姿を伝えるものがあります。また、歴史上の人物に由来すると考えられる僧都という地名が矢掛町小林にあります。これは奈良時代に法相宗の名僧として名高い玄賓に由来するものです。その玄賓が小林に来て水車を伝えたという伝説が現地に残されているのですが、確証はありません。「そうず」にはいろいろな意味が含まれており「僧都」、「添水」、「惣津」、いずれも「そうず」と読み、いずれも水に関係したものです。特に添水は獅子脅しの事で小林に伝えられたという水車はこれかもわかりません。

③ ぶらぶら見てある記

町内各地の路傍や神社等に残されていて、現実には

多くの人々から忘れ去られている道標、牛供養塔（万人講）、ひっそりと誰にも知られないような石碑等、設立当時の世相が読み取れるもの12か所取り上げています。車社会の時代となって日常生活から縁遠くなったかつての道標、多くは道路改修のため移動か、さもないと道路舗装のため、地下に埋められているものが多くあります。

しかし、これらの道標は設立当時の交通路を伝える文化財です。同じ役目を果たしているものが牛の供養塔です。トラクターや耕転機の発達する以前、農家の重要な労力を荷ったのは牛でした。それだけに農家では牛を大切に育成し、死ぬと手厚く葬ってその供養塔を建てたものでした。それも同じ地域の農家が相互援助の気持ちから、いくばくかの資金を出し合い牛の新規購入費用と供養塔の設置に協力したのでした。そして供養塔には道標となる指標が書かれていて、供養塔設置時代の交通情報や当時の農家社会の事情が分かります。



万人講

その一例が写真の供養塔で、松山往来に設置されているもので、「万人講」と陰刻され、その下に牛の姿が陽刻されていてその右下に「右ハ新本、左ハ高梁」と刻まれ、右側面に「世話人塚原講中」、左側面に「大正十五年十二月 施主松永太三郎」と記されています。

さらに、一般的にはなじみが薄いものですが地理的分野の学習の参考になろうかと水準点をとりあげています。その場所は矢掛神社の前と吉備大神宮前でともに一等水準点です。この他、江戸時代の念仏碑や神社昇格の記念碑などの信仰を偲ばすものも取り上げています。



水準点

④ わが町 峠シリーズ

盆地に発達した矢掛の町は、東西は小田川沿いの平坦な道路で交通可能でした。たが、矢掛の南北は高妻山地・遥照山地に阻まれて峠という交通の難所を通過しなければなりません。その峠を通して矢掛と他地域の繋がりや、その峠のみに見られる役割や特色

を9か所の峠にわたって記述しています。

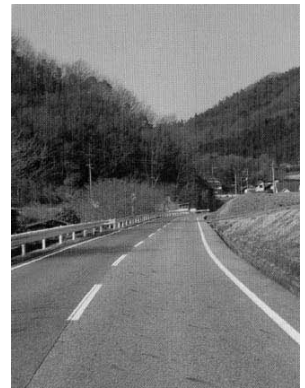
矢掛と隣村を結ぶ物資の輸送に大動脈の役割を果たしたのは、矢掛から南の玉島港へ向かう富峠と北の松山（現在の高梁市）から矢掛に入る玄関口に当たる位置の神子ヶ峠でした。これらの峠を通過したのは玉島から海の産物、松山方面から山の産物でした。

また、人が歩いて越える狭い山道の多くの峠には隣の村との交流や牛馬による物資運搬の他、通学路としての役目を果たした峠もありました。それは矢掛と新本を結ぶ新本峠、同じく矢掛や山田と鴨方金光を結ぶ大峠、美山村から矢掛の小林を結ぶ琴峠はともに旧制矢掛中学校や金光中学校への通学路でした。風雨の日も厭わず徒歩通学した当時の学生の勉学意欲の強さを偲ばせる峠でした。

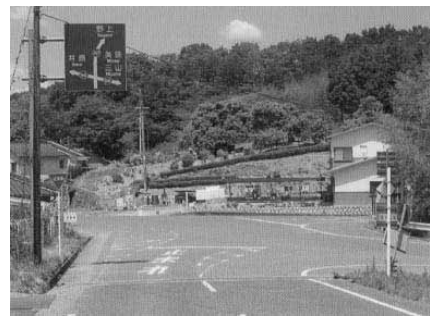
峠には地形がそのまま地名になったものもあります。それは美星町星田字田輪です。田輪とは丸い地形がそのまま地名となり標記が同音異字の田輪となっているのです。



富峠の写真



新本峠の写真



田輪の写真

この他、峠を挟んでそれぞれの地域（両麓集落）と姻戚関係が多く結ばれていて、山越えの峠は日常生活に障害とはならず、逆に人間社会の交流を深める役目も果たしたとも考えられます。

Ⅲ 終わりに

矢掛に生まれ育ち、終生、生活の基盤を矢掛に置いた私にとって、矢掛は文字通り「わがふるさと」です。そのふるさとの特色を多くの人々、とりわけ地元の人たち、成人のみならず、将来を担う子どもたちに知ってもらい、これからの矢掛を考える参考になればと願っています。

執筆に当たり、現地調査を何回も繰り返し、自分の目で確かめたものを書き止めておきたかったことと、既に刊行された事項は出来るだけ省略したため、かえって物足りないと思われることもあろうかと思えます。また、取り上げた事項には、日常生活で何気なく使用している地名にも多くの貴重な情報が得られることや、時代の推移とともに忘れ去られようとしている諸々の石仏石碑も大切な文化遺産としての価値があることに気付いてほしてとの思いから取り上げています。これらは全て身近な生活の中から生まれ、残された故郷の歴史を知る手がかりとはして記録して残しておきたかったからです。

業務改善をめざした職員研修の進め方

— メンタリングによる研修の運営を通して —

福岡県粕屋郡久山町立久原小学校
校長 重松 宏明

1 研究をはじめたきっかけ

働き方改革が呼びかけられるなか、学校は業務改善を進めていかなくてはならない。どこの学校も工夫しながら努力はしているが、学校という職場の特異性と業務量が減らないなか、超えていくハードルは高い。

本校は、教員一人一人のライフスタイルにあった仕事ができるようにするというを経営目標にあげている。これを具現化させていく取組の一つとして、新しいスタイルで研修を進めることにした。

具体的には、平成30年度から、これまで毎週火曜日、放課後90分、全教員が参加して行っていた校内研修を一旦止めることにした。そうすることで、この時間を全教員が自由に使える時間とした。授業の時間を減らすことはできない。小学校では、授業の時間以外で削減できる時間は校内研修の時間しかないと考えたからである。しかし、若い先生が急増しているなか、職員の資質・力量を高める校内研修を全く無くしてしまうことはできない。そこで、教育の質を担保しながら、教員の働き方の現状を改善する方策として「メンタリングという研修の進め方」に希望を求め、これまでとはやり方を異にした研修をスタートさせた。

2 主題について—久原小学校のメンタリングの特徴—

メンタリングは、1対1の指導助言活動で、スキル経験が豊富な人間（指導者 メンター）と、スキル経験が少ない人間（被指導者 メンティ）とをペアにして、双方が合意のうえで、スキルの少ない人間の成長と具体的能力の獲得を目指すものである。本校のメンタリングは、以下の約束で進めている。

本校のメンタリングは、**メンターとメンティが、基本、相思相愛であるというのが原則である。メンターに管理職を指名する**ということはないにしている。管理職がメンターに加わると、せつかくの人材育成の場が奪われるからである。よって、メンタリングは教諭どうしで行う。メンタリングは、「私の授業を観て指導してもらえませんか」や「先生の授業を観せてもら

えませんか」といったメンティの声から研修がスタートする。業務が忙しい時に、メンタリングの授業研究をする先生はいない。どの先生も、月行事や年間の行事計画を見ながら、遅くまで残って授業準備することがないような日程でメンタリングの授業研究を行っている。授業前の協議も授業後の反省会も2人で打ち合わせ、都合のよい時間で、それぞれ20分～30分くらいで進めていく。また本校のメンタリング研修では**指導案は書かない**。[指導案に代わるものとして、本校で独自作成した課題選択シート（資料1、2参照）を活用しメンタリングシート（A4で1枚）（資料3、5参照）を作成する。]「〇日までに指導案を書かなくてはいけない」という負担からは少し解放され、メンタリングの授業研究には、これまでよりも気楽にしている。指導案を書く負担感を少なくしたのも業務改善の一つである。また、本校のメンタリングは、**コーチングを基本としている**。ティーチングの指導を控え、コミュニケーションのなかでのメンティの気づきを引き出すことを大事に学んでいく。メンタリングによる研修は、それぞれのライフワークによって研修の行い方に自由度を持たせているのが特徴である。

3 研究の目的

- (1) これまでの一斉型校内研修から研修を自己管理にし、メンタリングによる職員研修に変えることで、これまでの学校業務や職員研修がどのように変わっていくのか明らかにする。
- (2) 久原小学校独自の課題選択シートや指導案に代わるメンタリングシートを開発し、校内研修として成立するメンタリングのシステムを作る。

4 研究の実際

(1) メンタリング研修の手順

授業公開するにあたっては、授業者自身の課題や苦手な部分を自覚化し、課題の解決や改善に向けた授業構想を立てて実践することが大切である。

本校では、教師の指導力を高めるために、教師に想定される課題を書き並べた「課題選択シート」を自校開発した。(資料1、資料2)

久原小学校 課題選択シートA(授業前後用)

※ 達成判断 4…約9割以上 3…約8割 2…5~7割 1…5割未満

	授業における実践的指導力の内容項目	子どもの事実からの判断
授業前(教材研究)	単元計画 ①子どもの興味や関心を大事にした単元構成を工夫することができる。 ②子どもの思考の流れを大切に単元構成ができる。 ③学んだことを活用するよき、発展、習熟まで構想した単元構成を作ることができる。 ④校内研究、あるいは個人の研究テーマを実証する単元計画を作成することができる。 ⑤他教科・領域との関連を図ったカリキュラムマネジメントができる。	①目的意識や課題意識をもって学習に取り組んでいる。 ④目指す子どもの姿と本時の姿や仮説がつかっている。 ⑤ノートや掲示物から、考えやめあてが連続発展している。
	目標設定 ⑥本時の目指す子ども像を明確にし、目標を具体的に設定できる。 ⑦学習指導要領の内容を押さえて、的確な目標を設定できる。 ⑧学習指導要領に示された3つの観点から、目標をかき分けて設定できる。	⑥発言やノートの記述と目指す子ども像とが対応している。
	教具 ⑨子どもの課題意識を誘発する教具、学習具、資料を開発する。 ⑩教科書に示されたものより、よりねらいの達成に迫る新たな教具、学習具、資料を開発する。	⑨～の教具や学習具、資料から、問いをもつ姿が見られる。 ⑩～の教具や学習具、資料から、目指す子どもの姿が見られる。
授業後(評価)	活動構成 ①子どもの課題意識を誘発する活動構成を設定できる。 ②子どもの思考を深め、問題解決に迫る活動構成の設定ができる。	①子どもが問いをもって学習を進めている。 ②子どもの思考が拡散・深化している。
	評価 ⑬新しい単元に入る前に、関係する学習内容の理解や技能について実態を把握するための調査を行い、学級全体や個の実態分析ができる。(診断的評価) ⑭ルーブリック評価(学習の達成度を表を用いて測定する)を作成し、評価することができる。(アクティブラーニングにおける評価) ⑮仮説の内容について、客観的な資料を作成し、授業目標の達成度を考察・評価できる。	⑬自分でできていることと不足していることをとらえている。 ⑭子どもが達成すべき目標を具体的に理解している。

【資料1 課題選択シートA(授業前後用)】

久原小学校 課題選択シートB(授業展開)

	授業における実践的指導力の内容項目	子どもの事実からの判断
展開段階	導入段階 ①子どもの学習意欲や追求意欲が高まる導入を工夫することができる。(動機づけ) ②子どもたちが、学習の見通しをもち、子ども自身でめあてをつくるなど、子どもが主体的に学ぶ授業展開ができる。 ③○○科の基本的な授業づくりと授業展開ができる。(他の教科と比べると授業づくりの自信がないので指導してほしい) ④～に重点をおいたメンターの課題、○○科や領域での示範授業を行う。 ⑤各教科がねらう思考力・判断力・表現力を高める授業展開ができる。 ⑥学習の学び方を大切に授業展開ができる。 ⑦子どもが自己追求する活動時間を保障した授業展開ができる。 ⑧子どもの思考を活性化する活動構成を工夫した授業展開ができる。 ⑨主体的・対話的で深い学びの授業展開ができる。 ⑩授業仮説に基づいた授業展開ができる。 ⑪教師と子どもが一体となった授業展開ができる。 ⑫交流が盛り上がる授業展開ができる。 ⑬ペア交流やグループ交流を効果的に生かした授業展開ができる。 ⑭書く力、ノートをまとめる力を高める授業展開ができる。 ⑮指示を的確に、発問を精選し、教師が話しすぎない授業ができる。 ⑯子どもの考えや学習の内容を、まとめたり線や矢印で関係づけたりしながら、構造的なわかりやすい板書ができる。 ⑰学習意欲が低い子ども、支援が必要な子ども、学習が早く終わってしまう子どもに配慮した授業展開ができる。 ⑱子どもたち一人一人の学習の様子を見ながら、的確な働きかけや支援ができる。 ⑲少人数やT・T指導、グループ学習、ワークショップなど、学習形態を工夫した授業展開ができる。 ⑳子どもの発言を受容し、教師の表情や評価の言葉で褒めたり驚いたりし、子どものモチベーションが高まる授業ができる。(授業流の教師の声かけ・評価) ㉑1時間の授業に山場のある(盛り上がりのある)授業展開ができる。	①どの子どももわかるめあてとまどめになっている。 ②見通しがある子どもがつくためめあてとまどめになっている。 ④～の活動から、本時目指す子どもの姿が見られる。 ⑥どんなことをするのか分かって活動している。 ⑧子どもの思考の拡散・深化がノートや発言から分かる。 ⑨目的をもって互いに考えを聞き合い、新たな気づきを得ている。 ⑩子どもたちの思考の拡散・深化が発言から分かる。 ⑪分りやすいノートの書き方や要点をとらえたメモができる。 ⑫板書から内容のまとまりやつながりが判断できている。 ⑬戸惑ったり分らなくなったりしていた子どもが安心している。 ⑭学習形態の設定が、個に応じて効果がえられる。 ⑮最後まで自分の考えを伝えようとしている。 ⑯子どもの表情が豊かである。
	終末段階 ㉒授業を効果的にまとめたり深めたりする。終末段階でのリフレクションを工夫できる。(リフレクション・評価) ㉓自らの見方・考え方の高まりを自覚できる振り返り活動を行うことができる。	㉒子どもが今日の自分は何をどのようにしたのがよかったかを分かっている。

【資料2 課題選択シートB(授業展開)】

この課題選択シートを使い、以下のような順でメンタリングの準備を進めていく。

- ①メンティは、課題選択シートA、Bの中から自分が改善したい課題を、2つ、3つ選択し授業構想を練る。
- ②メンティは、自分が指導を請いたい先生をメンターに指名し、了解が得られればメンタリングを始める。
- ③メンティは、「メンタリングシート」(資料3)と呼んでいる課題解決に向けた簡単な授業構想を書くシートの①～④まで記入し、記入したシートを使って、なぜその課題を選んだのか、課題解決を図るためにどうすればよいのかメンターと協議し、授業の準備を行う。

久原小学校OJT メンタリングシート 第1回目

年 組 授業者 _____ メンター _____

話し合って、メンターが課題を設定してほしい。

公開日の日時・場所・本時 _____ 月 日 第 _____ 校時 _____

② 組教室 本時 _____

授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

① 題材名 _____

授業の目標を書きます

③ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

④ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑤ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑥ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑦ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑧ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑨ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑩ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑪ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑫ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑬ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑭ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑮ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑯ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑰ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑱ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑲ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

⑳ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

㉑ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

㉒ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

㉓ 授業者の課題や思い、それをもとにどんな子どもを目指すのかを書きま(教科のねらいと異なる)

【資料3 メンタリングシートの記入の仕方】

- (※ メンタリングシートは、書く量においては、非常に簡単なシートで、指導案作成に割く時間を少なくすることで気軽に授業研究に臨めるようにしている。指導案をメンタリングシートに代えたことも、本校の業務改善を目指した研修の進め方の特徴の1つである。)
- ④授業の構想がまとまったら、メンタリングの授業日を教務に連絡し、校内の計画に入れてもらう。
 - ⑤授業日前日に、全職員の机の上にメンタリングシートを配り、教務主任は職員室前面黒板に板書することで、翌日A先生メンティ、B先生メンターで○○科の授業が公開されることを全職員に周知する。
 - ⑥授業参観したい先生は、自由に参観する。

⑦授業後、メンターとメンティ、2人の都合のよい時間でリフレクションを行う。

⑧リフレクション後、メンティは、メンタリングシートの⑤（メンターから指導してもらった内容）を、メンターは⑥（授業の評価やメンティに指導した内容）を記述し、全職員に配布し指導内容を共有する。メンティが望めば2回目、3回目と同じペアでのメンタリングが続く。



【資料4 メンタリングの様子】

久原小学校OJT メンタリングシート		第3回目	
なのはな3組	授業者(メンティ)	金本 先生(メンター)	田代 先生
公開日の日時・場所・本時		6月5日 第5校時 なのはな3組教室 本時 9/9	
教科「単元・主題・題材名」いくつといくつ(1年)			
(主眼)		(授業設定の意図)	
1年 共通:10の補数を考え、10の合成・分解ができる。		前回のOJTでは、数までの授業の仕方を改めて、指導していた。その際、カードや学具を用いて授業を行ったが、それが毎回の授業に当たってなかった。必然性のあるものではないという課題が残り、今回、その課題を克服するために、再度授業を組んだ。	
(本時、特に高めた項目)		判定基準 4~9割 3~8割 2~6割 1~5割未満	判定(4~不可)
項目番号	シートの構成力から2~4択選択又は具体化、焦点化する。	授業者	メンター
A⑧	1時間集中して取り組むことができるように、①カードそろばんの操作②おなげゲームなどの体験活動を設定することができる。	4	4
B③	10の補数を数として覚えるだけでなく、カードを使って視覚的にとらえられるような活動を設定することができる。	3	4
C⑨	随時や不規則美音に適切に対応し、学習のルールを決め、徹底させることができる。	3	4
授業・リフレクションを終えての「振り返り」と「次回に向けて」			
前回の研修を受けて、今回は逆式ではなく1年生のみでの学習を行いました。授業種別部分から一緒に考えていただき、特別支援の観点からいかに配慮をいかに考えたか。教えていた点の中には以下2点でした。一つは図的な表現方法です。A君は、まだ数字の読み方が曖昧でした。そのため、数値の数字のプリントカードの両にも貼むことができました。良い気持ちがあるのに読み、気持が伸びていました。一方A君はブロックの数など、見て判断することは強かったのですが、本時はカードを数字カードではなく、ブロックのカードに切り替えて行いました。二つ目は数直線の整備です。前回の学習では、二つの学年が同時にスルースに学習できるように整えたつもりでしたが、図解が早く終わる手が空いた時に、整理をしてしまったり、ふり返りの段階でふらふらと動いてしまったりがありました。そのため、今回の学習では、図解を整理し、順にどこに整理していいのかを示しておきました。すると、口頭で指導することなく、自然とこの場で整理をして、次の活動につなげることができていたように感じました。整理している児童について注意ばかりをしていますが、自然と良い環境、つまり学習しやすい環境を作ることが最も大切であると痛感しました。今回、同じようにもう一度リベンジをしたことで、こちらの手立て次第で、子どもたちの姿が変わるということを実感することができました。これからは、授業一人一人を細かく見取り、その上で支援の方法を考え、相談して行きたいと思っています。			
授業・リフレクションを終えてのメンターから			
今回、リベンジOJTということで、1年生2名の算数科「いくつといくつ」の授業を実施しました。前回の反省、改善点を全て授業の中で試みましたが、子どもの姿が何となく変わっていった。先生自身も、実習で授業をさせていただいても実施した45分間だと感じました。授業後に話し合ったのは、活動(ゲーム)した後のプリントの内容でした。本時の活動は、おなげゲームをして、1回目と2回目の点数を合わせて10にするという内容でした。活動後のプリントは、「ブロックのイラストの数を数えていくつといくつ」を答える問題でした。A君は、ブロックのイラストを「1, 2, 3...」と数えながら、数字で書いていました。大切なのは、数をパッと答えられるようにすることです。イラストの手がかりにして、いくつといくつとするよりは、「9と1で10」と問題を出した方が、本時の活動となりがちでした。そして、答えが分からない場合は、具体的な操作(そろばん)を通して答えを導く方法も考えたこと。後々に具体的な操作(そろばん)を代わりに、数字だけで答えられる力(ソロバン)と「浮かぶ(状態)」を付けていくことが大切であるということも話し合いました。授業後に、金本先生が「場の設定や指示がなくても動けるように、環境を整える支援をすることの大切さを知りました。これからは、子どもが「いくつ」でどんな手順でなにするのか自分で分かるように視覚的な情報(居る場所に印をつけておく、後輩に手順を示すなど)を用意するだけでも、子どもたちの姿が変わるということを実感することができました。これからは、スタート地点に立ちました! これからの日々の実践の中で、実践を振り返りながら子どもたちの「分かった!」につなげられるように一緒に取り組ましよう!			

【資料5 研修の過程と研修の成果をまとめたメンタリングシート】 ※1枚にまとめるのが約束
(2)本校が実践しながら開発したメンタリング

①フリーメンタリング

本校の基盤となっているメンタリングである。メンティが、学級経営や学習指導等において、日頃から、「人として尊敬している」「教師のモデルとして目指している」「教科等の専門性に長けている」などの理由において、この先生から指導を受けたいと思っている先生にお願いに行き、了承を得て実施されるメンタリングである。メンティの声からメンタリングがスタートするという典型的な型である。

②学年内メンタリング

学年内の若い先生が先輩の先生から学ぶ時に行いやすいメンタリングである。同学年で行うので、時間の調整がつけやすいといったメリットがある。

先輩に授業を観てもらい、指導を受ける場合が多いのだが、本校では、メンティの要望やメンターの判断で、まずメンターが授業を観ることから始まる場合が多かった。

同学年内でメンターとメンティの関係になるので、大きく2つの面で効果を上げていると感じた。

1つは、メンティにとっては学級経営や子どもたちの育ちの状況などを、学ぶことができる。メンターの先生の授業を観てもらえば、メンティは自分の学級と先輩先生の学級とを比べて、学級の雰囲気や教室の掲示物、子どもたちの書く力、話す力、話し合う力など子どもたちの力を感じることができる。

2つは、メンタリングを通して、授業を行った教科や単元の理解を、メンター、メンティとも深めることができる。教材研究や授業づくりを深めていくことに効果的である。

③リバースメンタリング

年齢や経験年数が逆転して行うメンタリングを本校ではリバースメンタリングと呼んで実施している。メンティを経験することが少ない先生が、自分があまり得意としていない教科・領域について、学校内で見識が深い先生をメンターに指名する時、リバースメンタリングとして実施されることが多い。メンタリングでは、メンティが学ぶ研修というイメージがあるが、メンティとメンターのどちらの立場も経験すると、「メンターの方が勉強になる。」という先生方の声が圧倒的に多い。特にリバースメンタリングでは、先輩の先生に対して指導することになるので、メンティ以上に勉強せざるをえない。教師はどの先生も責任感が強くプライドもある。人に指導するためには、それなりの

勉強をして望むというのが、どの先生にも生まれるようで、メンタリング終了後、感想を聞くと「今回、めちゃくちゃ勉強しました。」というような声がたくさん聴かれた。

このような勉強の仕方こそが主体的な研修であり、これまでになかった研修スタイルである。特に**伸び盛りの中堅の先生たちには、メンターとなって人に話をし指導する**といった経験が重要だと考える。

5 研究の評価

業務改善とメンタリング研修について評価を行った。

【業務改善についての評価】

①「久原の時間」のよさを感じるか。

※ 本研究をはじめまで、毎週火曜日 15 時 15 分～16 時 45 分まで全職員で一斉に行っていた校内研修の時間を、年休も含めて職員が自由に使える時間にした。その時間を「久原の時間」と命名している。

◇感じる 95% （・は教師の感想）

- ・日常業務が多いなかで、学級のことや学年の打ち合わせに使う時間ができるのはありがたい。
- ・年休がとりやすくなった。

②自分のライフスタイルに合わせて研修できたか。

◇できている 75% （・は教師の感想）

- ・自分と相手の都合のよい時間で打ち合わせを進めたり、逆算をして動いたりすることができている。
- ・自分は遅くまで学校に残れないので、自分達の都合のよい日程で研修ができたのはとても良かった。

【メンタリング研修についての評価】

①これまでの教科・領域を研究対象にした主題研究と比べて満足感、充実感は得られましたか。

◇得られた 80% （・は教師の感想）

- ・メンティとして自分が学びたい教科を学ぶことができるので満足感が高かった。また自分の得意な教科以外でもメンターを頼まれることが多く、自分自身のスキルアップにも繋がった。
- ・学びたい先生の授業、学びたい教科の授業、自分と同じ課題の改善に挑戦している先生の授業など、自分で参観したい授業を選択でき、多くの先生の学級経営や授業技術を知ることができて良かった。
- ・リバースメンタリングで先輩の先生から、「よくわかったよ。勉強しているね。刺激をもらったよ。」という言葉をもらい、うれしかったし、もっと頑張ろうという気持ちが高まった。

②研修したことが日々の授業改善、学級経営に生かされたか。

◇生かされた 85% （・は教師の感想）

- ・これまでの勤務校では、体育や理科は主題研究の教科としてなかったのが、学ぶ機会が得られてよかった。
- ・従来の主題研究に比べて、気軽に取り組むことができるので、1 回で終わるのではなく継続して指導してもらえるのがよい。
- ・30 年教師をして、はじめて音楽の授業を指導してもらった。授業のポイントを得ないでこれまで授業をしていたことがわかり、今回のメンタリングは、大変勉強になった。

6 研究のまとめ

業務改善について超過勤務の時間を減らしていくということは、管理職として当然意識しておかなくてはならないが、研修の在り方の改善ということも大きな業務改善である。メンタリングの研修には次のようなよさがある。

①授業に関する自身の課題を改善向上させるために授業研究を行うようになり、自分の授業力を高めていく**即効性のある授業研究**に変わった。

②研究教科が決められていないので、これまで校内研修ではあまり研修することがなかった音楽や学活などの授業研究も公開され、**全教科・領域で幅広く授業公開が行われ**、自由に参観し学べるようになった。

③メンタリング研修は、メンティが学ぶことは勿論であるが、メンターがメンティに指導する場面が与えられることで、メンティの課題を自ら勉強し、授業を観る力、分析する力、創りあげる力を高めている。**メンティよりもメンターに力がつく**。スキルの高い先生ばかりにメンターをお願いしては学校は成長しない。若い先生の力を信じ、人を指導する場を早く与えることが大事である。学校のなかに指導力のあるエースをたくさんつくるのが学校経営を楽にする。メンタリング研修には、人から教えてもらうことで育てる、人に指導する場面を与えて育てるという2つの人材育成の姿がある。

④メンタリング研修を始めた当初、メンターに偏りが出るのではないかと心配したが、授業公開する回数、他の先生方の授業参観をする回数は、これまでの研修よりも多くなり全員の校内研修として成立している。

あ　と　が　き

日教弘岡山支部は、昭和31年、全国に先駆けて教育研究助成事業を開始し、個人研究、グループ研究、教育研究論文・著書助成事業と順次事業を拡大して65年目を迎えました。これまでに延べ1,676人の方々に総額91,342千円を助成しました。

また、平成5年に、創立40周年記念事業の一環として「教育研究集録」を創刊して以来、本県の教育振興に寄与するべく県下の学校・教育機関に頒布し、今回で第29号の発刊となりました。ご多忙な中、ご尽力された教育実践の成果をお寄せくださいました先生方のおかげだと感謝しています。これらの素晴らしい教育実践の報告が更に教育現場に広がるよう願っています。

今後とも、本県教育の振興・発展を支援するべく、本事業の更なる充実に努めてまいりますので、学校現場等が抱える課題の解決に向けた日々の取り組みや、教材研究等の実践・研究を論文としてまとめられ、多数応募されることをご期待申し上げます。

令和3年3月 教育研究集録 第29号

令和3年3月15日発行

編集 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

〒703-8258 岡山市中区西川原255番地

TEL 086-272-1909

印刷 株式会社 創文社
